大岡政談

講談名作文庫

大岡政談

講談名作文庫

カバー画　生頼範義
装　幀　平野甲賀

大岡政談

講談名作文庫 3

講談社
320

講談名作文庫

320円
0193-433031-2253 (0)

大岡政談

大岡政談

講談名作文庫

講談社

講談名作文庫

3

大岡政談

講談社

目　次

第一話　天一坊

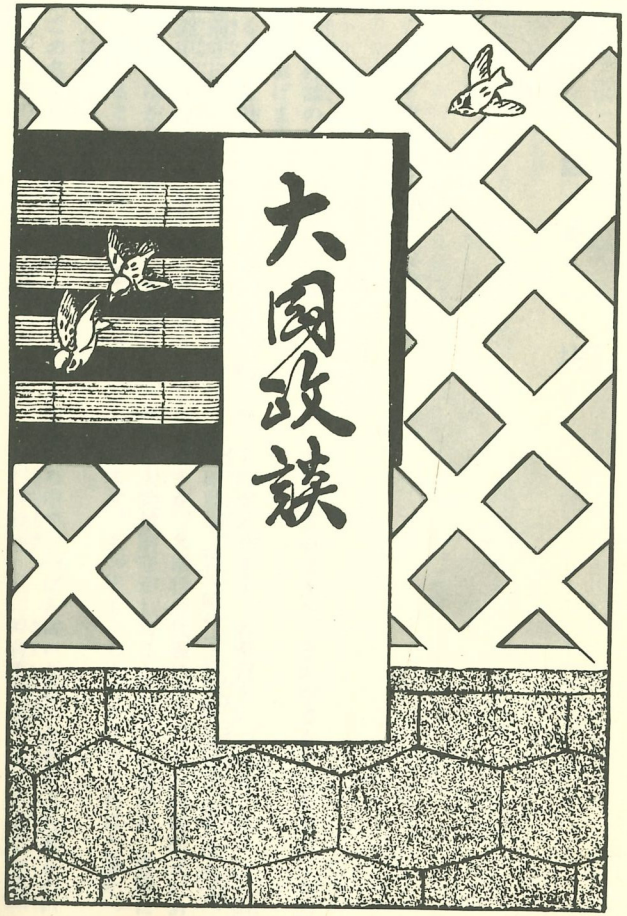
乳母から聞いた身の上……九
大岡、若さまを召し捕る……一八
天下御免の巾着切り……二五
将軍自ら願人となる……二七
因果や、赤ん坊の死……三三
奸智！　他殺と見せかけた老婆の死体……三六
毒殺！　自殺！　周到なからくり……四二
あわや戒行の命は風前の灯火……四四
はじめて落胤を名のる……四七
陰謀の陣第一歩……五一
天忠坊に面会いたす……五七
伊賀亮一味に加わる……六一

本シリーズは、昭和29年に小社より刊行された『講談全集』の文庫版選集です。今回の刊行にあたって現代表記に改めました。
〈編集部〉

計画は順調にすすむ……六八
天一坊江戸へ乗りこむ……七二
「ひょっとしたら……」と越前守……七五
越前守に閉門申しつく……八二
思案にくれる主従三人……八六
不浄門の籠ぬけ……九二
大岡越前、覚悟の上申……九七
主税の頓智で開門す……一〇三
水戸公早朝のご登城……一〇七
ぬかりなき捕り方の陣……一一二
天一坊、下におれっ……一二四
伊賀亮と決死の対決……一一九
大岡をおそれる伊賀亮……一二八
二挺の早駕籠紀州へ飛ぶ……一三一
取り調べは難航また難航……一三五
坊主の口から初光をつかむ……一四四
ようやく正体の目星つく……一四九
越前守切腹を覚悟す……一五六
紀州調べの使者帰る……一六一
越前は天下の名奉行……一六五
むじなと狸のだまし合い……一七〇
八つ山仮御殿、祝いの宴……一七三
一網打尽！　悪の華散る……一八〇

第二話　音羽丹七

恋のさや当て三つ巴……一八八
喜蔵の無理難題……一九五
先を越して丹七を勘当……二〇三
なんだい、その悪口三昧！……二一〇
一難去ってまた一難……二一六



彦兵衛があやしい……二一〇
伝助、越前守をへこます……二三一
おとわ姐さんの心意気……二四〇
番頭彦兵衛の変死……二四四
新吉原から急の使い……二四九
どろぼうは上か下か……二五三
ふんどしで喜蔵を縛る……二五七
はて？　この煙草入れは……二六二
欲に目がくらんだ熊吉の刀……二六六
宙に迷う名刀の行方……二七〇
これはしたり、薩摩家の抗議……二七三
八代さまも臨席して大評定……二七五
名判決で大団円……二八一

さし絵　小山栄達

第一話　天一坊

乳母から聞いた身の上

大岡政談の中にはいろいろ面白いお話が多いのでございますが、その中でもっとも有名なものを申しあげます。

なんでも物事には、その人についた徳というものがあります、名奉行といっても、なにも大岡越前守に限られたものではない。鎌倉時代では青砥藤綱、徳川時代では根岸肥前守、松野河内守、曲淵甲斐守など、みな名奉行の名をはくした人ですが、名奉行の代表にはいつも大岡越前守があげられ、ほかの奉行の裁いた名公事でも、みんな大岡越前守がしたことのように思われ、書物にも書かれるというのは、みなその人の徳でございます。もっともこの大岡さまはそれほど偉かった人には違いありません。

この名奉行大岡越前守が多くの公事をあつかった中で、一ばん憎いと思った者が三人あるといわれた、その三人というのは第一が天一坊、次が村井長庵、三に畔倉重四郎。ここではその第一

に数えられた天一坊についてしばらく申しあげることにいたします。

ご承知のとおりこの天一坊というのは、紀州名草郡平野村の修験者の弟子で前名を戒行といって、紀州家の若殿源六郎後に、八代将軍吉宗公と成られましたこのお方の落胤と名のって、江戸へ乗りこんできた大仕掛けの詐欺師でございます。

この源六郎というお方は、紀州中納言光貞卿のご次男、母君は巨勢六左衛門利清の娘、貞享元年十月二十一日和歌山においてご誕生、元禄九年十二月従四位権少将主税頭に任ぜられ、名を頼方と称せられ、宝永の二年、兄君頼職公薨去について、本家を相続になり、従三位左近衛権中将に任ぜられ、名を吉宗と改められました。ところがこの源六郎殿は、光貞卿の四十一歳の時にお生まれになったので、四十二歳のときがお二歳、これを俗に四十二の二つ子といいます。今日ではそんなことは迷信だといって笑って取りあうものはありませんが、昔は四十二の二つ子というものは育たないというので、わざわざ往来へ捨てたものだそうでございます。表向きは、それを拾って育ててもらうというのでございます。それでは赤の他人が知らないで拾うのかというとそうでない、前からちゃんと縁者と相談ずくで、

「いついっかのなんどきごろに捨てるから、泣かないうちに拾ってくれ」

「よろしゅうございます」

と、約束をしておいて捨てる。それではそれを拾った者が育てるかと思うと、すぐに親のところへ抱いていって、

「いまこんないい子を拾いました、どうかこちらで育てていただきとうございます」

「おおこれはいい子だ、家のお父さんによくにている」などという、にているはずだ、自分の子だもの。そうして育てることにすると、健やかに育つと昔は思ったものです。まったく迷信とは申しながらばかげた話でございます。

源六郎殿は光貞卿の四十二の二つ子、いったん捨てなければ育たぬというので、和歌山の城内、八千代の松という大きな松の根方に捨てることにあいなりました。これを拾いあげる役回りが、紀州家の家来で千石を頂戴している加納将監という人物。内々光貞卿からご沙汰があったのですから、加納将監はおむつという心正しい婦人を乳母として、お育て申すことになりました。

加納将監には二人の子供があったのでありますが、主君の若様ですからこの子は大切に養育いたしております。ところがこの源六郎がなかなか才があります。乳を離れるようになってからというもの、その利口なこと、将監夫婦をはじめ乳母のおむつもおどろくくらい。そのことを登城のたびに将監から申しあげると、光貞卿ことごとくのお喜び、一度見たいと思召すが、いま見てはかえって悪いというので我慢をしておいでになる。

ところが利口な子ほどいたずらがはげしい、もっとも男の子はいたずらをするようでなければ元気がない、あの子はおとなしいなどといって賞められる子は、きっと顔の色が青い、菜っ葉の青いのはようございますが、人間の顔の色の青いのはよくないようでございます。この源六郎殿七歳になったときのいたずらというものはひととおりではない、そのかわり一を聞いて十を知るということをよくいいますが、一度教えたことは決して二度聞くということがなかったと申します。

すると乳母のおむつが、秋の初めごろから病気、かりそめの風邪と思ったのが案外重くなって、今は枕もあがらぬ重態、藁の上から育てられたのですから母も同様、子供ながら心配とみえて、

毎日のように病床へお見舞いなされ、そのたびによく慰めのお言葉、乳母は、涙をながして喜んでおります。ところが死病とみえまして、日に日に病は募るばかり、暮れの大晦日という日には、医者も、どうかおあきらめくださいといって匙を投げてしまいました。

源「乳母、心持ちはどうじゃ」

きょうも源六郎殿お見舞い。おむつは重き枕をもたげ、

む「ありがとう存じまする、若様、毎日のお見舞い、このようなむさいところへおいでは恐れ入ります」源「いやいや苦しゅうない、だいぶ苦しそうじゃの」

む「はい、若様、もう乳母の命も今日か明日、これがお別れで

ございます」

源「さような心細いことを申すなよ、そちのことを思うと、なんにも手につかぬ、これはお父上が御殿から拝領をしてこられたお菓子じゃ、そちに遣わそうと思うて持ってきた」

おむつははらはらと涙をながして、

む「いつにかわらぬお志、ありがたく存じまする、しかし医者も見はなし、ただあの世からのお迎いをまつばかり、せっかくのお菓子ものどへはとおりませぬ」

源「おう、それほどに苦しいか」む「はい……つきましては、今日まで申しあげずにおりましたが、この世をさりまする乳母

が、一言お心得までに若様へ申しあげておきたいことがございます」

源「おう何事であるか」む「ほかのことではございませぬが、あなたさまは加納将監殿のお子さまではございませぬぞ」

源「なんと申す、この源六郎は加納将監の子でないと申すのか、それではだれの子じゃ」む「まことはお屋形さまの若様でおいで遊ばします」源「なにっ」

源六郎殿おどろいておむつの顔をみる。乳母は苦しき息をほっとつきまして、

む「これまではお口止めでございましたが、今申しあげなければ、申しあげるときがございませぬから申しあげます。あなたさまはお屋形さまの四十二のお二つ子、四十二の二つ子は育たぬというので、いったんお捨て申しあげ、それを加納将監殿がお屋形さまのご内命によって、お拾い申しあげ、わが子として今日までお育て申しあげられたのでございます」

源「おうそうであったか、乳母、よく申してくれた、それでは加納将監は予の父ではないのだな」

む「はい……しかしご内命とは申しながら、藁の上からおななつにおなり遊ばす今日まで、ご養育申しあげるにはひとかたならぬご苦心、恐れおおいことでございますが、生みの親より育ての親、将監殿のご恩は海山にも例えがたいものがございます、決してそのことはお忘れ遊ばしてはあいなりませぬ」

源「おうよう申してくれた、しからば将監は家来とはいえ親も同様、その恩を忘れては、人の道に背くというものじゃ、そのことはよう心得ておるぞ」

む「恐れ入りましてございます、紀州家の立派なご次男さま、明日にもあれお館へお乗りこみにあいなりますれば、ご公儀さまのご連枝、やがてご元服でも遊ばして江戸へご登城、そのときのご様子はどうであろうかと、そればっかりを日ごろからこの乳母は楽しみにいたしておりましたが、寿命とみえまして、今はぜひに及びませぬ。この上はお体をお大切に遊ばして、あっぱれご名君とうたわれたもうよう、草葉の陰からお祈り申しております」

またはらはらと落涙をするよう。源六郎殿も、母に別れる心地して同じく落涙、これが遺言となりましてその日の夕方、日が西の端に落つるとともに、乳母のおむつにはこの世をさりました。

大晦日といえば、ただでもいそがしい日、そこへ病人が死んで、明日は元日、正月そうそう葬式もだせない、どうしてもその夜のうちに野辺の送りをすませてしまわなければなりませんから、加納将監方の混雑はひととおりではございません。けれども主君の若様を七歳まで手塩にかけて立派に育てあげた功績のある女でございますから、疎略なことはできません、八方手わけをして手厚い葬式を営みました。

さて一夜明くれば一陽来復、年立ちかえる新玉の春、元朝はいずれの家でも屠蘇雑煮を祝います。ことに武家では新年の儀式はやかましゅうございます。

加納将監方ではご夫婦ご子息うちそろって、いま雑煮を祝おうとしてみると、源六郎殿の姿が見えません。用人の三木佐太夫をよんで、

将「これこれ佐太夫、源六郎の姿がみえぬ、いかがいたした」

佐「はっ、源六郎さまはただ今お庭で凧をあげておいでになります」

将「なんじゃ、凧をあげている……、それは元朝のことであるから、凧をあげるもよいが、まだ雑煮も祝わんで遊ぶというはよろしくない、その方参って、源六郎をつれてまいれ」

佐「はい、かしこまりました」

三木佐太夫お庭へきてみると、源六郎殿一生懸命凧をあげておいでになる。

佐「若様」

源「ああ佐太夫か、凧がめんくらって困る、早くたぐってくれ」

佐「若様、凧をおあげ遊ばすのもよろしゅうございますが、まだお雑煮をお祝いにならない先に、凧をおあげになるということはございませぬ、お雑煮をお祝い遊ばせ」

源「雑煮などは食べとうない」

佐「食べたくないとおっしゃっても、お正月の三が日はお雑煮をお祝い遊ばすのが儀式でございます、第一お父上さまに新年の礼もなさらんで、お遊びになるというのはよろしからぬことでございます。お父上さまがご立腹でございますから、早くおいで遊ばせ」

源「お父上というのはだれのことじゃ」

佐「これはしたり、お父上と申せばあなたさまのお父上、加納将監さまでございます」

源「いや将監は予の父ではない、予の父は紀州中納言光貞卿、加納将監は家来じゃ、新年の礼をのべるならば、将監にこれへ参ってのべいと申せ、今日までは差し許しておいたが、今日は元朝である、今日より改めて加納将監に目どおり申しつける、そうそうこれへ参れと申せ」

佐「へへっ……」

佐太夫おどろいて、将監のところへ飛んで帰ってきて、これこれと告げたから、

将「だれがさようなことを申しあげたか、ご存じになってみれば、そのままでは捨ておくわけにはまいらぬ」

とすぐに加納将監お庭へきてみると、源六郎殿しきりに凧の糸をたぐっておいでになる。

将「へへーっ」

その前へきて平伏をする。源六郎殿じろりと御覧になって、

源「将監、参ったか、よいところへきた、糸目のつけかたが悪いとみえて、右へ傾いて困る、早うおろしてなおしてくれ」将「ははっ」源「それ将監、早うたぐらんと風が吹いてきてめんくらうではないか、それ早うたぐらんか、めんくらうめんくらう」将「はっはっ」

凧より将監のほうがめんくらってしまった。そこで源六郎殿をお座敷へおつれ申して、上座へすえて加納将監改めてご挨拶。

将「お屋形よりのご内命によって、将監今日までわが子としてご養育申しあげました、ご無礼の段は幾重にもお詫び申しあげまする、してこのことは何者よりお聞きおよびにあいなりましてございまするか」

源「きのう乳母より聞いた、しかし将監、決してその方の養育の恩は忘れぬぞ、よう今日まで育てくれた、あらためて礼を申す」

とご丁寧なお言葉。将監も恐れ入って、それからというものは、わが子として育てるわけにはまいりません。

加納将監登城におよんで光貞卿にお目どおり、このことを申しあげる。もうこうなってはいつまでも将監方へおくわけにまいりませんから、中一日おいて正月の三日、あらためて源六郎を和歌山の城内へお引きとりになり、ここに正式に中納言殿若君としてあつかわれることにあいなりました。

大岡、若さまを召し捕る

源六郎殿は和歌山の城内へお帰りになることになりましたが、大変ないたずらですから、どうもお兄さんの頼職という方とお仲がよくない。兄は兄の権をふるい、一方では、なんの兄でもいやしい者の腹からでたものだ、こっちは本腹だという考えがありますから、どうも折り合いが悪い、というのはお兄さんの頼職という方は光貞卿の妾腹のお子さま、源六郎殿のほうはご次男だが奥様のお腹からお生まれになったお方だから、自然そういう考えがでます。

あまりいたずらがはげしいので、伊勢の松阪に紀州家のご陣屋がある、その松阪のご陣屋へお遣わしになることになりました。けれどもいたずらはやみません、陣屋下の町人百姓漁師たちも弱っている。

ある一日のこと、ただお一人で葵ご紋のついた衣類を召して漁師町へおいでになって、

源「これこれ漁師ども、予を存じおるか」

○「はい、存じております」

源「あまり徒然であるから、網打ちに参ろうと思う、網をもって供をいたせ」○「へえ、どちらへいらっしゃいます」

源「どこへ参ってもよい、予の供をして参ればよい、一人や二人ではいかぬ、大勢参れよ」

○「はい……」

紀州の若様のおっしゃることです、厭というわけにはいかない、厭だといえばじきに刀を抜いておどかされるから、そこで網の用意をして十五六人の漁師が供をして、どこへいくかと思うと阿漕ヶ浦。

勢州には阿漕ヶ浦、立殻浦、烏浦、八幡浦などという昔から殺生禁断になっている場所があります。それへきて、

源「さあ漁師ども、ここへ網をうて」

漁師たちはおどろいて、

○「若様、ご冗談おっしゃってはいけませぬ、ここは昔から殺生禁断の場所で、漁師もここへ網をいれることはできねえのでございます」

源「いや苦しゅうない、予をだれだと思う。いやしきその方どもと予と同一に心得ておるか。苦しゅうないからうてっ」

○「困りましたなあ、あちらに番人がおります、ここへ網をうったら、あの番人に捕まります」

源「さようか。……これこれ番人、予は紀州の源六郎である、徒然であるから網打ちをいたす、よいだろうな、悪ければ悪いと申せ、悪いと申せば手うちにいたす」

高圧的です。番人はおどろいて、いいといえば役目がたたない、悪いといえば手うちになるのだから、黙って逃げだしてしまった。

源「あははははは、これでよい、漁師ども、早ううてうて」

しかたがないから漁師たちは、ザブーンと網をいれると、殺生禁断の場所で、ふだん網のはいらない所ですから、捕れること、あげるたびに網にいっぱい、その魚はみんな漁師たちにくださるから漁師は大喜び。初めのうちはこわがっていたが、毎日魚がたくさんもらえるから、しまいには漁師のほうからすすめる。

○「若様どうでございましょう、一件の所へおいでになっては」源「うむ、参るぞ」

とおっしゃって、大勢つれておいでになる、番人は逃げてしまう、魚は獲れるというのですから、漁師たちもいい気になってぞろぞろ大勢ついてくる。阿漕ヶ浦にひく網のということがありますが、こうたびたびになってはすててておけない。そのころ伊勢の山田奉行をいたしておりましたのが大岡忠右衛門忠相。番人の訴えによってこのことをきいて、たとえ紀州家のご次男にしろ罪を犯したことをうち捨てておくわけにはいかぬと、剛毅の忠右衛門、与力同心仲間を召しつれ、駕籠を一挺かつがせて阿漕ヶ浦へきてみると、源六郎殿漁師に指図して網をうたせている。

忠「それっ」

という下知に、役人たち、

役「御用御用」

と周囲を取り巻いた。これをみると漁師たちはおどろいて、

○「それ役人だ、若様お逃げなせえまし」

と漁師は網を放りだして逃げだしたが、源六郎殿は平然として、

源「これこれなんじゃ、御用とはなんの御用じゃ、予は紀州の源六郎である、徒然じゃによって網打ちにまいった、その方どもは何者じゃ」

忠「当山田奉行大岡忠右衛門。憎き曲者、召し捕りに向かったのだ、神妙にいたせ」

源「黙れっ、無礼をいたすと許さぬぞ」

刀の柄に手をかけて引き抜こうとするところを、同心大勢折り重なって取りおさえ、たちまち用意の乗り物にうつすと、中では源六郎殿、

源「これなにをいたす、予は紀州の源六郎であるぞ、無礼をいたすな」

とがたがた暴れるのを、乗り物の戸を堅く閉め、そのまま奉行所へつれてまいりました。一段高いところに大岡忠右衛門、前に源六郎殿を引きすえて、

忠「これっ、その方はいずこのなんと申す者であるか、住まい姓名を申せ。予は山田奉行を勤める大岡忠右衛門と申す者だ」

源「さようか、予は紀州の次男源六郎じゃ、この衣類の葵の紋が見えぬか、その方はめくらであるか」

忠「控えろ、神妙にいたせ」

というおりしも与力の一人、

与「申しあげます」忠「何事じゃ」与「この者は山田町餅屋渡世作兵衛のせがれ作太郎と申す者でございます、両三日以前より発狂いたして座敷牢へいれておきましたところ、今朝その座敷牢を抜けだし、家出をいたしたる者の由、両親親類ども嘆願にいでましてございます。なにとぞお下げ渡し下さるよう願います」

これを聞いて源六郎殿には非常なご立腹。

源「黙れっ、予を捕らえて餅屋渡世作兵衛のせがれ作太郎とは何事じゃ、予は紀州の源六郎じゃ、さようないやしき者ではないぞ」

このとき大岡忠右衛門居丈高になって、

忠「黙れっ、紀州家のご次男源六郎さまはその方のような愚かなことをいたす方ではない、おおかた紀州家若殿のお名前をかたる曲者に相違あるまい、源六郎さまなれば世にも尊きご身分、さほどの方が、法を犯して殺生禁断の場所において、漁をするようなことはないはず。法は天下の大法、上乱るる時は下治まらず、そのくらいのことはまことの源六郎さまご存じないことはないぞ……。紀州家若殿のお名前をかたる憎きやつ、今日は許しつかわすによって、そうそう立ち帰って両親に孝をつくすようにいたせ」

いわれて、もとより利発な源六郎殿、ああこれは大岡のいうところが本当だ、身分を忘れて、自ら法を破ったのは自分が悪かったとお心づきになったから、

源「忠右衛門、その方の意見、喜ばしく思うぞ、追って褒美を遣わす」

忠「黙れ、そうそう下がれっ」

帰りはおとなしくお駕籠で松阪のお陣屋へお帰り。まもなく和歌山のご本城へお帰りになりましたが、それ以来はお兄さまともお仲睦まじく、文武の両道をご修行、家来をよくお慈しみ遊ばすようにあいなりました。

果たせるかなこの源六郎殿がお兄上頼職公ご逝去について紀州家ご相続になって吉宗公。間もなく七代将軍ご幼年でご他界になりましたので、この吉宗公江戸表へお乗りだしになって、八代将軍とおなり遊ばした。

そのときに吉宗公が、

吉「伊勢山田奉行大岡忠右衛門と申する者、今もって勤めおるか」

というお尋ね。お側の者が、

○「はっ、あい勤めおりまする」

吉「あの者に用事がある、そうそう呼べい」

というおおせ。そこですぐに大岡忠右衛門にご沙汰になる。これをきいた人々、八代将軍がまだ源六郎とおっしゃった時分に、伊勢の阿漕ヶ浦でふん縛って気違い扱いにしたから、今度江戸へお呼び出しになったのは、切腹おおせつけられるか、打ち首にでもなるのではないか、それともお仕置にならぬ先に、江戸へ乗りこむとすぐ自分から切腹をするかもしれない、いずれにしても無事ではすむまいという専らの評判。大岡忠右衛門においては伊勢の山田を出立、江戸表へ着くと二日のあいだ休息をして四日めに将軍御前へ伺候。忠右衛門はるか下がって両手をつかえ、

忠「はじめまして尊顔を拝し奉る、まずもってご安泰にわたらせられ恐悦至極に存じ奉りまする」

吉「うむ、忠右衛門か、許す、面を上げい、予ははじめてではない、忘れたか」

忠右衛門恐るる気色なく、

忠「先年、阿漕ヶ浦殺生禁断の場所において法を破りました乱心者がございました、恐れながらその者の面体、上のご尊顔に似ておったかのように存じまする」

吉「いや、そのときの乱心者は予であるぞ」

忠「恐れ入り奉りまする」

吉「しかし忠右衛門、阿漕ヶ浦だけ殺生禁断にいたしても、あれより大海へつづいておるゆえ、魚は海へでれば獲られることもある、よって以来は川上、川下の一定のところをもって殺生禁断といたせ」

とおっしゃった。その以後は川上、川下の一定の場所をもって殺生禁断といたしました。

吉「忠右衛門、これはその方へ当年の褒美である」

とおっしゃって、ご褒美として扇子一対をくだしおかれました。いくら将軍でも、自分の気にいったからといって、むやみに食禄を加増するわけにはまいりませぬ、そのときは扇子一対、まもなく勘定奉行おおせつけられて越前守に任官、つづいて享保二年南町奉行おおせつけられました、時に越前守殿年四十歳、じつに異数のご出世でございます。

天下御免の巾着切り

すると江戸市中の年寄たち、今度の南のお奉行大岡越前守という方、評判のいい方だというが、どれほどの器量があるか、一つ試してみようというので、申しあわせて奉行所へ訴えでたのには、まことに江戸表には掏摸と申して、ゆき違いながら人の懐中物を取ったり、女の髪飾りを盗んだりする、じつに憎むべき者が徘徊いたします、どうぞこれを厳重にご処分を願いたいという。

越前守殿お笑いなすって、自分の家でさえ、ことによっては物のおきどころを忘れて尋ねる者があるなかに、往来ゆき違いの人の懐中物を盗むというは、じつに才知のすぐれた者ゆえ、これ

は差しゆるして苦しくないとおっしゃって、さっそく江戸市中の巾着切り残らずへふれをだして、奉行所へお呼びだしになり、その頭だった者を白洲へいれて、

越「その方どもは人の宝を盗んで今日を豊かに送るというのは、まことに才知の者じゃ、これまでの奉行はことを厳重にいたしたそうじゃが、越前はかえってその方どもの器量を賞めて遣わす。なお今日より天下御免の巾着切りとして遣わすから、さよう心得て、思うまま盗みをいたせ」

○「ありがとう存じます」

越「しかし御免の印が無うてはなるまい、今日より鑑札を遣わすによって、それを失わぬようにして盗みをいたせ」○「ありがとう存じます。してみるともう天下晴れて盗みをいたして差しつかえございませぬか」

越「いかにも何品を盗んでも苦しゅうない、その代わりもし鑑札をもたずして、紙一枚たりとも盗みとったる者は死罪申しつけるから、さよう心得ろ」○「へえ、ご鑑札を用いないで仕事をしたものは死罪でございますか、これは大変なことで、しかし鑑札を持ってる分にゃあかまいませんか」

越「それは鑑札が証拠であるから差しつかえない、必ず鑑札を手元におかんければならぬぞ、ついては鑑札ご印料を一人まえ三分二朱ずつあい納めろ」○「かしこまりました」

とここに人数を改め、計算のうえ何百何十両という金子を奉行所へ納めました。この時越前守殿かねてこさえおかれた鑑札を一々お渡しになる、巾着切りのほうではどんな鑑札が渡るかと思うと、その鑑札というのは、松板を二枚合わしたもので、それに「御免巾着切」という大きな焼印がペタペタ押してある、またお印として別に下すったのは、鬱金木綿の足袋、赤い茜木綿の頭巾

でございます、巾着切りはおどろいたが、持って帰らぬわけにはいきませんから、いずれも頂いて持ち帰りましたが、どんな人なかへでても赤い頭巾を冠って、鬱金木綿の足袋をはいて、大きな鑑札をかついで歩くのですから、いくらぼんやりした者でも、そら御免の巾着切りがきたといって、懐中物や煙草入れに気をつけますから、自然と巾着切りが江戸市中になくなったと申すことでございます。それ以来今度のお奉行さまはご名奉行だご名奉行だといって、江戸中の評判にあいなりました。

将軍自ら願人となる

するとある日、八代将軍吉宗公、大岡越前守をお招き遊ばして、

吉「越前、その方のことを名奉行名奉行と申すようであるが、さようか」越「ははっ恐れ入りましたことで」

吉「名奉行とはうらやましいな、どういうことにして取り調べるものであるか、予は未だその方の取り調べるところを見聞きしたことがない、目どおりにおいて一つ調べてみい」

越「これはどうも意外な御意をこうむりますもの、調べてみよとおおせられても、いわれなきことを調べまするわけにはあいなりませぬ、何事によらず願書をもって願いいでれば、その願書の趣意にもとづきまして取り調べますのが、奉行の役目にございます」

吉「なるほど、願書をもって願えば、どういうことでも是非を明らかにわかつのか、しからば予がただ今願書をもって訴えるゆえ、即座に予を調べてみい」

越前守は恐れながら将軍では調べることはできないというような人ではない。

越「かしこまり奉ります、願書にもとづきまして取り調べます、上様とて越前守相違なく取り調べをいたします」

吉「しばらくそれに控えろ」

とおっしゃって、越前守を下げておいて、そこで吉宗公には願書をお書きにあいなった。ところがご明知のお方ですから、調べに悩むような、むずかしいことばかりを書き立ててなかなか入り組んで、手もつけられないような願書をお作り遊ばし、再びそれへお立ちいでになって、

吉「越前、しからば願書しゅったいいたした。この願書の趣意をもって取り調べてみい」

越「委細かしこまり奉ります」

越前守、取りあげてみると、長い長い願書、ちょっと見たところで紙数の五十枚もあろうというようす。ところが明知の越前守、願書をひらいてみない、それを取り上げただけでかたわらへ差しおいた。

吉「早く調べてみい、さあそうそうに取り調べよ」

と吉宗公しきりにおせきたてのようす。越前守一向平気で、

越「さようおせきたてにあいなっては、越前迷惑に心得ます、取り調べをいたすには順序というものがございます、法を乱しますわけにはあいなりませぬ、調べまするてまえは役人、調べを受けますれば、恐れながら上様とて今日は願人」

吉「そうじゃ」

越「してみますれば、その手続きをいたさんければあいなりませぬ」吉「うむ手続きとはなんじゃ」越「吟味中越前守は上座お許しにあずかりとう存じます、かよう下に控えておりましては、奉行の威光にかかわりますから」

吉「なるほど、もっともじゃ、しからば予は下座をいたして、その方は役人のことであるから上座にあがれ」越「しからば」

と越前守上座へまかりこしてピタリと着座。吉宗公にははるかにさがって手をつき、それへ頭をさげて、

吉「これでよろしいか」越「席はこれでよろしゅうございますが、願人一人ということはございませぬ、差し添えの者が無うてはあいなりませぬ」吉「そういうことを予は知らぬが、差し添え人というのはぜんたいなんじゃ」

越「家主五人組名主代などと申しまして、これは願人一人について、四五名くらい差し添えの者が必要でございます」吉「予には家主はないではないか」

越「無きとのおせでは取り上げるわけにはあいなりませぬ、そうそう家主をおこしらえ遊ばすよう」吉「そうか、これはどうも弱ったな」

と御覧になると、左のところに控えていたのが松平伊豆守。

吉「伊豆伊豆」伊「はっ」吉「その方当日家主にあいなれ」伊「委細かしこまりました」吉「ああ遠江守それに控えおるか、その方名主代にあいなれ、主水正は五人組ということにあいなれ」

大変なことになってしまった。ご老中若年寄が名主代になったり、五人組になったり、伊豆守

は家主をおおせつかって、打ちそろって上様の後につき、頭を下げております。越前守は眼下にこれを見て、

越「願人一同いでまするよう、差し添えの者一同まかりいでたか」一同「ははっ……」越「願人頭をあげろ、面を上げろ」吉「ひどいな、どうもこれは……」

上様しかたがないから、少し頭をあげる。

越「願いの趣、ただ今願書の趣意によって取り調べ遣わす、しかし願人は江戸表はいずれに住まいをいたす」吉「いかんな越前、そんなことをきいては。いずれへ住まいするかと申すが、予は本丸におる」

越「それでは願いたてにあいなりませぬ、名主五人組と相談遊ばせ」吉「うむ、どうしたものじゃ」

伊豆守それへいでまして、

伊「これは越前守が、よほど意地の悪い調べかたをいたします、なるほど将軍家のお住まいを何町何丁目なにがしということはございませぬ、けれども迂濶なことを申しますと、彼に押さえられまするから、これはかよう申したらいかがで。天正八年八月朔日、武蔵国へ権現さまご入国あって、そのみぎりお供をして参りましたのが三河の町人、その町人へくだしおかれましたのが神田三河町でございますから、神田三河町に住まいいたしますと申したら、越前守さまどとがめますわけには参りますまい」

吉「なるほど、そうじゃ三河町がよい……ええ申しあげます、てまえは神田三河町一丁目に住まいつかまつります」越「渡世はなにをいたす」吉「伊豆、またいけない、意地の悪いやつじゃな、渡世はないか」伊「渡世がなくては大変で、無商売は天下の法度、その落ち度をもってお取りおさえにあいなります」吉「つまらんな」

伊「恐れながら、君のお預かりが八百万石と申しますことはよく人の知るところ、八百屋としたために八百屋と読みますから、これは賤業ではございますが、一つ八百屋とおおせられまして、越前を困らしておやり遊ばせ」

吉「そうか……恐れながら八百屋渡世で」越「八百屋と申すのはぜんたいどういう物を商う」吉「いけないな……伊豆、八百屋はなにを売るのだ」伊「青物を商います」吉「ええ青物を売ります」越「はあ野菜を商うというか」吉「さようで」

越「名前はなんと申す」吉「へえ」越「名前はなんと申す」吉「いけないいけない、伊豆、名前は征夷大将軍吉宗……」伊「それはいけませぬ、征夷大将軍といっては町奉行の調べを受けることはできませぬから、徳川の徳という字を取り、徳平ということにして、徳平とおおせられますよう」吉「なるほどそうだな、どうもその方はなかなか気がつく……徳平と申します」越「うむ神田三河町一丁目青物渡世徳平か」吉「さようでございます」

越「うむ、神田三河町一丁目青物渡世徳平頭をあげろ」吉「むやみに呼びつける、いまいましいやつだ……へえ」

越「願いの趣、奉行越前きききとどけ、願書の表をもって取り調べ遣わそうと存じたところ、その方のようすをみると、葵ご紋服を着用いたしておるとは不埒千万、現在十八松平ですら福河津の松平は笠に扇、水江の松平は一輪桜とめいめい葵のご紋を遠慮いたして、わが定紋をつけておる。しかるにその方青物渡世のいやしき身分をはばからず、恐れ多くもご紋服着用をいたして、

当奉行所へまかりいでるというは、上をないがしろにする不届き者、吟味中入牢申しつける」

吉「待て待て、もうたくさんだ、いやどうも越前守その方は才知のすぐれた者だ、願書表をもって取り調べず、いちいち予の姿をもってこれを取り調べ入牢申しつけるとはあっぱれ、さすがは名奉行と申すほどあるぞ」越「恐れ入り奉ります」

席をさがって越前はるか下手へきたって頭を下げ、

越「実は願書の趣意をもって越前ことごとく取り調べようと心得ましたが、かようなるお戯れ同様なことに貴重なる時を費し、この調べについて十日かかるか二十日かかるか百日あまりの日を費すようなことがありますれば、人民ことごとく難儀をいたすことと心得、ご紋服を召されるところのご様子をうかがい、それによって入牢申しつけるという不敬の言をはきましたる段、はなはだ恐れ入り奉ります」

吉「ああこれこれ苦しゅうない、予は戯れにいたし、その方の才気を知らんとせしに、まことに奇妙不思議の明知、そう無うては多くの人民をあずかる町奉行の役は勤めかねるであろう。越前このうえともによくいたせ」

とそのときにも越前へたいして、お提げになったる印籠をくだしおかれました。

越前守大いに面目をほどこし御前を退がったことがあります。そのくらいでございますから越前守さまの名前は上下ともに大変な評判でございます。

因果や赤ん坊の死

この大岡越前守ほどの名奉行が、二十年間勤役中、首を取ってもあき足らぬやつだとおっしゃったのは、前に申しあげたとおり畔倉重四郎に、村井長庵、天一坊の三人、なかんずく天一坊のことについては一時は死を決したほどに苦心をしました。

そのもとはというと、八代将軍吉宗公が、まだ源六郎とおっしゃった時分、お側につかえて万事のお世話を申しあげていた沢野という女にお手がつき、懐妊をいたしました。ある日沢野は源六郎殿の前へでまして、

沢「申しあげます」源「なんじゃ沢野」沢「君のお情けをいただきましたが、懐妊をいたして当月は五月にあいなります」

源「さようか、ただ今はその方も知ってのとおり、まだ部屋住みの身の上であるから、後にこの方の身分のきまりのついたときに申し出ろ、相当の者に取り立って遣わす、これは後日の証拠である」

とおっしゃって、すぐにおしたためになりましたお墨付き、男子なれば取り立て遣わす、女子なれば相当の手当を遣わすという文意、それにみごとな短刀を添え、金子一包みをつけて下しおかれましたから、沢野も喜んで押しいただき、

沢「ありがたきしあわせに存じまする」源「しかし、懐妊いたして、この上人目にたってはならぬから、在所へ引き取って平産を待つようにいたせ、そのうちには予の身の上もきまるであろう、その上にて取りたて遣わす」

沢野も喜んで、その後、表向き病気といってお暇をとって、和歌山の在、平沢村におさんという母親がございます、そのもとへ引きとりました。沢野からこれこれと話をしたから、おさんも喜んで、どうか男のお子様を、おあげ申したいものだと、十月十日のたつのを楽しんでおりました。

そういうことを知らない近所の者は、沢野は奉公先で、若侍か出入りの町人たちといい仲になって子供ができたに違いないと噂をしていましたが、月満ちて生みおとしたのは男の子、やれうれしやと思ったかいもなく七夜もたたないうちに、その子が亡くなった。はっ

と思って血があがったものか、沢野もつづいて冥土へ旅立ち、泣きの涙で光照寺という寺へ葬りましたが、それがために、おさんは一時気が狂ってしまいました。

このおさんは前に山一つ越えた向こうの平野村というところからきた者だからというので、平野村の名主新右衛門のところへおさんを送ってしまった。新右衛門もしかたがないから、座敷牢同様なものをこしらえて、これへおさんをいれておきましたが、いい塩梅にその狂気も治ったので親切な新右衛門、自分の隠居所の小さな家を、おさんに与

えて、濯ぎ洗濯、使い走りをさせ、村の者の情けによって月日を送っておりまするうちに、早やここに十二年、なんのお話もございませぬ。

奸智！　他殺と見せかけた老婆の死体

するとこの平野村に感応院という修験者がある、この感応院のせがれ同様になっている源氏坊戒行という者がおります。中国浪人の菊池なにがしという者が、この子をだいて感応院のところへ参り、つれ合いに死なれて難儀をしているうちに、その浪人も病の床につき、ついにここで病死いたしました。感応院も自分に子供がないから、せがれ同様にして経文を教え、将来は自分の相続人にでもするつもりで戒行という名をつけましたが、目から鼻へ抜けるような利口者でございます。

ある年十一月十五日のこと、朝からちらちら雪が降っております。

感「戒行や、今日はおまえの誕生日で、赤の飯が出来たし煮しめもできているから、毎度世話になるおさんばあさんのとこへ持っていってやんなさい」

戒「はい、お師匠さま、そのつもりでここへつめておきました」

感「そうか、よく気がついた、あのばあさんは鰥寡孤独といおうか、まことにかわいそうだ、いったんは気が狂ったくらい、もうほかに頼るべき者はなし、ただおまえが親切にしてやるものだから、わが子のように思って、毎度ここへきては、なんだかあの戒行さんをみると、私は思いだしては涙がでるなどといって、おまえのことというとなんでも親切にしてくれるから、雪が降っていてさぞ寒かろうが、どうか持っていってやっておくれ」戒「承知いたしました」

感「一日ゆっくり遊んできてもいいぞ、この雪で今日は別に用はないから」戒「いえ、遊んでも参りませんが、酒が好きですから酌でもしてやったら、ばあさんも喜びましょう」

感「ああ、そうしてやりなさい」

支度をした戒行、降り積もる雪をふみわけて参りましたおさんの家。

戒「おばあさんや」さ「おやまあ戒行さん、どこへお使いにいくのだい、雪の降るのにご苦労だね」

戒「なーにお使いにいくんじゃあない、おばあさんおまえのとこへもってきたんだ」さ「おやまあそうかい、なにをもってきて下すったのだえ」

戒「今日は私の誕生日だといって、お師匠さんが赤の飯を炊いて下すって、いつもおまえをかわいがってくれるから、おばあさんのとこへもっていってやれとおっしゃるから、私がもってきたよ」

さ「そうかい、まあ戒行さんありがとうよ、ほんとうにおまえをみるにつけても思い出すも涙の種……」戒「またおばあさん始めた、そんなことをいわずに、今日は寒いから、私がお酌をするからお飲みよ」

さ「ああありがとう、すまないね」

炉端へ煮しめをならべて、おさんばあさん戒行の酌で飲みはじめたが、盃が重なるにつれて、

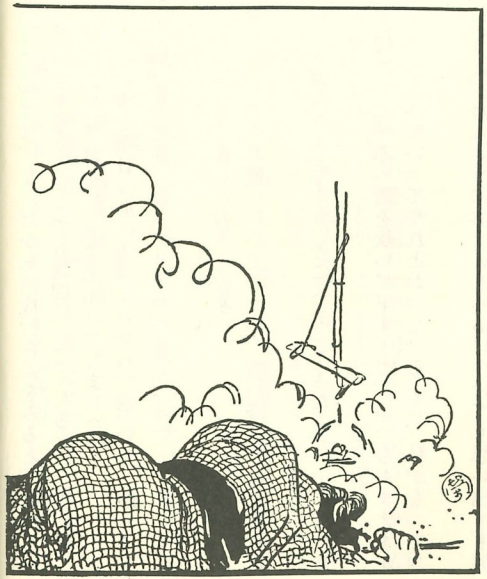
酒飲みにはいろいろ癖のあるものでございますが、このおさんばあさん泣き上戸とみえて、戒行の顔をみては涙をながしている。

戒「おばあさん、なんだって泣くんだえ」

さ「それはね、おまえの顔を見るたびに悲しくってしようがない、というのは戒行さん、おまえは他人とは思われないから話をするが、おまえさんは私の孫の顔によくにている、それも幼顔だが、目鼻だちからその容姿……」

戒「おばあさん、私もいつか一度聞こうと思っていたんだが、おまえの孫というのはどうしたのだい、死んだのかい」

さ「ああ生まれてお七夜にならないうちに死んでしまったんだよ、もし、いま生きていたらそれこそたいしたものだ、ちょっと外へでるにも徒士若党、多くの家来をつれて、下に下にといって歩くような身分……」



戒「あははははおばあさん、酒に酔ったとみえて冗談をいいはじめた、おまえの孫が下に下になんて、そんなばかなことをいって」

さ「嘘ではない、ほんとうだよ戒行さん、私の孫というのは、これこれこうこう」

と残らず話をしてしまった。話をきいているうちに前へ乗りだした戒行が、

戒「それじゃあおばあさん、なにか証拠があるのかい」

さ「ああるとも、私は今まで人に見せたことはないが、たいせつにしまっておいた、おまえは利口者で、手も書けるし、読むこともできるから見ておくれ、嘘でもなんでもない、このとおりの品があるよ」

と渋紙に包んで天井につるしてあったのをおろして、塵を払って戒行に見せたのは、源六郎殿のお直筆で、正徳三年八月、源六郎、沢野へ、花押がしてあるお墨付きに短刀、鞘は金高蒔絵で葵

の紋散らし、鞘を払ってみると、中身は正宗十哲の一人志津三郎兼光の鍛えたもの。

戒「おばあさん、たいしたものだな、なるほどおまえのいうとおり、公方さまにでもなんなさるお方だけあって、私にはよくはわからないが、お手がいいのだろうね」さ「ああそれはたいそうよくお書きなすったということだよ……戒行さん、どうかもう少しお酒を飲ましておくれ、昔のことを思いだしたので、酔が一度に醒めてしまった」

戒「おばあさん、そんなに飲んじゃいけないぜ、体にさわるよ」

さ「そんなことをいわないで、今日はおまえの誕生日、生まれた月日を考えてみるとちょうど私の孫と同じ日に生まれたが、おまえのほうはこうやって修験者になんなさるし、お師匠さまも目をかけて、誕生日だといって赤のご飯でも炊いてくださる、私のほうはその人が、お茶飯になったかと思うと、ああ情けないことだ」

と年寄りの愚痴に返ったものか、涙をながし仏間に向かって線香をそなえ、南無阿弥陀仏と念仏を唱えているようす。

後ろに座って、ずうっとようすを見ていた戒行。

戒「ああ修験者になって、よくなったところでたかの知れたものだ、どうせ危ない橋を渡らにゃあおもしろいことはできねえ、いまこのばあさんから聞いた話が出世の糸口、おれのほかに訳を知っている者のないこの短刀とお墨付き、この品をおれの物にして、悪魔邪神がかばってくれたら、当将軍さまと親子ご対顔、わが子だと一言でもいって下さりゃあ、たとえ天下の相続人にならねえまでも、五十万石と百万石、将軍さまのご連枝、葵ご紋を光らして、御三家同様のお取りあつかい、悪運盛んに首尾よくいきゃあ天下を握ることもできる、こりゃあ一番大江戸へ、乗りだしてみてえものだ」

と、戒行もはじめからそういう悪い考えもなかったのですが、小人罪無し玉をいだいて罪ありと申しますが、おさんばばあの話を聞いてから、にわかにたくらむ不敵の考え。

戒「おばあさん、おばあさん」さ「なんだい戒行さん」戒「向こうのほうから人がくるようだが、だれだろう」さ「どこへさ」

戒「あの向こうの畑のほうへきたじゃあないか」

さ「そうかい、どこへさ」と、しきりに向こうを見ているすきをねらった戒行が用意の手ぬぐい、いきなりばあさんののどへ巻きつけた。

さ「あれ戒行さん、なにをするんだえ」

というのもかまわず、両手に力をいれてぐーっと絞めた、年こそいきませんが男の力、こっちは老婆、ことに酒に酔っておりますから虚空をつかんで断末魔、手足を震わせて息はたえました。死骸をばったり転がして、

戒「雉子も啼かずばうたれまいに、おまえが話をしたばっかりに気がかわり、おまえを生かしておいちゃあ本舞台へ乗りだすことができねえ、ばあさん気の毒だがしかたがねえ、悪く思ってくんなさんなよ」

だれがよく思うやつがあるものではない。このままにしておいてはことめんどうと、死骸を炉端へ引きずってきて、頭を火の中へ突っこんで、おさんが酒に酔って、自分で炉の中へ落ちこんで死んだようにみせかけたのは、あくまで悪才に長けた戒行、することに抜け目がございません。お墨付き、短刀の二品をもっておさんの家を飛びだしたが、そのまま感応院へ帰るかと思うと、

そこは利口者、五六軒村の者のところを遊びまわって感応院へ帰ってまいりました。

毒殺！　自殺！　周到なからくり

翌日になって近所の者が気がついて、戒行がしたとは知らないから、まったく自分で炉へのめって死んだものと思い、名主の新右衛門が先だちになって葬式を営みました。

しすましたと思ったが戒行、それだけではすまさない、大恩を受けた師匠の感応院を、茸汁の中へ毒をいれて毒殺をいたしましたのは、後々の邪魔をしりぞけるつもり、これも戒行がしたとは心づく者はございませぬ、これまた、急病で死んだということになって葬式をすませたのは、検死などという技術のなかったまだ開けない昔のことですからいたしかたございません。

名主をはじめ、村内の者は、戒行に感応院を相続しろとすすめましたが、

戒「ありがとう存じますが、まだ若年の私、三四年おいとまをいただいて、国々を修行をして、そのうえで戻ってまいりとうございます、それまでは村内の方ご一同でこの感応院はおあずかりおき下さいまし」

あくまで殊勝のようすに、そういう悪事をたくらむやつとは知りませんから、名主をはじめ村内一同はことごとく感じ入り、いくらかの餞別を集めてくれる、旅のしたくも十分に、荷物の中深くしまいましたのはお墨付きに短刀の二品、一同に別れをつげて平野村を立ちいでましたのは、

夜明け方にはまだ間があるから、暗うございます。ぺろりと赤い舌をだした源氏坊戒行、

戒「村のやつらは甘いものだ、おれが空涙をながして嘘をつきゃあ、みんな一緒に泣いてさわぐありさま、もうこの先こんなところへくる気づかいもなし、首尾よくいきゃあ将軍さまのご落胤、うまく念願が成就したそのときに、よそながらこの村方へいくらか恵んでやりゃあそれでことがすむのだ、どうやら細工がうまくいきそうだ」

紀州の加太の浦へきかかったのは夜明け方、ドブーン、ドブーンと岸打つ波の音。ワンワンワン、ワンワンけたたましい犬のほえる声。

戒「シーッ、シーッ畜生」

ワンワンワンワンワン、犬も異形のやつとみたか、二三びきあらわれてきてほえついてくるのを、

戒「畜生、なにをほえやあがるんだ」

差していた小脇差、抜く手もみせず、先に飛びついてきた一ぴきの犬の首筋をかけてすばーり斬った、キャンキャンキャンというと、くるくるとまわってばたりたおれる、あとの犬はそれに恐れたか、ほえながら逃げていってしまいました。血をぬぐって鞘におさめ、いき過ぎようとしたが、

戒「まてよ、おれがこれからでていって、戒行の行方がわからねえ、今度こういうことが江戸に始まったと、それからそれと調べられたときに、生きていると思うとめんどうだ、うむそうだ」

なにを考えたか、着ていた着物を脱いで、着替えの着物と着かえ、身につけたのは証拠物の二品だけ、脱いだ着物、所持の品物にはのこらず犬の血を塗り付けて磯端へすて、小脇差と犬の死

骸はどんぶり海の中へ投げこんでしまい、

戒「こうしておきゃあ、おれは人に斬り殺されて、死骸は海へ投げ込まれたと思うだろう、こいつあいい知恵がでたものだ」

と、見えをきりました。

あわや戒行の命は風前の灯火

紀州を立ちのいた源氏坊戒行、それより便船をもとめて肥後の国熊本へまいりましたのは、こうした離れたところで、しばらくようすをうかがおうというつもり。加納屋又助という菓子屋へ奉公に住みこみ、養子同様になって、名も吉兵衛と改めて商人姿二十二になるまで熊本におりまして、ためた金も五百両あまり、それを持って加納屋方を暇をとり、それよりまず大阪へでるつもり。天神丸という船へ乗りこみました。

ところ、四国の鼻へきたときに難風に出あって船はくつがえり、船頭をはじめ乗り合いの者残らず溺死いたしたなかに、戒行の吉兵衛は磯端へ打ちあげられて身を全ういたしましたのは、あくまで悪運の強い男でございます。

それから足にまかしていくうちに、山道にかかってまいりました。

おりしも正月のはじめ、雪は降りしきっておりますからその寒いこと、雪を踏みわけてだんだん山中へはいってまいりました、普通の者ならば腹はへっているし、船や波にもまれているし、寒気に閉じられてここで凍え死んでしまうのでしょうが、徳川の天下に手をかけようというくらいの大胆者、なかなか死ぬようなことはない。だんだんくるうちに、ちらちらみえる灯火さては山家があるとみえる、あれへいって頼もうと、灯火をたよりにきてみると人里離れた山なかの一軒屋。

戒「お頼み申します」「おい」と答えて、でてきたのは四十五六になる目のぎょろりとした男。

○「なんだね」戒「私は熊本の者でございますが、大阪へまいる途中難風にであい、運よく命は助かりましたが、この山道へかかって道に迷い難儀いたしています、どうか今夜一晩とめて下さいまし」

○「そうか、それは困るだろう、こっちへあがんなせえ」

戒「ありがとう存じます」

草鞋をとってうえへあがる。男は戒行のようすをじろじろ見ていたが、

○「おまえさん金でももっていなさるのか」

戒「はい、少々ばかりもっておりますので、うっかりしたところへは泊まれませんから、ご無心を申したのでございます」

○「ああそうか、金をもっていちゃあ険呑だ、この家なら大丈夫だ、なにしろ主人はいま奥で酒を飲んでいる、いずれ明日の朝になったら挨拶をするだろう、疲れていなさるだろうから、こっちへきてすぐにやすみなさるがいい……腹はいいのかね」

戒「はい、すいております」○「すいているならいま飯を持ってきてやる」戒「ありがとう存じ

ます、ついでにどうかお酒を一本……」

○「酒……たいていな者は飯でも遠慮をするものだが、酒までねだるとはなかなか遠慮がないな」

戒「へえ、私は人みしりをいたしません」

○「あははははおもしろい人だ」

一間へ案内をしてその男はでていったが、まもなく飯と酒をもってきてくれる。戒行は食事をおわって、聞いておいた厠へ用をたして部屋へ帰ろうとして考えた。

戒「待てよ、さっき取り次ぎにでてきた男の人相がよくない、この家なら大丈夫といったが、こんな一軒屋にいるのだからろくなことをしているのではあるまい、主人は奥で酒をのんでいるというが、どんなようすだか見てやろう」

耳をかたむけると奥のほうでガヤガヤ話し声がきこえる。もとより大胆不敵な戒行、足音を忍ばせてきた奥の座敷、襖の外にたって、隙間から中をのぞいてみると、あかりをかんかんつけて、正面にいるのは年ごろ三十七八になる目のぎょろっとした浪人、熊の皮をしいてその上へどっかり座りこんで、後ろには刀架けがある、側に槍だの弓、鉄砲などが飾ってある、それと向かいあって座っているのは四十二三になるこれも浪人者、ほかに若い者が三十人ばかりごたごた固まっています。

浪「おい熊蔵、それじゃあその泊まった若いやつというのは、金をもっているのか」○「へえ、四百や五百はもっていようと思います」

浪「そうか、飛んだいい鴨がひっかかったな……お赤川、それではいまのうち、片づけてしまったらどうだ」

正面にいるのは赤川という名前らしい。

赤「いや藤井、待てよ、泊まっているんだ、そう急ぐことはねえ、ゆっくり飲んでから仕事にかかったって間に合う」

藤「いやそうでもねえ、気がついて逃げだされるとそれっきりだ」

赤「そうか、じゃあ酒の肴にそろそろやっつけようか」

とんだ酒の肴があるものです。

見つかってはめんどうと思ったから戒行は足音をしのばせて、もとの部屋へ帰ってくると、なんとおもったかお墨付きを懐に、短刀を前半にたばさみ、きちんと座ってしまった。山刀をとって腰に打ち込んだ二人の浪人、若い者を先にたて、ミシリ、ミシリとやってきて、

赤「おい熊蔵、障子を開けろ」○「へえ、合点でございます」

はじめて落胤を名のる

熊蔵というやつががらりっ障子をあけてみると寝ていると思った戒行が目の前にきちんと座りこんでいるから、

○「やっ、起きていらあ……おい、若いの、起きていたのか」

このとき戒行居丈高になって、

戒「下郎、無礼であろう、下がりおれーっ」

と怒鳴った。

○「なんだい、芝居がかりじゃねえか……下郎、無礼であろう、下がりおれだとよ……頭、野郎生きていますぜ」赤「そうか……おい若いの、なにが無礼だ」

戒「そのほうどもは山賊であろう、われをなんと心得る、かようないやしき姿にて当家へまいりしゆえ、その方どもは予を殺害いたして蓄えの金子をうばわんといたす所存とみゆる。望みとあらば金子はいといなく遣わす。しかし無礼をいたすにおいては、その分には捨ておかんぞ」

○「おやおや大変な騒ぎになってしまった、無礼をするとその分には捨ておかねえとよ、頭」おどろくかと思ったのがこのありさま。赤川六之助、藤井左京の両人、先をこされて少しくおどろいたようでございます。

この顔色の変わったのを見逃すような戒行ではございません。

戒「その方どもよく承れ。今はかような姿をいたしおるが、予は当将軍吉宗公の落胤であるぞ。父上が源六郎の昔、紀州表におわせしころ、わが母沢野にたいしておおせられるには、今は部屋住みの身なるによって、すべて自由ならず、よって平産の暁は願いいずるようにとおおせあり、お証拠物を下しおかれたのはお墨付きに短刀の二品、このたび父上よりのご内命によって江戸表へまかりこす途中、こと表向きになるまでは、人目に立たざるようにとのご注意により、かく下人の姿にやつしおるが、この家に仮の宿りを定めしもなにかの縁、その方どもも、ただ今より改心いたすとあらば、そうそう江戸表へ召し連れ、次第によれば重く取りたてて遣わすが、所持の

金子に心まよい、予に対して無礼をいたすにおいてはその分には捨ておかんぞ、どうじゃ」

もとより快弁の戒行、口から出まかせにしゃべりたてて、次第によらば斬って捨てんと身構えた。この戒行という男悪いやつですが不思議に威厳がある。その様子をじっと見ていた赤川六之助、

赤「へへーっ」

というとそれへ平伏した。頭が平伏をしたから藤井左京も手下の者も同じように、それへ両手をついて平伏をした。

赤「かかる尊きお方と心得ず、おおせのごとくご所持の金子を奪いとらんといたせしは重々の誤り、当将軍家のご落胤とは恐れ入ったること、それがしことは水戸浪人赤川六之助と申する者」

藤「てまえは藤井左京と申する者にございます」

赤「つきましては念のためそのお証拠物拝見おおせつけ下されば、ありがたく存じまする」

戒行腹の中でしめたと思ったから、

戒「おお、不浄のその方どもの手に渡すべきものではないが、しかし念のためとあらば、この所において見せつかわす、付きそいの者どもを追いはらい、その方ども両人、身を清めてこれへ参れ、左なきにおいては見せることはあいならぬわ」

赤「ははっ、もっとものおおせ、恐れ入り奉りまする……やいやいてめえ達は残らず次へ下がれ」

○「へえ」

赤「早くしろ、目どおりかなわぬ」○「頭、まねをしちゃあいけねえ」

手下を残らず遠ざけ、赤川藤井の両人、うがい手水に身を浄めて、ふたたびその所へ参りました。差しだす短刀、お墨付きの二品を見たが、人間はにせものでもこの二品だけは本物です。赤川藤井の両人はなまじ目がきいているだけにおどろいた。二品をそれへ置くと、はっと後へ飛び下がって、

赤「へへーっ……かかるおん尊きお身分とは知らず、先刻よりのご無礼の段、なにとぞお許し下しおかれたく存じます」

戒「うむ、改心いたすとあらば許しつかわす、ただ今よりその方ども両人江戸表へ供申しつけるが、供いたしてまいるかどうじゃ、それともやはりこの山家におるか」

赤「恐れ入りましてございます、てまえどもは身のおき所なきままに、かような山家にあってよからぬことをいたしておりましたが、もとより両人は水戸浪人、生涯山賊にて朽ち果てんこと残念に存じまする」

戒「しからばただ今よりわが家臣といたして江戸表へ召し連れるであろう」赤「へへっ、恐れ入ったるお言葉、なにとぞこれよりわれわれども両人お召し抱え下しおかれ、江戸表へのお供おおせつけられとう存じまする」

戒「うむ、さっそくの承知、喜ばしく存ずる、さらば主従睦みの盃をいたすによって、そうそう用意をいたせ」赤「委細かしこまり奉る」

すぐに長柄の銚子盃を取りいだし、そこで主従睦みの盃。

戒「ときに赤川、六之助と申するは名がおもしろうない、そちは体が大きいから大膳と名のれ」

大「ははっ、ありがたきしあわせに存じます」

戒「藤井は、藤井左京そのままでよいぞ」

左「ははっ、恐れ入りました」

戒「さて両人、改めて申すことがある、近う進め」両「ははっ……」

陰謀の陣第一歩

前へ進んで頭を下げている。

その様子をじっと見ていた戒行、にやりと笑って、

戒「大膳、左京、おれが将軍のご落胤にみえるか」大「なんとおおせられます」

戒「いやおれが将軍家のご落胤とみえるかよ」大「ははあ、みえるかとは……」

戒「あははは、実はおれあにせものだ」大「ええっ」戒「将軍のご落胤でもなんでもねえ、じつは紀州和歌山在、平野村の感応院という修験者の弟子源氏坊戒行という山伏だ」

大「うーむ……おどろいたな、ではその証拠物というのもにせものか」

戒「いやこいつは本物だ、こうなったら残らず話をするが、実はこれこれこういう訳だ」

と、おさんばばあを殺した一条から、師匠の感応院を毒殺した一件、加太の浦で犬を殺して、その血を衣類に塗りつけて、これこれと残らず話をいたしました。

戒「当人はにせものでも、証拠は確かだから、うまくいきゃあ将軍の跡目にならねえ限りもね

え、その覚悟で今日までやった狂言だ、どうだおまえたち、おれと一緒に江戸へ乗りこんで、どこまでも将軍のご落胤としておれの仕事を助けてくれるか、それともだまされたのが口惜しいから、殺してしまうというなら殺してくれ、逃げも隠れもしねえ、二つに一つの返事をしてくれ」

どっかりとあぐらをかいた。あまりのことに赤川、藤井の両人はしばらくのあいだあきれて戒行の顔をみつめておりましたが、

左「おい赤川、世の中に太いやつもあるものだな」大「うむ、おれはおどろいた。……おい、若いの、おまえいくつだ」戒「二十二だ」

大「二十二……まだ二十二でこの様子といいこの度胸、ことによるとこの狂言はうまくいくかも知れねえぜ、どうだ一つこの男をかつごうか」

左「うむ赤川、おまえがその了簡なら、おれもその気になるが、しかし大丈夫か」

大「それは運にまかせるのだが、証拠物が証拠物だから度胸のすえかたによっちゃあやりとげるだろう……それじゃあ若いの、おれたち二人も腕かしをするとしよう」

戒「うむ、片棒担いでくれるか、それはありがたい、だがこれから先国々を将軍のご落胤と名のっていかなくっちゃならないが、おまえたち二人がこのおれを戒行という山伏だ、にせものだと思うと、自然とおれをばかにするようになる、下手するとどうしてもご落胤の箔がおちる、売り物には花を添えなくっちゃあならねえ、そのつもりでおまえたち二人もどこまでもおれを八代将軍のご落胤だと思ってたいせつにしてくれなくっちゃいけねえぜ」

赤川大膳膝をうって、

大「うむなるほど、藤井、この男はえらいぜ、何事もゆきとどいている、よくいった。にせも

のと思ってあつかうのと、本物と思ってあつかうのとはたいそうな違いだ。よし、そのことは心得た」

戒「ところで手下はどうする」

大「手下をどうするとは……」戒「おまえたちにはことを打ちあけたのだから差し支えないが、手下のやつはなんにも知らねえ、明かした後でこれこれとしゃべらねえ限りもねえ、そのときは不都合だ」大「うむ、それじゃあどうしたらよかろう」

戒「どうしたらよかろうと聞くまでもねえ、絞めてしまえ」

大「絞めて…軍鶏と間違えちゃいけねえ、しかしおまえは万事ゆきとどいた男だ、よし、後々の邪魔になっちゃあいけねえから絞めてしまおう」

ととうとう手下の者三十人、毒酒をもって残らず殺してしまったのはあくまで残忍なやつ。

戒「これでいい、それではいまいったとおり、どこまでもご落胤ということにしてやってくれ」

大「心得た」

戒「しからば大膳、左京、頭が高い」大「まだ早いや」

戒「今日より改めてその方どもを家来のうちに加えつかわすから、さよう心得、ずいぶん忠勤を励んでよかろう」

大「おやおやとうとう家来にしてしまやあがった……へへっありがたきしあわせに存じ奉ります」

ばかにしたやつです。

そのときに藤井左京が、

左「ときに赤川、これから先は江戸の大舞台へ乗りだすのだ、おれたち二人っきりじゃあ脅しがきかねえ、これからおじのところへいって相談をしてみようと思うがどうだ」

大「うむ、藤井いいところへ気がついた、それでは常楽院へいって話をするか」

これをきいて戒行が、

戒「そのおじというのはだれの事だ」

左「じつはときの老中柳沢甲斐守と腹をあわせて、ことをしようとした水戸の家来の藤井紋太夫というのがおれのおやじ、悪事がばれて黄門さまに手うちになったが、おれはその時分には年がいかねえから、ただ追放ですんだのだが、おやじの藤井紋太夫の弟で、おれのためにはおじにあたる天忠坊というのがある」戒「うむ、それはどこにいる」

左「美濃国長洞村の長洞山常楽院という法華寺に住職をしているが、もう七十あまりの老人、天忠坊日真というのだ、近所では生如来さまだとか、日蓮上人の生まれかわりだとかいっているが、どうしておれのおじだが、この天忠坊は酢でもこんにゃくでもくえる坊主じゃねえのだ、そのかわり悪いほうの話なら、よくわかる」戒「うむ、太い坊主だな」

左「あははは、太いといえばおまえとどっちが太いかわからねえ、そこへつれていって、ことを打ちあけて話をしたら、またいい分別があると思うのだが、どうだ」

戒「うむ、それはいいところへ気がついた、それではそこへつれていってくれ」左「承知した、そういうことにしよう」

戒「しからば大膳左京」左「また始めやあがった」

これから三人この山家へ火を放って、煙を後に伊予の山中をたって、美濃国長洞村へ乗りこん

でまいりました。ここに長洞山常楽院という法華寺がある、住職の天忠坊日真、これがこの講談の中でも大立て者、悪い事にかけては目から鼻へ抜けるという代物だけに、赤川、藤井よりは上手でございます。委細のことを二人からきいて、

天忠「そういうことならわしも一肌脱いでやろう、それでは善は急げ、さっそくとりかかることにしよう、南無妙法蓮華経」

いやな坊主があったものです、善は急げもないものだ。ここで一策をめぐらして、天忠坊の弟子の天一坊というちょうど戒行と同年、これが戒行によく似ている。ことにひごろから、

○「天一さんは色が白くって品がいい、お大名の若様のようだ」

といわれているのを幸い、この天一坊という若僧を絞め殺し、戒行を天一坊と名のらせ、当将軍家ご落胤ということをいいふらしたから、もとより正直な地方の人たちですから、これをまことと思って、毎日常楽院へきて、天一坊を遠くから拝むというような始末。このごろでは常楽院の入口には紫地に葵の紋を染めぬいたる幔幕をうち巡らし、本堂正面にあった七面大菩薩の像などは傍らへ取り片づけ、門の入口には番所をしつらえ、ここには紋付き羽織を着用した武士十人が厳然とひかえ、左右には鉄砲二十挺、長柄二十筋、弓二十張、番手桶、盛砂、敷砂、突棒、刺叉、袖搦みなどが仰々しくずーっと飾りたててあるというたいそうなおどかしかたでございます。

たちまちこのことが近郷近在の評判になりましたから四方から将軍様のご落胤を拝もうというので、参詣の人がひきもきらず、その賽銭ばかりでも大変、常楽院は時ならぬ金儲け、昼間は天一坊、御簾の中にあって、左様しからば、いらせられましょうと、いかめしくやっているが、人が寝しずまってしまうと奥の一間で、天一坊、天忠坊、赤川、藤井の四人が車座になって酒を飲

むというありさまでございます。

天忠坊に面会いたす

二月の初めのこと、黒木綿紋付きの衣類、同じの羽織を着し、柄鞘のはげた大小をさし、藁草履をはいて、年ごろは五十三四、色の浅黒い、浪人体の者、悠々として番所へかかってきた。番人がみて、

番「これこれ、どこへ通らっしゃる」

浪「向こうへ通るよ」番「なにっ、向こうへ通るとはなんだ、どこへとおる」浪「常楽院へとおる」番「常楽院のどなたへ通らっしゃる」

浪「常楽院の住持天忠坊に面会をいたそうと存じてとおる」番「左様か、姓名はなんとおっしゃるか」

浪「先生が来たといえばわかる」番「先生……なんの先生……」浪「ただ先生といえばわかる、上は天文、下は地の理、武芸十八般、漢学、和学、蘭学、天地の間におれの知らぬことはない、当時日本で、先生といえばおれだ」

番「大変なやつがきたな……たとえそれだけの先生といわれる方でも、姓名のないことはあるまい」浪「あってもおまえたちのような者に聞かせることもない、天忠に先生が来たといえばわ

かる。早くいたせ」

番人は頬をふくらまして奥へいく。浪人は番所へのこのこはいってきて、煙管を取りだして、ぱくーりぱくりと煙草をのんでいる。

間もなく番人が帰ってきて、番「先生に申しあげます」浪「ああ急に先生と言いだしたな、どうした」番「師の坊にはただ今お出迎え申しあげるとのこと、しばらくお待ちを願います」浪「ああわかったろうな」

ところへ天忠坊日真、白綸子の衣類、紫の袈裟衣、金襴の帽子を頂き、藁沓をはき、杖をついてでてきたところはじつに立派、もっとも三十五石の御朱印のついておりまする寺、ことに近ごろは将軍家ご落胤御旅館ということになっておりまするから、人の眼をくらますために立派やかなるいでたち。悠々とそれへ参りましたが、番所で煙草をのんでいる浪人をみると、

天忠「いやこれはこれは先生にはようこそおいで下さいました」浪「いやこれは天忠さんか、久しくあわんであったの……ほほう立派な服装じゃな、近ごろはだいぶお布施や賽銭があがるとみえるな」

天忠「これは恐れ入ります、そこは端近、どうぞお通り下さるよう、ご案内申しあげます」

浪「さようか」

天忠が先になって案内をする。浪人は辺りの飾りつけをじろじろ見ながらあとについてきたが、方丈へとおると、

浪「天忠さん、いまこっちへくるまでに、辺りを見るといろいろの飾りつけ、ことに玄関には紫地に葵の紋を染めぬき、広大なものだが、だれかこの寺に泊まっているのか」

天忠「先生、どうぞ大きな声をなさらぬように願います」浪「なんだ」

天忠「当寺には目下尊きお方さまご宿泊遊ばされておりまする、どうかご静粛に願いとうございます」

浪「ははあ尊きお方……ただ尊きお方ではわからぬ、なんという方だ」天忠「恐れながら当将軍家ご落胤天一坊さまにございます」

浪「なに、当将軍家のご落胤……それはどうも失礼をいたした、どういう縁かしらぬが天忠さん、そういう尊い方が当寺へお泊まりになるというのは、この上もない面目じゃな」天忠「はっ、まことにありがたいことに心得ております」

浪「しかしなにかそれには証拠でもあんなさるのか」

天忠「はっ、お墨付き、並びに短刀がございます。先生ゆえお話を申しあげますが、当上さまいまだ源六郎さまとおっしゃって、紀州和歌山においでのおり、沢野というお側仕えの女子との仲におできになったのが天一坊様、おつきご家来両人お付き添い申し、当寺へご滞在にございまする」浪「ははあさようか、それは初めて承る」

天忠「つきましてはこれより江戸表へお乗りだしになりまするについても、よきご家来をお求めにございます、失礼ながら先生にはいまだご浪人ならば、愚僧より天一坊様へおとりなし申しあげてもよろしいと存じまするが……」

浪「いやそれはなにより忝けない、長い間浪人をしておると人間が愚かになる、お目通りがいたしたい、御坊からよろしく申しあげてくれ」

天忠「委細かしこまりました」

浪人を方丈へまたしておいて天忠坊、奥へきてみると、三人車座になって酒を飲んでいる。

天忠「これこれ左京、大膳」左「これはおじ上」天忠「おじ上ではない、それだからおまえたちは困るというのだ、少し油断をすると酒などを飲む、人に見られたら露顕のもとだ、今が肝腎のところだ、慎みなさい」

左「いやどうもお叱りで恐れ入った」天忠「天一もそうだ、ご本人がそんなことでどうする、ご落胤はご落胤らしくしてきちんと座っていなければいかん」

天「いや座っていたのだが、だれもこず、退屈だから一杯やっていたところだ」

天忠「それがいかんというのだ、早くかたづけて上座へいかんければならぬ」

天「だれかきたのか、またお目どおりか」

天忠「うむ、元九条前関白殿下（くじょうさきのかんぱくでんか）の家来で山内伊賀亮重光（やまのうちいがのすけしげみつ）という浪人がきた」

天「たいそう長い名の男だな、御坊の知っている者か」天忠「わしの先生だ、九条家につかえて天文地理、学問武芸、なに一つとして知らぬことがない、ことに上むきのことはなんでも心得ている器量人だ、その伊賀亮が突然訪ねてきたのだ、きかれたからこれこれと話をしたら、ぜひお目どおりがしたいというのだ」

藤井左京、赤川大膳顔を見合わせて、

左「それはおじ上いかぬ、愚昧の百姓どもならとにかく、そういう器量のあるやつにあわせると、こと露顕だ、お目どおりかなわぬといってお帰しなさい」

天忠「そうかな、しかしなかなかの男だからおおかた天一坊の評判をきいて訪ねてきたのだろうと思う、帰れといっても帰るまい」天「いや御坊、左京も待て、その伊賀亮にあおう」

左「えっあう……大丈夫か」天「うむ、あって味方につけば、そういう器量のある者なら、いっそうこっちに都合がいい、万一見あらわされて、ことめんどうになったら、一同で叩っ斬ってしまったらよかろう、どうだ御坊」天忠「うむ、さすがは天一よくいった、そのくらいの度胸がなければことは成就しない、それではあわせるか」

天「うむ、あってやろう」天忠「それでは案内をするから、しっぽをつかまらないようにしなさい」

天「心得た……しからば大膳、左京」左「また始めやあがった」

伊賀亮一味に加わる

上段塗（ぬ）り框（がまち）の前には立派やかなる御簾（みす）が下がっている、御簾の前に藤井左京、赤川大膳の二人、麻上下（あさがみしも）を着用してすました顔をしてひかえる。ところへ天忠坊の案内で山内伊賀亮そのところへくくる。

この山内伊賀亮というのは、天忠坊の話のとおり、もと九条前関白殿下の家来、子細（しさい）あって浪人をいたしましたが、武芸十八般は申すにおよばず、上むきの故実から百般のことなに一つとして知らぬものはないというくらいの大器量人、そのところへぴたりと着座をした。服装こそ汚いが、どことなく威風辺りを払うばかりの風采。天忠坊日真それへすすんで、

天忠「恐れながら申しあげまする、これへ召し連れましたるは元九条殿の家臣当時浪人山内伊

賀亮と申しまする者、お目どおり願いたく、天忠同道をつかまつりました、お言葉下しおかれますれば、いかばかりかありがたきしあわせに存じまする」

天忠坊の言葉がおわると赤川藤井の両人が、

赤「シーッ、シーッ」

と警蹕の声をかける。御簾は音もなくスーッと上がる。白綸子の衣類を着用して、その上へ法衣をまとい金襴のしとねに着座しておりますのは天一坊。

山内伊賀亮思わずはっとそれへ平伏をし

たようす、赤川藤井の二人が、先ずこうして平伏をするようなら大丈夫だと思っている。天一坊は声をつくって、

天「伊賀亮と申すか、今日より予に仕えるとの志、過分に思うぞ、盃を取らせる」

左「伊賀亮殿当将軍家ご落胤天一坊さまのお言葉、お盃を下さる、ありがたく頂戴いたされよ」

赤川大膳三方にのせた盃を伊賀亮の前へおく。藤井左京長柄の銚子を持って酌をしようとしたときに、盃に両

手をかけた伊賀亮が、天一坊の顔を穴のあくほどじーっと見つめている。左京、

左「お盃を頂戴いたされよ」

伊「やかましいっ」

左「これはしたり、上よりのお盃……」

伊「うるさいっ」盃を三方にのせてずいと前へ突きだした山内伊賀亮、

伊「わっはっははは」

と声をあげて笑った。さてはと思って、一同山内の顔を見たときに伊賀亮、じろり天忠坊をにらんで、

伊「こんなことだろうと思ったが、これ常楽院、年をとってもまだ悪事はなおらんとみえるな、円頂黒衣の出家、衆生済度を心がけるが役目であるに、ややともすると悪事をたくらむ、まことによくないことだと意見をしたのを打ちわすれ、またこのようないかさま物を引っ張りまわす、三十五石の寺領があれば、この常楽院にいてなに不自由のない身の上、それをにわかに江戸表へでも乗りだして、首尾よくいけば芝三縁山増上寺か、上野の寛永寺のような大寺へなおり、栄華の夢でもみようという望みであろうが、暗に罪する者は天これを罰し、あきらかに罪する者は人これを罰す、年甲斐もない、こんなことに加担するのはよしなさいよ、……また御簾うちの小僧、伊賀ただ今から予につかえるか過分だ、盃を遣わすなどと、だれからそんな文句を教えられたか知らぬが、そんなことでこの伊賀亮をあざむけると思うのかばかめ、この伊賀亮の眼はくさってはおらぬぞ……またそれにいる二人のやっこ」

大「奴……」伊「麻上下を着てまじめくさっていても、狐に上下を着せたも同然、愚痴蒙昧の者

どもはそれにあざむかれるかはしらぬが、この伊賀亮をあざむくことはもってのほかだ……貴様たちは自ら望んではりつけ柱を背に負うか、首を曝したいのか、正直にしておれば一生ある命を、及びもない天下の器に手をかけようとする大山師め、かようなところに長居をすれば、拙者の身が汚れるわ、ああつまらぬことをするやつだ、ああいやだいやだ」

すっくり立ち上がっていこうとする。大膳左京の二人は、さては露顕をしたか、もはやこれまで、斬ってすてようと、刀の柄に手をかけて、ばらばらっと来たったときに、立ちどまった伊賀亮、左右をじろりと見て、

伊「騒ぐなっ、にせものとあばいたので生かして帰すと、ことめんどうだから、殺そうというつもりか、やってみろ、抜いてみろ、年はその方たちよりはまさるが、腕に年をとらせぬ伊賀亮、むざむざとは斬られぬぞ、わしを殺して常楽院が引導でも渡そうというのか、役者はそろっているが狂言はだれがかく、それよりは二重台からおりてまことに先生恐れ入りました、しかしいったん思いこんだものでございますから、どうか味方についてくれ、指図をして下さいとでもいえば、ことによったらこの伊賀亮も味方についてやるまいものでもない、それをあくまで人をあざむくか、刃物の光におどろいて味方につくような伊賀亮と思うか、わっはっは大たわけめ」

と畳を蹴たてていこうとする。このとき、

天「先生、しばらくっ」

ばらばらっと御簾の中からでてきた天一坊、伊賀亮の袖をしっかとおさえ、

天「しばらくおまち下さいまし」

伊「放せっ、放せと申すに……」

天「いえ、しょうしょう先生に伺いたいことがございます……赤川、藤井、なにをするっ、そんなことをしてはかえってことの破滅、先ず、先ず先ず」

二人を止めておいて、あとへ下がってぴたりと両手をつき、

天「先生のご活眼、恐れ入りましてございます、いかにもてまえはにせものでございます、もとより当将軍家のご落胤というのからして大胆不敵、しかしわずかな物を盗んで首を斬られるのも賊なら、天下の器へ手をかけてことをしようというのも賊、長い浮世に短い命、細く長く暮らそうより太く短くやってのけようと、じつはおもちゃが二品あるから、その二品を道具にして、ここまではやってはきたが、これから先はちっとめんどうだと、思うところへ先生のおおせ、これこれと打ちあけて味方につくなら指図をしてやろうと、いまおっしゃったそのお言葉を頼りにお願い申します、どうかこの上とも、私どもの味方となってお指図を願いとう存じます」

といいながら見あげる顔、伊賀亮はじっと見下ろしていたが、

伊「あははは、さすが本尊だけあって、年はいかぬが感心なやつだ、及ばぬことを知って、頭巾を脱いで話をするなら頼まれてやるが、隠さず包まず話をするか」

天「はい、残らずお話をいたします」伊「人殺しがあるだろう」

天「三度ほど……」伊「うーむ、話をしてみろ」天「へえ、実はこれこれこうこう」

とこうなると天一坊も隠しませぬ、これまでのことを包まずずーっと話をした。

伊「ううむ、なかなか細くないやつだ、してその二品のおもちゃというのをみせろ」

天「はい、御覧下さいまし」

取りだしたお墨付き、短刀の二品、伊賀亮繰り返し繰り返し見ていたが、これだけは本物。伊

賀亮ほどの男ですからよくわかります。押しいただいて元のとおり収め、

伊「これはいい物がある、これだけのお証拠物があれば、先ず十中の八九までは成就するだろう、しかし天一坊、なまじおまえたちがかれこれと口出しをするならことわる、万事おれに任せるというなら、おれが引きうけてやるがどうだ」

赤川大膳、藤井左京それへ両手をついて、

左「先生、お手向かいを致そうとしたのはわれわれの誤り、平にお許し下さい、万事先生にお任せいたす、よろしくお指図を願いたい」

伊「うむそうか……天忠、貴僧はどうだ、もう年をとっているから、この辺りで身を退くか、それとも一緒に江戸へ乗りだすか」

天忠「先生、このたびのことは天一坊の目論見とは申せ、手前に相談をかけられてこれまでにいたしたので、いまさら退く考えはございませぬ」

伊「そうだろう、欲の皮の突っ張った貴僧だから、かじりついてもいくだろう」天忠「どうも恐れ入ります」伊「して、そのおまえの弟子の天一坊というのはどこの生まれだ」

天忠「それは佐渡国相川在小島村の浄覚寺という寺へ、巡礼が子供をしょってやってまいりましたが、その門前で頓死をいたしましたので、先住がその子供を拾いあげ、当寺へ移住いたしましても、手もとにおいて育てたものでござります」

伊「それを貴僧の代になっても養っていたというわけだな……よろしい、そういうことならそのような履歴はおれがよいように造ってやる」

計画は順調にすすむ

天忠坊、かたちをあらためて、

天忠「つきましては先生、これからすぐに江戸表へ乗りこんで、ご親子ご対顔という運びにいたしたいと存じます」

伊「それ、それがいかんというのだ、そのような指図はいわぬがよい、万事任せた以上はおれの方寸にある、第一すぐに江戸へまいるということがあるか」

天忠「ははあ、なぜ江戸へでてはなりませぬか」

伊「考えてみろ、当将軍吉宗公、この方も紀州からお乗りこみになっただけなかなか利発な方だ、その下にいる老中、若年寄、役人にはなかなか利口者がそろっている、ことに恐ろしいのは、南町奉行大岡越前守忠相だ、この男は伊勢の山田奉行から出世した名知名才の男だ、いきなり江戸へでたらどうしても町奉行の調べを受けなければならぬ、この越前守に調べられたら、すぐに御用の声がかかって縛られてしまう、三尺高い木の空で、首を曝すようなことでは済むまい、八つ裂き、逆さ磔になるは知れたこと、われわれに一番恐ろしいのはこの大岡越前守だ、この男の眼さえとおったらもうこと成就だ」

天忠「へええ、そのように大岡越前守という者は恐ろしゅうございますか」

伊「ああ、老中若年寄は恐ろしくないが、この大岡が恐ろしい、それには町奉行の手にかからないように、道中ですっかりことをこしらえて江戸へでなければならぬ。まずこれから大阪へでて城代の土岐丹後守を恐れ入らし、それから京都へいって所司代松野河内守に頭を下げさせて、それからのことだな」

天忠「なかなか手数がかかりますな」

伊「これだけの大仕事だ、そうたやすくいくものではない、……ときに天一、これからは行い、口の利き方、よく気をつけて、心から将軍の落胤というつもりでやらんければならぬぞ」

天「はい、私もそのつもりでおります」伊「それでは一つ出なおしてみろ」天「出なおすとは……」

伊「もう一ぺん御簾の中へはいって、将軍さまらしい口をきいてみろ」天「へえ」

天一坊もとのとおり御簾の中へはいる。伊賀亮はそれへ両手をついて、

伊「将軍家ご落胤には、ご機嫌よく渡らせられ大慶至極に存じ奉りまする」

天「おお、伊賀亮か、そちも無事で、予も満足に思うぞ」

伊賀亮膝をうって、

伊「うむなかなかうまい、なるべく口数をきかんで、万事そのいきでやりなさい……ついては私はこれから大阪へ行って、おまえたちのくるところをこしらえておくから、五百両の金子に、家来を三人ばかり貸してくれ」○「かしこまりました」

ここで万事の手はずをきめて、山内伊賀亮は大阪へ乗りこんでまいりました。

さて山内伊賀亮は先に大阪へきて、長町、いまは日本橋一丁目二丁目となっておりますが、昔は長町と申しました、ここに紅屋庄三郎という旅籠がある、ここを借りうけて万事の手はず。と

ころへ天一坊の一行が乗りこんできて、紅屋の表には「徳川天一坊御旅館」という立派な立て札、弓槍、鉄砲、突棒、刺叉、袖搦み、番手桶、盛砂、ずーっと備えつけができて、上下黒羽織の役人が二三十人警護をいたしておりますから、いや大阪の人がおどろいた、いたるところこの評判でございます。

町奉行、大阪城代土岐丹後守の調べとなったが、大器量人の山内伊賀亮一々あきらかに答弁をして、証拠の二品を見せたから、土岐丹後守一言もない、すぐに江戸表へ問いあわせると、上様においてはお覚えがあるというお答え。丹後守おどろいて急に将軍ご落胤として鄭重な扱い。もう大阪城代を取りこんでしまえば京都はなんでもない、すっかり大阪でご落胤ということが定まったところで、京都へ乗りこんでまいりました。

京都所司代は松野河内守、大阪城代から通知がありましたから、慎んでお出迎え、東山科というところに仮御殿ができて、それへ参って日々諸所の見物、ことに大納言、中納言をはじめ諸家においても、まったく将軍家のご落胤と心得、喜んで天一坊を招きます。山内がすすめて、一々天一坊をその招待の席へだす、というのは江戸へでて将軍家にご対面のときに、ご威光に恐れて口がきけないようなことがあっては露顕のもと、朱に交われば赤くなるというから、いいところへでておけば自然物に臆せず、言葉遣いも正しくなるから、それで大納言中納言などという公卿方のところへだして見習いをさせておこうという、至れりつくせりの伊賀亮の用意でございます。

いっぽう江戸表においては、老中松平伊豆守をはじめ老中若年寄の評議、品川八つ山下というところに仮御殿をしつらえて、ご親子ご対顔というのでお待ち受けになるという。このことを聞い

た山内伊賀亮、もう大丈夫、十中の九分までこと成就というので、一同喜んでいよいよ京都を立って、行列も美々しく江戸表へ乗りこんでくることにあいなります。

天一坊江戸へ乗りこむ

いよいよ天一坊、江戸乗りこみということにあいなりましたが、大阪城代、京都所司代から、ご落胤ということを海道筋へ通知をいたしましたから、道中の厳重警護はひとかたでございません。道中別段のお話もなく、無事江戸表へ着いたしました。

もう品川八つ山に仮御殿ができているのですから、すぐに仮御殿へ乗りこむかと思うとそうでない、山内伊賀亮の指図で品川の本陣鶴岡市郎右衛門方へ一泊ということにあいなりました。

赤川大膳が、

大「先生、なぜ八つ山の御殿へお乗りこみにならないので。もうこれから仮御殿まではわずかの道のり、こんな所へ泊まるというのは」

伊「それだから貴公たちはいかんというのだ、今晩これへ一泊するのは、必ず天下の役人が当将軍家ご落胤だと思っているなら、ここへきて内献上をする、御代がわりにでもなって、お役御免になってはならぬから、内々賄賂をもってくる、今にみなさい、老中若年寄をはじめ重だった役人がよそながら献上物をもってくるから」

大「ははあそうでございますか」

伊「もう献上物があるようなら安心だ、内献上がないようだと、少し用心をせんければならぬからその積もりでいなさい」大「さようでございますか」

と、いったが、なるほど伊賀亮のいったとおり、老中若年寄をはじめ重だった役人から続々として使いをもって献上物がある。藤井赤川が喜んで、

大「先生、献上物がございました」

伊「そうだろう、あるのが当然だ、先ずこれならば大丈夫だ、ご親子ご対顔は近いうちだろう」

というので、天一坊をはじめ一同喜んでいる。

翌日になっていよいよ天一坊主従、八つ山の仮御殿へ乗りこむ。そこで赤川大膳が老中筆頭松平伊豆守の屋敷へでて、

大「天一坊殿、ご道中とどこおりなく、今日八つ山御殿へご到着にあいなりました、この段お届けつかまつる」

と申し入れて帰る、これは届け放しでございます。そこで今度は松平伊豆守公用人大河原又左衛門という者が八つ山御殿へきて、

又「天一坊殿、ご道中御つつがなくご到着の由、恐悦至極に存じまする。ついては明日辰の上刻伊豆守役宅へ成らせられまするよう。ご誕生、ご成長の次第、並びにお墨付き、お短刀、ひとおりお伺いつかまつる」

と申し入れる。委細承知の趣を答えて又左衛門をかえす。老中がひととおり伺うといっても、もう大阪城代、京都所司代の調べがすんでいるし、昨日本陣へ内献上があったから、少しも恐れ

るところはない、伊豆守の調べがすめば、もう後はご親子ご対顔の段取りになるのですから、一同安心をしております。

このままでご親子ご対顔になれば、悪人が栄えるに定まっているのですが、そうは天が許しませぬ、ここに南町奉行大岡越前守忠相、老中松平伊豆守の役屋敷へ出てお目どおりを願う、伊豆守殿すぐにお会いになり、

伊「越前、何事であるか」

越「ははっ、このたび天一坊殿、八つ山御殿へおん着、明日当お役宅へお出でにあいなります る趣承りましてござります」伊「うむ……」

越「つきましてはてまえ南町奉行職、八つ山は支配内にございます、万一八つ山辺りに今夜にもあれ失火等これあるときは、お立ち退きにあいなります、そのみぎり天一坊殿お面をしかとわきまえおりませぬでは、非常のおりから不都合を生ずるかと心得ます、明日天一坊殿ご当家へお出でを幸い、よそながらお面を拝しておきたいと存じまする、この儀お許しにあいなりますれば、ありがたきしあわせに存じまする」

伊「それは念のいったことである、しからば明日辰の上刻、当役宅へ成らせられるから、その前に当家へまいって、その許は玄関次の間にでも控えておって、天一坊殿を拝したらよろしかろう」

越「ありがたきしあわせに存じます」

越前守はそのまま帰りましたが、越前守も天一坊の顔をみるまでは、まったく八代将軍のご落胤だと信じていたのでございます。出火のおりに顔を知らないでは不都合であるから、天一坊殿のお面を拝しておきたいと願ったのは、まったく役目を重んずる上からのことで、その時は天一坊のにせものということは少しも気がついていたのではございません。

「ひょっとしたら……」と越前守

さて当日とあいなりまして、辰の上刻、供揃い美々しく乗りこんでまいりましたのは赤川大膳、ご門が八文字に開き「赤川大膳さまー」とふれる。大膳は熨斗目麻上下、赤銅作りの大小をさし、草履取り一人、武士一人付きそって、玄関正面のところから、お廊下へかかってくる、越前守殿お廊下の隅のところに慎んで控えておりました。

赤川大膳さまという声に、さてはお付きのご家来か、赤川大膳というのはどういう人物かと、越前守顔を上げて大膳の顔をみるとおどろいた。この越前守という方は、観相をよくいたしました。大膳の相をみると、悪相があらわれている。はて面妖な、将軍家ご落胤のお付き、将来重役の一人ともなるべき人物が、こういう相があるようでは、天一坊というお方も……とここにはじめて疑いをはさんだ、大膳が悪い相でなければ、越前守殿も天一坊の人相をよくみようという考えは起こらなかったでしょう、えて悪事というものは、こういうところからあらわれてくるものでございます。

そのうちに天一坊の乗物はしずしずとご門内へと乗りこんでまいります、「天一坊殿、お成

りっー」というお触れの声、ご老中筆頭松平伊豆守殿をはじめ閣老五人、お出迎えを申しあげる。乗り物より静かに立ちいでました天一坊、法眼袴をはき、十徳のようなものを着用いたし、中啓をたずさえ、玉子に目鼻をつけたような美男、髪は総髪にいたしておりまして、もって生まれた品のある男、老中いずれもその威厳にうたれて思わず頭をさげるくらい。

お玄関からお廊下へでると、お廊下の隅のところに大岡越前守両手をついて控えております、天

一坊殿とはいかなるお方であるかと見上げる眼、何者であるかと、思わず天一坊が見下ろす眼とぴたりと会った。その天一坊の人相を見て越前守はっと思った、というのは、これも人を殺し、近い内に自害をするか、殺されるか、とにかく刃の下に死するという剣死の悪相が現れております。

八代の名君といわれるくらいの吉宗公のご落胤に、さような悪相のあるべきはずはない、これはけしからぬ相があるものだ、ご帰館の時にもう一度よくみなければならぬと越前守膝に両手をおいたまま、天一坊のあとを見送っております。

天一坊は伊豆守の案内で設けの席へ着座、御簾の前には大膳左京、ご老中五人両手をつかえ、

伊「天一坊さまにはご機嫌よく、恐悦至極に存じまする、このたび道中つつがなくご到着の段祝着に存じまする、失礼を顧みず今日

お招き申しあげましたるはご誕生の地、ご成長の次第ひととおりお伺い申しあげたきためにござりまする。さようご承知下しおかれまするよう」

赤川大膳が取り次ごうとすると御簾の中から、

天「取りつぐに及ばぬ、それらのことは、万事伊賀亮にたずねるよういたせ」

すっかり稽古をしているからなかなかうまいものです。山内伊賀亮席を進め、

伊「ご老中方に申しあげます、上お身の上の儀なれば、何事なりとも拙者におたずね申さるるよう、すみやかにお答えをいたす」

そこで松平伊豆守がいちいち伊賀亮にたずねました、あまり詳しく調べると、ご落胤からにらまれて、役目の上に響いてはならぬと思うからざっとした調べです。

伊「この上はお墨付きご短刀の二品拝見いたしたく存じまする」

そこで立派な箱に入っている二品の証拠物をだしてみせる、伊豆守はじめ五人の老中が見ると、将軍家のおっしゃったとおりの品に相違ございません。

伊「先ずこれにて恐悦至極に存じまする」

すると天一坊が、

天「伊豆を初め五人の者、今日は大儀、美濃国を出立いたしてより、かたときも早く父上にお目どおりいたしたいと存じておる。よしなに取り計らいくれるよう。改めあいすんだる上は、立ちもどるであろう」

それっというのでばらばらっとお供揃い、「還御、還御ーっ」というお触れ、静かに立ち上がった天一坊、あとから一同ぞろぞろついて玄関へでる、ご老中方お供をいたしてお玄関までまいりまするとと、横合いから立ちいでましたのは大岡越前守忠相、天一坊の歩いてくる前へばらばらっときてぴたりと座った。自分が歩こうとする前へ座った者があるから、なんであろうと思って天一坊、足をとめて見下ろす、両手を膝において恐れ気もなくじっと見上げる越前守、このとき初めて天一坊の人相を正面からよくみました。横顔をみたときよりもさらに悪相、この様子をみたご老中方、

伊「これ越前、下がれ、下がれ下がれ越前、天一坊殿おとおりの妨げをいたすとは何事、下がれっ」

と、いわれて初めてわれにかえった越前守、後へぱっと下がった、天一坊はそのまま悠々と玄関へかかって、用意の飴色網代蹴出し塗り棒の乗り物、供揃い堂々として八つ山の御殿をさして戻る。ご老中方は一間へお入り遊ばしましたが、越前守はただ一人、お廊下に残って、しばらくのあいだ考えておりましたが、いよいよもって捨ておきがたき悪相、ひょっとしたら……と心づいた越前守、すぐに五人のご老中方がお話をしているところへでて、

越「願いまする」伊「何事じゃ越前」

越「恐れながら天一坊殿の儀につきまして、なにとぞ再調べの儀、越前におおせつけ下さるよう願いまする」

伊「なんじゃ、その方が再調べをいたしたいと申すのか」越「さようにございます」

伊「なんでさようなことを申す」

越「少々越前存じよりもございます、万々一ご落胤と申すこと、にせものにござりますれば、この上もなき上様のご恥辱、よって今一応取り調べの儀、越前におおせつけ下さるよう、ひとえ

に願い奉りまする」

さっと顔の色を変えた伊豆守、越前守の顔をにらみつけるように見ていたがそのまま、返事もしないで向こうをむいてしまった。

越「いかがにございましょうか、ただ今願いましたる段、お許し下しおかれましょうか」

それにも答えず伊豆守、ほかのご老中方と世間話などをして、耳にもかけないようす、ちょっと話の途切れたところで、

越「申しあげます」伊「くどいっ」越「ははっ」

伊「さいぜんより天一坊殿のことにつきかれこれ申しておるが、大阪城代、京都所司代においてよくよく取り調べ、かく申する伊豆をはじめ同席の者ただ今総てとどこおりなく取り調べ、お証拠物といい、上様御おおせのとおり、お覚えのある品、それがその方町奉行の身をもって再調べいたすとは何事、成らぬぞ」

越「おおせにはございまするが、越前守は将軍家の御ため、天下の御ため再調べいたしたく存じまする心底、天一坊殿ご人相、はなはだその意を得ざる悪相、日数にいたせば四五十日のあいだに人に殺されるか自殺をいたすか、とにかく刃の下に倒れる剣死の相、恐れながら当上さまのご落胤に、さような悪相のあるべきはずはございませぬ、おおかたは偽者にて、ことを構え、お墨付き、ご短刀は、いかなる手段をもってか奪い取り、これを証拠としてご落胤と申して世人をあざむき、当江戸表へ乗りこみきたったものと思われます、よって天一坊殿今一応再調べつかまつり、正しくご落胤に相違ないと定まりましたる節は、越前は申すに及ばず大岡一家の者、たとえ親類縁者たりとも、いかなるご処分おおせつけられましてもお恨みとは存じませぬ、天下の御ため、今一応お取り調べの儀、越前におおせつけ下さるよう願いまする」

と言葉をつくしていう、越前守殿の両眼には涙が浮かんでいるようす。

側できいておいでになった老中秋元但馬守（あきもとたじまのかみ）、稲葉美濃守（いなばみのかみ）の両人。

但「越前、それはもっともことである、上様思召（おぼしめし）しをもって、伊勢山田奉行であったのを、江戸表へ召し寄せられ、当時南町奉行勤役いたしているそのもと、ことに品川八つ山はそのもと支配内であるから、いま一応吟味いたしたいと申すも無理ならぬこと……ご上席、これは越前の望みどおり、将軍家へ申しあげ、将軍家の思召しによってお定めになったらよろしかろう」

伊豆守殿余計なことを秋元がいうと、いささか不平に思召したが、

伊「その儀承知いたした、しからば越前、そのもとたっての願いであるから、明日上様へ言上をいたすであろう」

越「へへっ、ありがたきしあわせに存じます」

と喜んで越前守は下がる。後に残ったご老中方互いに顔を見合わせたが、この越前守の志を察することができなかったのは、松平伊豆守一生の失策、ただ町奉行風情が、大阪城代、京都所司代、自分たちが取り調べて済んだものを、また再調べを願うというのは、憎いやつだというだけの考えでございます。

越前守に閉門申しつく

さて翌日になると伊豆守殿ご登城にあいなりましたが、越前守がなまじい人相をみるところからめんどうのことをいいだしたが、まったくご落胤であるものを、悪相があるなどと申しあげて、将軍家がご立腹になってはならぬ、これはいっそう上様のお耳に入れないようにするのが上策、ことに越前守は上様のおめがねをもって町奉行に昇進をした者であるから、もし間違ったときには上様のおめがね違いになる、これは取り次ぎの役人に申しつけて、なるたけ取り次がないようにするほうがいいと思召している。ところへお側御用取り次ぎの高木伊勢守がおいでになった、伊豆守が、

伊「伊勢殿、当時奉行役でだれだれが評判がよろしいか」高「さよう」

といったが、老中の前でうっかりしたことはいえないから、

高「上様が名奉行とおおせられたほどでござるから、当時南町奉行勤役大岡越前守が一番評判がよろしいかのように考えまするな」

伊「さようでござるか、上様のおめがね違いと申しては恐れ入るが、伊豆の眼からみると越前はそれほどの仁とも思わぬ、と申すは、どうも越前は重役をないがしろにしていかぬ、なまじ人相をみるため、おうおうそれを誇りとして、役目以外のことまで口出しをいたすようじゃ」

これを聞いた伊勢守、「ははー、なにかこれは越前守は老中の前をしくじったに違いないな」と思っている、ところへ大岡越前守登城、両手をついて、

越「当日は快晴、恐悦に存じまする、お早いご出仕、ご苦労千万にござりまする」

ご挨拶を申しあげたが、伊豆守聞かないふりをしてわきを向いている。また越前守、

越「ご老中にはご機嫌およろしく、恐悦に存じます」

いったがやはりわきを向いて無言のままでございます。このとき越前守高木伊勢守に向かって、

越「お取り次ぎまで申しあげます」高「なんじゃ越前殿」越「ほかではございませぬが、昨日ご老中ご上席お役宅において、天一坊さまお面を拝しましたるところ、かようかようの相がございます。ついては越前再調べの儀をおおせつけられるよう。八つ山の地は町奉行支配内にございます、よって越前再調べいたしたく心得ます。なにぶん上様によろしくお取り次ぎを願います」

これを聞いた高木伊勢守、

高「越前殿、おおせはごもっともでござるが、ご老中方のお調べにあいなったものを、御身が、かれこれおおせられては、かえっておよろしくあるまい、とくとご勘考なさったらいかが」

越「再三勘考をいたした上で願いまするにございます、もしお取り次ぎがならぬなら、ならぬとおおせ下さるよう、ほかにまた勘考をつかまつります」

高「いや、ならぬという次第ではない」

越「しからばお取り次ぎを願います」

そばに聞いていた伊豆守「えへんえへん」と咳払いをしているのは、取り次ぐなという謎、高木伊勢守、間にはいってもじもじしている、この様子をみて取った越前守、さっと顔色を変えて、

越「天下の一大事を申しあげまするに、お取り次ぎがならぬとおおせ遊ばしまするか」
と、思いこんだ有り様。高木伊勢守おどろいて、
高「いや、ならぬという次第ではござらぬ、とにかく言上いたすであろう」
といって立ち上がりながら、伊豆守の顔をじろりとみると、伊豆守顎でしらせたのは、なまじなことをするなというような面持ち。高木伊勢守取り次ぎたくないけれども、役目の表、御前へでないわけにいかない、しかたがなしにしぶしぶ将軍家の御前へでて、
高「申しあげます」吉「なんじゃ」
高「恐れながら伺い奉ります、八つ山地面の儀は何人の支配でございまするか、伺いとう存じます」
吉「八つ山地面の儀は町奉行の支配内であるが、それがいかがいたした」
高「その儀について南町奉行大岡越前より願いまする、天一坊殿町奉行の支配内においでの儀をもって、お身の上について越前今一応お改め申しあげたき由申しおりまする、いかが取りはからいましょうか」
このときに伊豆守の役宅で天一坊の相をみて、剣死の悪相があるから再調べをおおせつけられたいと願いでたということを申し上げれば、賢明な吉宗公のことであるし、ご信用のあつい越前守であるから、再調べお許しになったのであるが、悪相のことを少しも申しあげないで、ただ越前が再調べ云々というだけを申しあげた。これをお聞きになった吉宗公、お顔の色が変わって、
吉「これ伊勢、大阪にて城代、京都にて所司代、江戸表において閣老五人にて相改め、決定いたしたことを、越前が再改めいたすというは筋が違うであろう、重役をないがしろにいたすことになるぞ。おって沙汰いたすによって、越前の儀は差し控え申しつけるがよい」高「はっ」
そのまま高木伊勢守、御前を下がって老中部屋へくると、越前守、上様のご返事はどうであろうかとまっている。伊勢守から伊豆守に将軍家の思召しを申しあげる、腹の中で伊豆守喜んだ。
伊「越前」越「ははっ」伊「ただ今将軍家へ言上いたしたところ、もってのほかのお憤り、重役一同取り調べて相違ないと定まったものを、身分軽き町奉行のそのもとが、天一坊殿御身の上の再調べをいたすというは法外のこと、よって閉門申しつけるというご沙汰である」越「ははっ」
伊「立てっ、慎んでよかろう」越「ははっ」
さしもの越前守もしばらくはその意外の上意におどろいて立場を失うくらい。そのうち、ご老中方はどんどん下がっておしまいになる。天を仰いで歎息した越前守忠相、よんどころなくそのままますごすご下城に及びました。

あさましいかな、閉門ということにあいなりまして、お屋敷も越前守がお帰りになるとすぐにバタバタ締まりがついてしまう。ただ締まりがつかないのは不浄門ばかり、この始末に越前守殿の奥方をはじめとして、家中の者一同はただただ驚くばかり。するとご出張になったお役人から、
「このたび将軍家ご機嫌をそんじ、筋違いの儀を申しあげたるかどにて越前守閉門申しつける、よって病人、産婦などこれあるならば、そうそうに立ちいでるようにいたせ、なおまた一夜泊まりなどの者これあり候わば、さっそくにこれへ差しいだすようにいたせ」という申し渡し。そこで段段調べたが、別段に一夜泊まりできていた者もないから、もうこれで出入りの者は無いと決まって、ぴたりと封印がついて、屋敷の周りは役人が厳重に警固をしております。

思案にくれる主従三人

お居間へおはいりになった越前守忠相、呆然として衣服を改める考えもなく、膝へ両手をおき、両眼を閉じ、感慨にふけっておいでのようす。ところへ公用人吉田三五郎、白石治右衛門、池田大助の三人、恐る恐るそれへまいりまして、

治「伺います、伺います」

白石治右衛門二度まで声をかけたが、越前守殿黙っていらっしゃる。

治「白石治右衛門にございます、お伺い申しあげます」

初めて顔を上げた越前守、

越「おう治右衛門か、水をもて」

治「ははっ」

すぐに冷水を差しあげると、その水をゴックリ一口召しあがって、三人の様子を御覧になり、

越「治右衛門、大助、三五郎、残念じゃ。ああ残念じゃ」

とおっしゃってギリギリと奥歯を噛んだなり、また両眼を閉じてお頭をお下げになった。

治「じつにこのたびは意外のこと、われわれども三人伺いまするもいかがかと存じますれど、筋違いとのご沙汰、なんでかように閉門おおせつけられましたか」

越「三人ともよく承れ、昨日その方らへもちょっと申し聞けたが、伊豆守殿屋敷へ徳川天一坊と名のる者の面をしかと見届けたるに、容易ならざる悪相を備えたる曲者、名君といわるる当将軍家のご落胤に左様の悪相のあるべきはずはない、察するに何事かことをたくらみ、江戸表へまかりこし来ったる大悪人に相違ない」

治「へへっ」

越「よって重役に再調べの儀を願いいでたるところ、なにぶんにもことを疎かに取りあつかい、越前将軍家のお側へまかりこし、こと詳しく申しあげたくも、ご沙汰なきうちは濫りにお目見得をいたすわけにもあいならず、その道であるから月番伊豆守殿に申し入れたるところ、今日登城をいたせ、返答をするとのことに、喜んで先刻登城をいたしたるところ、言を左右にしてことを扱わず、お側御用お取り次ぎ高木伊勢守殿まいりしを幸い、伊勢守殿に依頼をいたしたるところ、云云斯様斯様」

と委細のお話をするうちも、ぶるぶるぶるぶる身をふるわし、

越「筋違いとのご沙汰、閉門おおせつけられたる上はいかんともぜひに及ばぬ、察しくれい。越前残念であるぞ」

とおっしゃって、はらはらとご落涙のようす。白石治右衛門膝をすすめて、

治「申しあげます、筋違いご閉門とあいなりますれば、いつ閉門御免にあいなりまするか、その見込みもございますまいか」

越「いかにもさようじゃ」治「しからばいよいよご沙汰のございまするときは……」

越「まず越前切腹じゃ。重役をないがしろにいたしたとあっては、大岡の家名も断絶いたすは

近きうちじゃ」

池田大助席を進めまして、

大「大助申しあげます」

越「なんじゃ」

大「それほどまでのお覚悟にございまするなら、ただ今ご切腹遊ばされたらいかがにございまするか、臣として主人に死をすすむるは不忠に似たれど、お家断絶、ご切腹ということをご存じあらせられまするならば潔くご生害遊ばすよう、大助お供をつかまつります、今ご切腹にあいなりましたら半地ぐらいのことは相立ちましょうか……」越「控えろ大助」大「ははっ」

越「その方が申さいでも、

越前切腹してよいくらいならば、その方どもの言葉を待つまでもない、越前立ちどころに切腹をいたすが、予は決して死なぬぞ、必ず切腹はいたさぬぞ」

大「へへっ、しからば閉門御免にあいなりまするのをお待ち遊ばしまするか」

越「限りなき閉門であるから、いつ罪を許されるか相わからぬ」大「しからば平素のご気象と異なり腹は切らぬ、命は捨てぬとおおせあるは……」

越「越前の命は大事の命じゃ」

三人顔を見合わせたが大事でない命があるものでは

ないと思った。

越「かよう申すと越前は卑怯未練の男と思うであろうが必ずそうでない、お家のため、天下のためにはこの命捨てるになんの未練はないが、しかし捨てどころがある」

大「ははっ」

越「かくも暗々と閉門おおせつけられ慎みおるうち、もし近日伊豆守殿をはじめ、銘々のあつかいにて、いずこの者ともしれざる天一坊と申する者将軍家のお側へ進み、ご親子ご対顔などと申す仰々しきことを図り、ご落胤と相定まったる後は、いよいよ天下の一大事、将軍家のご威勢にかかわり、徳川の二字をけがさんければあいならぬ、よって越前身命をなげうってこのことについては再調べいたしたく思うが、老中どもがあの有り様では頼るところもない、ただ頼りに思うは水戸中納言殿よりほかにはない、よって水府のお屋形にこのたびの儀を申し入れ、天下のご後見、副将軍のご威勢をもって、越前に再調べをおおせつけられるよう願いたいと思うが、それにいたしてもかく閉門にあいなっては密かに当家をいずるわけにもならず」

とおっしゃったなりにほろりとご落涙。白石治右衛門顔を上げて、

治「恐れながら、それほどのお覚悟ならば、昼間は格別、こよい水府のお屋形へ伺い、お目どおりを願われ、この大事を申しあげてはいかがでございまするか」

越「治右衛門、その方にも似あわぬことを申すな、でられるくらいなら飛びだしてまいっても水府のお屋形に願うが、閉門の身ではそのこともかなわぬ」治「いえ、尋常ではお立ちいでにあいなることはできませぬが、いかに閉門とは申しながら、死人をとどめておくということは天下の法度にございませぬか」越「うむ」

治「ただ今より死人におなり遊ばせ」

越「なんじゃ、この越前に死ねと申すか」治「いえ、ご生害を、勧め申すわけではございませぬ、死人の形におなり遊ばせ」

越「はは―予が死人の姿にあいなるか」

治「さようにございます、これにおる三五郎、大助、拙者の三人、仲間に姿をやつし、家中なにがしの老母とかりに定め、これが長らくの病気、薬石効なく瞑目いたし、ただ今菩提寺へ差し送る、開けてくれと申せば、他の門を開けるわけにはあいなりますまいが、不浄門は必ず開けるに相違ございませぬ、そのときには二三改める物もございましょうが、その場さえ滞りなく、とおりぬけますれば差し支えございませぬ、無事小石川お屋形までわれわれ三人お供を仕ることができようかと考えます」

越「うむ、その方共三人仲間の姿にあいなって予の供をいたすと申すか」

治「左様にございます、もし露顕をいたせばその時われわれ三人君のために死する命、なんの惜しみ申しましょうか」

越「うむ、よく申してくれた、その一言をきいて予も満足いたす、しからばそうそうその用意をいたすように」治「かしこまりましてございます、しかし南町奉行御勤役、四民挙って御名奉行と仰ぎ奉るやさき、いかに忠義のためとは申しながら、あさましき死人のお姿……」

越「いやいや、この場に至り死人の姿は愚か、いか様なる姿にあいなっても、当家さえ立ちいで、水府のお屋形のお側へまかりいでることにあいなれば、他に望むところはない、越前覚悟はかねていたしておる」治「恐れ入りましてございます」

このときお次の間にワッという女の泣き声、さてはと思召すうちにそのところへお立ちいでになった奥方、

奥「お覚悟のご様子伺いましてございます」

越「おお奥か、役目の表で落命をいたす忠相、もし不浄門外において越前なることが知れ、閉門を破ったということにあいなれば、生害をいたさねばならぬ、せがれ忠右衛門の身の上はなにぶん頼むぞ」

奥「かしこまりましてございます、かようなる一大事の場合おとどめ申しあげてもおとどまりになる気づかいもございますまい……お盃をただ今」

越「おうよう申した、これへ……」

そこでにわかにお盃の用意、もちろん水盃でございます。ご子息忠右衛門殿いまだ十一歳、これをつれてお立ちいでにあいなりました奥方、白石、吉田、池田の三人の公用人においてもその席につらなり、水盃を頂戴して、日の暮れるのを相待っております。

不浄門の籠ぬけ

そのうちに夜にいたりまして三人とも紺法被に梵天帯、真鍮造りの木刀、どうみても仲間の姿でございます、服装は仲間だが頭が武士、これではいかんというので、吉田三五郎は小身から上がった人で、こういうことには馴れているから二人の頭をなおし、自分の頭もなおした。

大「これで姿は仲間らしくなったが、色が白いな」三「それではまっていなさい」

吉田三五郎鍋墨をこてこてもってきて、

三「さあ、これを顔から手足、体中へ塗ったらよかろう」

これから鍋墨を顔から体中へ塗ったが、いや黒いの何の、まるでどら猫同様です。これでいいというので、破れ駕籠をもって御殿へくる。越前守殿は上下の上から白無垢をはおり、頭には白木綿の頭巾をかぶり、手には数珠をおもちになってすっかり支度をしてまっておいでになる。

治「恐れながらお支度よくば」

越「おお大儀である」

とおっしゃって越前守殿、駕籠の中へおはいりになる。お見送りする奥方、ご子息忠右衛門殿は、胸がいっぱい。仲間ばかりではいけないというので武士として御用人田口千介という人が提灯をもって付きそい、「それっ」というので、駕籠を担ぎだしたが、どんな厳しい閉門でも、死人なら不浄門からださなければならない。内からドンドンドンドン門をたたいて、

千「お願い申します、お願い申します」

○「なんだ」

千「ええ家中に病死いたした者がございます、菩提寺へまいりますからご門をあけますがよろしゅうございますか」○「さようか、閉門屋敷のことだによって多人数をだすわけにはいかぬ、何人ばかりです」千「侍一人、仲間が三人出ます」

○「さようか」

手まわりの提灯をつけて、両側にずらりいならんでいる。
○「さあ開けろ」
ご門を開ける。白石、池田の二人はそれへ手をついている、千介もそれへ手をつき、三五郎は駕籠脇に付きそってたっております。
○「これ、その方は何と申す者じゃ、姓名を申せ」
千「私は田口千介と申します」○「さようか、何者が病死いたしたか」
千「公用人、白石治右衛門の母でございます」
○「菩提寺はどこだ」
千「三田聖坂、巧運寺でございます」○「この仲間三人は見送りいたすのか」千「御意でございます」
○「一人ずつここへでろ、その方の名前はなんと申す」大「善吉と申します」○「生国はどこだ」
大「伊豆の松崎でございます」
○「何歳になる」大「三十一歳でございます」
○「親分はどこだ」大「南佐柄木町、武蔵屋善五郎と申します」○「よし……後の名前はなんという」三「熊吉と申します」○「生国はどこだ」
三「無宿でございます」○「黙れっ」三「へえ」
○「生国とは生まれた国をきくのだ、無宿といって生まれた国のないやつがあるか、無宿で奉公ができるか」
三「国は淀どす」○「なに」「淀どす」○「淀どすとはどこだ」三「山城国紀の郡」

○「なぜそうならそうと、初めからいわぬ、親分はどこじゃ」三「南佐柄木町、武蔵屋善五郎でございます」
○「後のはなんという」治「寅でございます」
○「寅なんという」治「ちい寅と申します」
○「ちい寅という名があるか、それはあだ名といって上へはとおらぬわ、寅吉とか寅五郎とかいう名があるだろう」治「さようでございます、まあ一つ考えてみましょう」
○「貴様の名を貴様が考えるやつがあるか」
治「子供の時分から友だちが、寅ちゃん寅ちゃんといっておやじやおっかあは寅坊寅坊と申します」
○「ばかめっ」治「寅坊とでも申しておきましょう」○「ばかを言え、寅坊などという名があるか、寅吉とでもしておけ」治「めんどうくさいから、そうしておきましょう」○「生国はどこだ」
治「竪大工町でございます」○「親分はどこだ」治「やはり同人でございます」○「三人とも、この死人を送りとどけて帰ってくるか」
大「帰りませぬ、主人はどんな悪いことをして閉門になったか知らないが、あっしらはこんな目にあう覚えはございません、どうかでたいでたいと思っていたところ、幸い葬式がありましたから担ぎだして、それからどこかへいこうと思います」
○「これ千介、三人とも帰らぬと申すがよいか」
千「へえ、もともとその約束でございますから、よろしゅうございます」○「帰れば帰るようにこの方でそのつもりがある、帰らぬとすればしかとあちらへ送りとどけて」

千「かしこまりました」

○「乗り物をこっちへだせ」千「どうなさるのでございます」○「閉門屋敷からでるのだから、改めないうちはだすわけにいかぬ、改めてつかわすからだせ」

といわれて、改めないまでも、越前守が中でくしゃみでもされては大変だと思っているところ改めるというので困ったが、しかし物というものは隠し立てをするとかえってうたぐるもの、さあ御覧なさいといわれてみると、あまり見たくないもの。そこで治右衛門がすっかり戸を開けはらってしまった。ろくに見もしないで、

○「よしよし」

千「よろしゅうございますか、化けるといけませんから、よく御覧なすって下さいまし」

○「ばかを申せ、もうよろしい」

と、あまり死人などは見たくもないから、ろくにのぞいてもみない。

○「やってもよい」三「さようですか、大きにご苦労さま、では田口さま、あとは私どもが受けあいます、ご機嫌よろしゅう」千「それではどうかなにぶんともに頼む」

大「かしこまりました……さあ担ごうぜ」

三「合点だ」

と三人ぽつりぽつり担ぎだす。

○「待て待て」治「何でございます、また改めて御覧になるのですか」

○「いや改めるのではない、ご門下をとおらんければとおれぬから手札を遣わす、拙者は市川新次郎という者、大岡越前の家来白石治右衛門の母、病死をして菩提寺へだします、ご門下をおとおし下さいとことわれ」

治「よろしゅうございます」

大きな声をしてそのとおりどなった。ご門下が、

×「亡者一人とおされましょう。塵とり塵とり」

というとすぐに箒をもってくる、とおったあとを掃除をいたし、水をくんでまく、とおれというので、ようやくにそこを立ちいで、ほっと息をついて、それより五六町こちらへくると腰掛け茶屋がございます、その陰のところへ乗り物を下ろして提灯のあかりを消しました。

大岡越前、覚悟の上申

越前殿乗り物からでて、

越「おおきに大儀であった」

お召し物を着かえ、大小をさして、それから主従四人が、取り急いで小石川お屋形へきたのは四つ半ごろ。水戸さまのご門はいたってゆるやかなお屋敷で、三百六十五日開けっ放しの門がございます。その門をはいって、中の口へ参りまして、

越「南町奉行大岡越前にございます、ご重役へ御意申したい」

と申し入れる。今日越前守閉門になったことは、だれ一人知らぬ者はない、閉門中の越前守が

くるはずはないと思って、取り次ぎの者もおどろいたが、

取「重役はもはや退出いたしました」

越「どなたでもよろしゅうございます、前様の御前近くご奉公いたされるお方に、お目どおりをいたしとう存じます」取「しからばしばらくお待ち下され」

この前様というのは前中納言綱条卿のことでございます。しばらくまっているところへ、ちょうどお退がりになってきたのは、家老山辺主水正のせがれ主税、年ようやく十八歳、前様のお気にいりでございます。

折しも前様ご病気で、夜にいたってお気晴らしのために、少々ご酒を召し上がって、お臥せりになるので、今までお話のお相手をして、いま退がってきたところ。

△「お願いでございます」

夜中願いなどというと、新参者が古参の者にいじめられて、つまらぬことを訴えてでる者があるので、多くは重役も取りあわない、きかぬふりをして退がってくるのを、

△「お願いでございます、先刻より南町奉行大岡越前守殿控えております。お願いの筋あっておいでの趣にございます」

大岡越前ときいて山辺主税は、

主「さようか、これへ」

といって一間へとおす、煙草盆、茶などを持ってでる。

主「初めてお目どおりをつかまつる、拙者は山辺主水正のせがれ、主税と申す者にございまする」

越「拙者は南町奉行を勤役いたす大岡越前にござる、夜中と申し、前様ご病中、お耳をおどろかし恐れ入り奉りまするが、天下の一大事これあるにより、やむを得ずまかりいでました。よろしくお取り次ぎの儀を願いまする」

主「しばらくお待ち下さい、天下の一大事の儀を、若年者のそれがしが承ってよろしいかいかが、ちょっと伺った上ご挨拶をいたします、しばらくお待ち下さい」

ご念の入ったお方ですから、主税殿ただちに席をたって奥へとおり、ご寝所のお杉戸をトントンたたきまして、

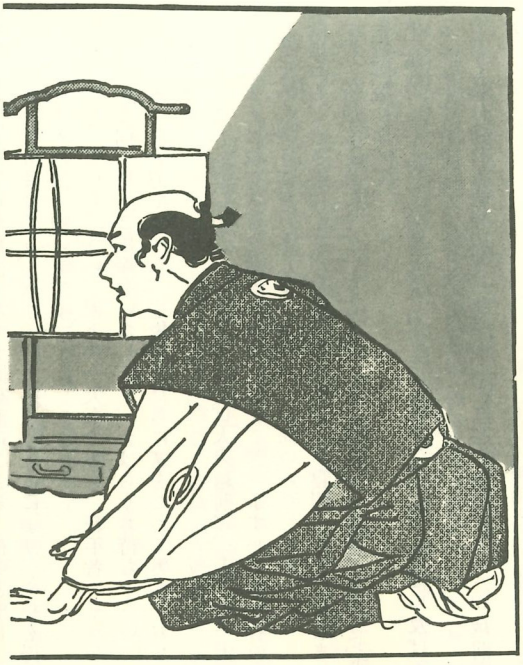
主「願います、願います、ただ今南町奉行大岡越前守、天下の一大事の儀を申しあげにいでました。てまえに取り次ぎを願うと申すことでございますが、若年者の私が天下一大事の儀を承りましてよろしゅうございましょうや否や、お伺いいたします」

前様おおどろき遊ばして、お寝巻きのまま、お寝間をおでになりました。大広間へ燭台を左右につけ、近臣もそれにでていならんでいる、越前守次の間に両手をついて控えています。中納言綱条卿御覧になって、

中「越前、天下の一大事と承りおどろいて立ちいでた、遠慮に及ばぬ近う進め、予は病気中であるによって許せよ」

お召し物は何れも白でございますから、こうご会釈があった。越前守恐れ入って畳を二畳ほどへだて、

越「夜中とは申し、またはご病中お耳をおどろかし申し恐れ入り奉ります。そもそも天下一大事の儀と申しまするは、このたび上方より下向にあいなりましたる天一坊殿のことにございます。



昨日ご老中筆頭松平伊豆守殿お役宅において、役目の上よりよそながら天一坊殿お顔元を拝しましたるところ、人を偽り、人を殺し、近きうち自害をいたすか、人のために殺されまするか、とにかく刃の下に命を失う剣死の悪相がございます」

中「うむ」

越「よってご老中方に対し、越前再調べの儀を願いましたるところ、大阪城代、京都所司代、老中において取り調べ、決定いたしたるものなれば、再調べいたすところはないとてお取り上げになりませぬ。再調べの上、正しくご落胤に相違なきときは、越前の儀、家改易、この身切腹にあいなり、親類一同同罪にあいなってもいといませぬ、お家のおんためにござれば、なにとぞ再調べの儀をおおせつけられたしと、再度お願い申しあげ、今朝登城を仕(つかまつ)り、お取り次ぎをもって言上いたしたるところ、重役をないがしろになすのいたし方なるによってまかりならぬという上意にて、越前ただちに閉門おおせつけられましてございます」

中「ああ待て待て越前、

戦場ご馬前の討死と違って、今の泰平に家をすて、命をすててもいとわぬというものを、たとえ筋が違うとて閉門を申しつけるという上様のご上意、その意を得ざること、だれが取り次ぎをいたした」

越「高木伊勢守殿にございます」

中「うむ、さては伊勢の取り次ぎの言葉に足らぬところがあったとみえる、よしよし、その方はなんと心得てこれへまいった」

越「それがしが願いまするは来年の三月まで、ご親子ご対面をお日延べにあいなりまするか、お鑑(かがみ)をもって再調べをおおせつけられるか、この儀を願いたく存じて、まかりいでましてございます」

中「越前、その方はかねて人相をみることが上手であると聞き及んでおる、その者が申すことを取りあげぬということはない、来年の三月まで日延べをするに及ばぬ、その方の屋敷へ立ち帰って予が沙汰(さた)をいたすまで、切腹をするには及ばず、上使がまいっても、水戸から沙汰のないうちは腹は切らぬといって、上使を追い帰せ」

越「はっ」

中「しかしその方は重い閉門になっておる身で、どうしてこれへでてまいった」

越「なんとも恐れ入りましたが、天下の一大事でございますから、警衛の役人をあざむき、不浄門より死人のまねをいたして、公用人三人を仲間の姿にこしらえ、抜け出でましてございます」

中「さようか、大行(たいこう)は細謹(さいきん)を顧みず、叱りはせぬが役人の目をあざむきたるかどなるによって誉めはいたさぬが、知謀(ちぼう)であるな。……ついては今度立ち帰るに、ただ今の死人が帰ってきたといって帰るわけにもいくまい」

としばらく考えておられましたが、

中「主税、これへでい、その方にこの大役を申しつけるによって、首尾よう勤めよ、越前を駕籠わきの侍にして、公用人三人は仲間の姿を幸い、駕籠を担がせて越前の屋敷へまいり、閉門屋敷をあけさせて、越前主従四人を送り届けてまいれ」主「かしこまりました」

中「閉門屋敷の儀であるから、容易のことでは開けまい、されば大役であるからその方を見たて申しつけるのじゃ、仕損じて水戸の名を落とすな」

とおっしゃって、お刀を下しおかれた。

主税の頓智(とんち)で開門す

さあ主税は心配です、首尾よくいけばよいが、もしご門を開けないといえばその出役の者を切り捨てても、越前主従を送り届けなければならぬからなかなかの大役です。

主「委細かしこまりました」

とそうそうにしたくをして、小石川のお屋敷をいで、丸に水という紋のついた高張(たかは)り提灯(ちょうちん)をつけ行列を揃えて越前屋敷へかかってきた、主税は熨斗目(のしめ)麻上下福草履をはいて、大小をたばさんでおります。出張の役人一人つかつかと門のところへでてきて、

○「どなたさまでございます」
主「水戸前中納言殿家来、山辺主税という者、主命によってまかりでた、開門いたせ」○「へえ、ご案内でございましょうが、越前儀は重き閉門おおせつけられております」
主「知っておる、心得違いによって越前こと閉門になったゆえ、越前の心得になることを申し聞かせにまいった、もとより閉門の儀は承知いたしておる」○「さようでございますか」
主「閉門屋敷の儀であるから、開門ができぬとならばできぬといえ」
主税は色を変えて柄に手をかけて、前に進んできたから、役人はおどろいて、
○「いや開門ならぬという次第ではございませぬ、御覧のとおり支配頭の封印がございます、それをわれわれがとるわけになりませぬから、ご賢察を願います」
主「もっとも千万だ」
とつかつかと側へきて、封印をピシピシとってしまった。
主「さあかくのとおり、封印がなくなったらよかろう」○「へえ」
主「支配頭からなんとか申してまいったおりは、水戸の家来山辺主税がとったといえ、決してお身たちには迷惑はかけぬ、支配頭にこの方が談判をいたしたらよかろう、封印がなければ開けてもよかろう」
乱暴なことをする人だと思ったが、
○「かしこまりました、直ぐに御用便にあいなりましょうか、お手間がかかりましょうか、ちょっと伺います」
主「越前守の存じ寄りによっては直ぐにも立ち帰るが、また越前の申し分によっては一日はおろか三日もかかるかも知れぬ」

○「どうぞ成るたけお早く願います」主「閉門屋敷のことゆえ、この方も好んで長くいたくはない、その辺についてそこもとらに迷惑をかけることはない、安心をいたせ」
○「承知いたしました、ご人数を改めますがよろしゅうございますか」主「ああいい、改めなさい」
そこで一人が、武士が何人、仲間が何人と書きとめて、ギイーと門を開けたから、ドカドカ一同門内へはいってくる。
玄関正面より越前守、主税をつれて一間へとおりました、越前守主税の前へ、両手をついて、
越「さてただ今拙者のために、身命をなげうってのお計らい、まことにありがたきしあわせに存じます」
主「かくなったる上はもはや大丈夫、短慮をなさるには及びませぬ。水戸から沙汰のないうちは、腹をきれというご上使があっても、決して腹を召すにも及びませぬ」
越「かしこまりました、ついてはただ今門をはいりまする節に、武士が何人仲間が何人としたためましてござるが、お帰りの時に四人不足いたしましたら、何か咎めるでございましょう」
主「いやその辺はご心配には及びませぬ」
と、いいすてて山辺主税、越前守に別れてまたまたご門わきへきて、「ご門を開けろ」もとのとおり役人立ち合ってスッとご門が開く、ドカドカでてくる。
○「少々、お待ち下さい、人数を改めます」
主「さようか、みな待っておれ、退散をしてはならぬ」

さあ役人が見ると、武士が一人、仲間が三人足りない。

○「少々お伺い申します」主「なんだ」○「おはいりなさるときとは、武士が一人、仲間が三人、数が違いますように存じますが、いかがでございますか」

主「さようか、見違いであろう、決して越前の家来をつれてまいりはいたさぬ」

○「いや、越前の家来をつれておいで遊ばしたというわけではございませぬ、おいでなさるときとは武士が一人、仲間が三人不足いたしておるように存じますからお伺いいたします」主「さようか、不足のようとはどういうわけだ、失礼ながらおのおの方はお小人目付だ、目つけといえばなかなか重い役目と心得ておる、不足なれば不足となぜいわぬ、ようだのかだのというは疑いの言葉だ、なんのために目をつけておいでなさる、水戸の家来は閉門屋敷へきて、家来を四人おいてくるようなことはいたさぬ、不足の者は一人もない、またお身たちが怪しいと思うなれば姓名を承りおいて、お屋形へ言上いたし、おのおのにも五日か十日の閉門を食わして上げよう」

○「それには及びませぬ」

主「それなればよろしいではないか、もし差し支えがあるなれば……」○「いやよろしゅうございます」

主「されば今晩のところは聞きずてにいたしおく。以来気をつけさっしゃい」○「ありがとう存じます」主「それいけ」

といって、小石川の御殿へ立ち帰ってまいりました。

水戸公早朝のご登城

綱条卿は心配をなすっておいでですから、主税が帰ったとおききになると、すぐに御前へ召されて、

中「いかがいたした主税」主「斯様斯様云々でございます」中「さようであったか、よう当家の威光を示してまいった」

と中納言殿おおきにお喜び。これよりただちにご登城のお支度にかかる。

前中納言殿にわかのご登城ということにあいなりましたので、

中「これこれ月代を剃れ、衣類をだせ、供揃いを申しつけい」

ご近習一人それへ進みいでまして、

近「いまだご刻限がよほど早うございます」

水「いや、越前の参ったのは八つ過ぎ、それから間もなく七つをうった、もはや明け六つ近いによって支度をいたせ」近「いえ、お時計がただ今八つ過ぎたばかりでございます」

中「いや、そういうことはない、時計をもってきてみせい」

お時計をお取り寄せになって御覧になると八つ少し過ぎ。

中「これは時計が狂っておる、他のをもってまいれ」

またほかの時計をお取りよせになってみると、やはり八つ過ぎ。

中「これはみな時計が狂っている、安物を買うな」

水戸さまはそんなことはおっしゃらない。中納言殿がこのようにお急ぎになるのは、越前守に向かっては切腹の上使があっても腹をきるには及ばぬ、予が沙汰いたすのを待てといって帰しましたが、これはただ越前に力をつけてやったので、切腹をしろという上使がくればもう越前は腹をきるに決まっている。よって寸時も早く登城をして、上使のまだでないうちに将軍に向かって天一坊殿再調べの儀を申しあげようという中納言殿のお考え。近習が、

近「いまだ御前はご病気のことでございますから、お月代はよろしくございますまいか」

中「いや当上さまはご本丸でご成長になったお方と違い、紀州よりお乗り込みになったお方ゆえ、予が総髪のままで登城をいたしては、なにか上を蔑ろにいたすようでよろしくない、天下の一大事であるから寸時も早く登城をいたさんければならぬ、そろそろ月代を剃れ」

それでもとはいえないから、ご近習がお月代を剃って差しあげる、衣服もお着かえになり、かれこれしているうちに七つのお太鼓がドーンドーンドーンときこえる。これを六つと聞き違えましたから、

水「それ六つである」

とおっしゃってお玄関へでていらっしゃる。近習が、

近「ただ今のは七つでございます」

申しあげたがなかなかお聞きいれがない、すぐにお駕籠に召してにわかにお供揃い、「下に下に」といって小石川のお屋敷をおでかけになったが、いくら下に下にといったところで、七つ過ぎたばかりだから小石川近辺は一人の往来もない。

小石川御門へかかってくると、門番のうち一人内職をして起きていた者がある。「下に下に」という声がきこえたから、おおかた早出の役人が時を間違えたのだろう、いま時分下に下にと下座触れをかけて登城をするような大名があるわけがないと思うから、

門「黙れっ」口「下に下にーっ」門「黙れっ」

何といっても黙らない。それから六尺棒を小脇に掻いこんで、がらりと門を開けてみると水戸さまの行列。門番はおどろいて、

門「これ同役、水戸さまのご登城だ」

聞いた一同の門番、あわてふためいてまごまごしているうちに、そこをおとおりになり、白河口へおいでになったがなかなかご門が開かない、御三家御三卿が登城になるときは白河口と決まっている。まだご門が開かないから行列もぴたりと止まる。

お駕籠の中の中納言殿、

中「なぜ供方を止めたのじゃ」

○「まだ六つでございませぬからご開門になりませぬ」

中「小石川で六つをきいて、ここへきて六つをうたぬということがあるか、太鼓番の者が寝呆けたに違いない、六つをうてと申せ」

○「なかなかそうはまいりませぬ」

かれこれしているうちに六つの太鼓が鳴る。すぐにご開門になると、山辺主税を召して、

中「主税、その方先番をつかまつれ」主「かしこまりました」

山辺主税先番をして、

主「小石川前中納言綱条病気全快につきお届け申す。また天下一大事の儀を言上つかまつる」

と申しあげた。将軍吉宗公、ちょうどお目覚めになって、神前仏前に礼拝がおわって、お茶を召しあがっているところへ、その趣を申しあげたから、

吉「病気であった水戸殿が全快いたしたと申すか、天下一大事といえば容易ならぬこと」

さっそくにご出座になる。傍らにはお側御用取次をはじめとして、一同の役人控えております。そのうちに水戸さまのご登城、梅の間においてご休息になり、お坊主の肩につかまってお上がりになる、両手を支えるのを上様が御覧になると、いたってご癇癖の強い水戸さまでございますが、ご病気のため、両手の爪がのびている、月代は剃ったが襟元には垢がたまっている、風呂にはいりにならないからくすぶりかえっていらっしゃる。

中「当日は快晴、恐悦に存じ奉る、ご安泰なご尊顔を拝し、綱条喜ばしく存じ奉ります」

吉宗公御覧になって、

吉「水戸殿には病気全快の由、満足に存ずる、天下一大事の儀があるとのこと、さっそく申しのべるように」

中「その儀は当時南町奉行勤役いたしまする大岡越前守、右は何人が名奉行とおおせられましたるか、承りとう存じます」

吉「さればじゃ、越前守を指して名奉行とはこの吉宗が申したのじゃ」

水「上様お鑑によって名奉行とおおせられたる越前守このたび上方より下向にあいなりました天一坊殿お面に、人を偽り、人を殺し、身分にあまる大望をくわだて、近きうち自害をいたしまするか、人のために殺されるという剣難の相がありまするによって、ご親子ご対顔の後、万一のことあっては一大事でござるによって、いま一度越前守に再調べをおおせつけ下されるよう、もしまたお調べ申したうえにて、上様ご落胤に相違ないこと相定まりましたる上は、越前の儀は家名改易、同時に切腹、親類一同同罪にあいなってもいとい申さぬと言上いたしましたるところ、なにゆえあってそれをお許しなく、またなんのかどをもって閉門おおせつけられましたか、その次第綱条伺い奉る」

吉宗公はじめて悪相のことをお聞き遊ばしておおどろきになった、お側御用取次の高木伊勢守がそのとおり取りつがないから、ご存知のないはず。伊勢守このときお側に控えていたが、「南無三、これは大変だ」と思った。ご老中ににらまれるのがつらいから、いい加減に取り次ぎをした、それが露顕に及んだのだから、ぎょっとして下を向いている。上様が、

「なぜ伊勢取り次がぬ」

とおっしゃれば、伊勢守直ぐに切腹をしなければならない。けれどもこのくらいのことで切腹をさせるような吉宗公ではございませんから、

吉「伊勢、越前守の閉門を許し、そうそう登城いたすよう取り急いで申し達するよう」高「はっ」

と答えて伊勢守急遽として退出する。

吉「水戸殿には、ただ今越前守に天一坊再調べの儀を申しつかわしますゆえ、しばらくお控え下さい」

水「さようにござりまするか」

といって、お待ちになっている。

ぬかりなき捕り方の陣

こちらは大岡越前守殿、治右衛門、三五郎、大助の三人を呼んで、

越「さて、その方どもの尽力によって閉門屋敷を抜けいで、小石川お屋形へ参上いたしたが、いまもってなんのご沙汰もない、ご病中であるによってはかばかしくご登城もならぬものとみえる、ただ今にも公儀よりご上使がまいらば越前切腹をいたす、しかしその方どもにおいては決して殉死追腹などいたしてはあいならぬ」

といっているところへ家来の者、

家「申しあげます、ただ今ご上使にございます」越「うむ、公儀よりのご上使か、水戸殿よりのお使いか」家「公儀より高木伊勢守殿ご上使にございます」

「ああ、もういかぬ」と思召した越前守、そこですぐにお召しかえをしてお出迎えをする。高木伊勢守が、

高「上意の趣、閉門差し許し、取り急ぎ登城いたせとの御諚」

これを聞いて越前守、夢に夢見し心地、しばらく考えておられるようす。

高「越前殿、ご不審ごもっともでござるが、ただ今小石川前中納言様ご登城にあいなり、天一坊殿ご面相の儀詳しく言上にあいなり、よって再調べおおせつけられることにあいなったのでござる、そうそうご登城あいなるよう」越「千万かたじけのう存ずる」

そこで越前守殿そうそうご登城、将軍家御前へでると吉宗公、

吉「越前、天一坊相好の儀初めて承知いたした、その方へ再調べを申しつける」

というおおせ。そのまま吉宗公はお立ちになる。越前守は改めて水戸公の前に両手をつき、

越「越前無知短才にいたして、このたびのお調べを承りますること、家名の誉れ、身の面目、ありがたきしあわせに存じまする、ひとえに前様のお取り計らい、厚くお礼を申し述べます」

水「いや、予が登城いたしたかいあって、再調べの儀その方へおおせつけられたる段満足に存ずる、そうそう立ち帰って家来どもに安心いたさせ、再調べいたすがよい」

越「ありがたきしあわせに存じます、しからば御免を蒙ります」

と、昨日退出のおりからは閉門となって、屠所の羊のごとく悄然として下城したに引きかえて、今日は意気揚々としてお帰りになる。ご家来の方々は首尾いかがと心配しているところへご帰館でございますから、一同玄関へお出迎えいたします。

越「さてみなの者、定めてこのたびのことについては心配いたしたであろうが、越前、天一坊殿再調べをいたすことにあいなった、小屋へ立ち帰って女子供に聞かして喜ばしてつかわすがよい」

これを聞いた一同、

一同「恐悦至極に存じまする」

と祝辞をのべて、各自心も勇み、自分自分の小屋へ立ち帰って家内、老人、子供にいたるまで

このことを申し伝えて、ともどもの喜び。

越前守殿はお庭にお立ちいでになり、十数杯の水垢離をとり、日ごろご信仰の豊川稲荷を念じ、お座敷へお帰りになって、三人の公用人をお召しにあいなりました。

越「さてその方どもの尽力にてかくあいなったについては、これより先が別して大事である。大助は家事万端を取りはからい、三五郎は召し捕り手配に及び、治右衛門はこれより八つ山へ出向き、天一坊主従をこのほうへ呼び寄せるよう手配いたせ」治「かしこまりましてございます」

そこで吉田三五郎は召し捕りの手配に取りかかり、第一番に品川の口、新宿の口、板橋口、日光街道をはじめとして、江戸の口々に厳重に手配をいたし、木戸木戸を四十七組の鳶人足に申しつけ、長鍵手鍵をもって固める、そのほか八方へ厳重に手配をいたして、いざというときに逃げることのできないようにいたしました。

天一坊・下におれっ

さて越前守公用人白石治右衛門は、八つ山の天一坊旅館へまかりいでまして、

治「将軍ご名代として越前守、いま一応お取り調べいたすべきにつき、明日辰の上刻に越前守役宅へご出頭これあるように」

と申し込みました。これを聞いて山内始め一同大いにおどろき、すでにご老中までも首尾よくあざむき終わせたるに、名奉行の越前守の取り調べとあっては容易ならんと思ったが、違背するわけにまいりませぬ、よって委細承知いたしたといって、白石治右衛門を帰しましたが、あとで山内は、大膳、左京、天一坊、常楽院などと酒を飲みながら、

伊「さて明日こそはいよいよ召し捕りになると覚悟しなさい、もうご城代所司代、ご老中でことの済んだのを、町奉行で調べられるようなことではだめだ、明日越前守がていねいに取り調べをいたしたら露顕したものと覚悟をしなさい、そのわけいかんとなれば、ていねいにしておいて油断をしたところを調べるという考え、またごく粗末にしたならば召し捕りになると覚悟をなさい、そのわけはどうでにせものなればかまわぬという了簡で、粗末にするかもしれない」

赤「なるほど先生、してみれば、丁寧にされても粗末にされても、とりえがないではありませぬか」

伊「また越前守を将軍家と心得、与力同心仲間などはみなお旗本御家人と心得、越前守の役宅を殿中と心得なさい。むこうで必ず無礼をするに違いない、その時におまえ方が刀でもぬくと、先方ではそれをまっているのだ、お町奉行お役宅において、剣戟の沙汰に及んだ狼藉者といって縛られる、縛って調べる方が都合がいいから、さあ、ぬけぬけといわんばかりの計らいをするかもしれん、決して刀を抜いてはならぬぞ」

赤「ようございます」

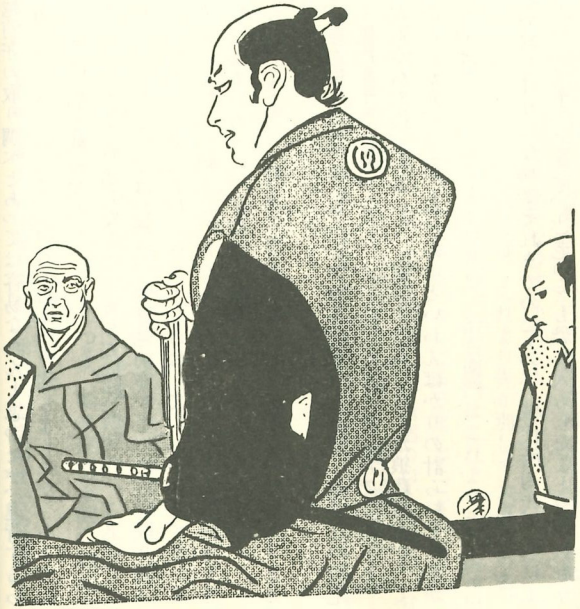
伊「もう京都でも大阪でも、道中で召し捕りになればそれまでのことだ、城代所司代ともに土下座をさして、東海道を下に下にといって下ってきて、ご老中をも恐れ入らしたことだからもうこれで充分だ、悪人の話のでるたびごとに、天一坊がこうこう、山内がこうこうといって、われ

われの名のでるは必定、善でも悪でも後世に名前を残しておけばそれでいい。しかしそうそう力を落としたものでもない、越前の器量が灯心の光ほどあれば、おれの器量は月の光ほどある」

藤「なるほど、そうしてみれば先生のほうが優れているによって、先生のほうが問答に勝つでござろう」

伊「おれが越前守なれば無論とっておさえてしまう、器量があっても悪人だ、むこうは器量がなくても善人だ、そこで互角だ」藤「なるほど、つまりどっちに扇があがりますか」

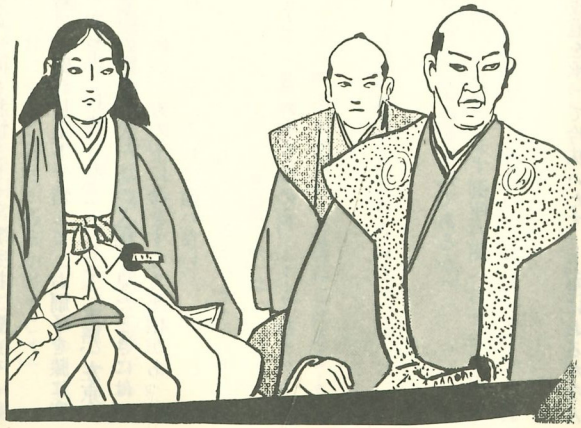
伊「されば邪は正に敵せず



というから、越前の方が勝つだろう」赤「それじゃあまことに頼りない話ではありませぬか、どうか、まあ夜があけなければいい」

といっているうちに、はや鶏鳴暁をつげ、五つという刻限になったから、赤川大膳先番で、大岡越前守の役宅へいったが、普通の者ではできないから、当日は池田大助門番の姿になって控えていて、いやどうもひどいあつかい、その内に供揃い堂々と天一坊乗りこんできたが、まるで囚人あつかいでございます。

腹をたって刀でもぬこうものなら、狼藉者といって縛られてしまう、それが越前守の



ほうの手です。けれども前日伊賀亮にいわれているから一同も我慢をして、刀を抜くようなことは決してしないで、なすがままにしている。

そのうちに天一坊奥へきてみると、一段高いところに、熨斗目上下を着して、お扇子を膝に突きたてて大岡越前守が控えている、座るところがないから天一坊突ったっています。大膳、左京、常楽院、伊賀亮はそれへ控える。越前守殿は先ごろ老中の屋敷で天一坊の人相を見たときには、人を殺し、近きうちに自殺するか、人に殺されるか、とにかく刃の下に命をすてる悪相があったが、今はどうかと、きっと顔をあげて天一坊の顔をみると、正にそれに違いない。

越「これ天一坊、下におれ」

天一坊は無言のままたっている。

越「下におれと申すに。天一、今日越前守、役目をもってその方を改める。……これその方は耳が遠いか、下におれと申すに」

じっと天一坊の顔を睨みつけた。伊賀亮膝を進めて、

伊「越前殿に申し上げまする。上へたいし下におろうとはご無礼ではござらぬか」

越「なにっ、なにが無礼だ、その方は何じゃ」

伊「拙者は山内伊賀亮と申する者」越「その方が伊賀亮か、なにが無礼であるか」

伊「たとえお役儀にもせよ、天一坊さまは上様ご総領のご公達、まず御座の間へおとおし申し、寒暖のご挨拶があって後にお調べあるが当然、しかるにご自分は一段高いとこにおって、下におれとは何事、それゆえご無礼だと存ずる」

越「黙れっ、今日は南町奉行大岡越前守、天下の政道を承って吟味いたす、上座におるがなんの不都合。下におれ、尋ねることがある」

居丈高にかたちを改めた越前守忠相。

伊賀亮と決死の対決

越「これより越前、吟味をいたす、一々返答いたせ」

伊「あいや、総てのことはこの伊賀亮のあずかるところ、何事も伊賀亮にお尋ねこれあるよう」

越「うむ、天一坊にかわって、その方が答えると申すか」伊「さよう」

越「しからばこれより越前の調べる条々、一々答えをいたせ。……伊賀亮」伊「はっ」

越「この天一坊は佐渡国相川の在浄覚寺より美濃国へまいって、上様ご落胤ということがわかり、その美濃から大阪へまいったのじゃな」

伊「御意にございます」

越「なにゆえすぐに江戸表へ参らぬ、父母いますときは遠く遊ばず、江戸表にお父上様がありながら、なんで用もない大阪へまわった、大阪は町人が多い、武家が少ないところであるから、まず大阪の人の耳目をおどろかせようという考え、早く申せば山師のいたしかた、なにゆえ莫大の入費を使って大阪へまわったか、これ不審の第一、これについて答えがあるかどうじゃ」

伊「伊賀亮申しあげまするが、佐渡国にご出生にあいなり、なお美濃国常楽院にご滞在、一度

は円頂黒衣の姿により、世は捨てねども世に捨てられし御身の上、よって生涯は日蓮宗の僧としておわるとまでおおせありしをわれわれどもご意見申しあげ、当将軍家ご総領の御身でありながら、これをこのままにして髪をおろし、生涯仏門にいることよろしからず、少しも早く江戸表へならせられ、御父君にご対面あって、ご安堵をおさせ申し上げてこそしかるべき由を申しあげました。しかし長らく民間においでにあいなり、ことに日蓮宗の僧とあいなったるがために、大きに俗に遠ざかられる、されば大阪の地にしばらく足を留め、なお京地にいたり、諸礼諸式をお習い遊ばしたき思召し、それゆえ京地にしばらく滞在をいたしました次第でござる」越「しからば尋ねるが、天一坊は日蓮宗の僧じゃな」

伊「御意にございます」

越「これ伊賀亮、日蓮宗の出家なれば、なぜ出家相当のいでたちをいたして江戸表へまいらぬ、一万石は一万石、一千石は一千石の格式というものがある。日蓮宗の出家でありながら、弓槍鉄砲の持道具を所持いたすは、出家にあるまじきこと、たとえいかなるお身分たりとも出家たる者が弓槍鉄砲の諸道具を所持いたすべきものでない。これすなわち衆目をおどろかすいたしかたならずや、出家の法式をもって江戸表へ下らぬのはどういうわけじゃ」

伊「伊賀亮お伺い申しあげまする。弓槍鉄砲のもちようが多いとおっしゃいますか、あるいは少ないとおおせあるか伺います」

越「数の多少を論ずるところでない、日蓮宗の出家が、弓槍鉄砲をもってまいる法はあるまい」

伊「それならば申しあげまするが、弓槍鉄砲はわれわれがもってお供をいたしました。天一坊

さまのお持ち弓、お持ち槍、お持ち筒というものは一つもございませぬ。おもち遊ばすはお薙刀ばかり、治にいて乱を忘れず、家に鼠、国に盗賊、この世にいかなる謀叛人がないとも限りませぬ。すでに恐れながら三代の上様ご上洛の節、箱根の山中にて乗り物へ鉄砲を向けたる曲者のありしことを聞き及びおりまする、また当上さま先年日光ご社参のみぎり、お乗り物へ弾丸を打ちこんだ者がございました。二の弾丸をこめて己が咽喉を撃ってあいはてましたによって、この者の姓名はわかりませぬけれども、これは何者かに頼まれたのであるということは、貴殿もご承知のはず、されば天一坊さまを亡き者にし、何人かをもってご落胤ととなえ、江戸へ乗りこもうと謀る者があったればいかがなさる、それゆえご尊体につつがあってはあいすまずと存じ、われわれが弓槍鉄砲をもってお供をいたしました」

これには越前守もいささか閉口の体、なにぶんにも伊賀亮は役者が一枚上らしい。

越「うむ、しからばあい尋ねるが、この天一坊を上様のご落胤としてなにほどのくらいがある。上野にご座おわせらるる輪王寺の宮様と、天一坊の身分とは、どのくらい違うかこれをききたい、どうじゃ」

伊「されば、たとえ天一坊さまが上様のご総領にもせよ、お脇腹でいらっしゃるから、宮様とは同一の論にはなりませぬ」

越「どのくらい違うかというのを尋ねるのじゃ」

伊「されば京都からお勅使が到着いたしまして、一条、二条、近衛、九条、鷹司、これを五摂家ととなえてご登城になりますときには、中の御門にてご下乗にあいなります。四親王家ととなえて、第一番が有栖川宮、閑院宮、京極宮、伏見宮、このお四人は玄関前からお上がりになり、芝の

方丈、すなわち大僧正はお玄関前からあがり、上野の宮さまはお玄関横づけに遊ばすというのは、禄取りは多くございまするが、宮さまのお沓に手をかけるものがござらぬため、関白の沓を中納言以下の者がとっては無礼としてございます。よってお玄関横づけに遊ばしてご登城にあいなりまする次第、輪王寺の宮さまと天一坊さまとを同一にみることはできませぬ」

越「うむ、その輪王寺の宮様は、飴色網代蹴出し塗り棒のお乗り物にお乗り遊ばす、天一坊はそれと身分の相違がありながら、同じく飴色網代蹴出し塗り棒の乗り物に、だれの許しをうけて乗った。これすなわち衆人の目をおどろかせようとしたるわざ、これについて答えあるかどうじゃ」

伊「されば、その子細お話し申しあげん」

と伊賀亮が開き直って、とうとうと述べ立てた飴色網代蹴出し塗り棒を用いた次第。

徳川家康公は天文十一年極月二十六日ご誕生、ご幼名を竹千代丸とおっしゃった、三州鳳来寺峰の薬師というのに十二童子というものがあって、そのなかの寅童子のお木像が、家康公のお生まれになったときに失った、されば家康公は寅童子のご化身だとなっている。元和二年四月十七日ご他界になったときに、その寅童子の木像がご無沙汰といってもとへ戻ってきた。いったん失ったので一体こしらえたところがふたたび現れてきたから、峰の薬師には十二童子が十三童子になった。「猿の尾は短し虎の尾は長し」というせりふがありますが、秀吉公は猿に似ていたから、せがれの代になって滅びた、家康公は虎に似ていよいよ天下を掌握した。ですから徳川家康公の知略にすぐれていることは別段で、ご自分は征夷大将軍の職を握っているが、万一尊きお方の逆鱗にふれ、関東を追討するなどということがあっては大変ですから、家康公はかねて皇子

おひと方関東ご下向を願った。その理由は、京都御所の鬼門除けは比叡山延暦寺でございますから、どうか関東へも江戸城の鬼門除けの一寺を建立し、なお皇子をその寺にお迎え申しあげたいという願い、いわば体のよい人質。皇子を関東へ招いておけば、よしや一朝ことが起こっても、やはり南朝北朝のごとく、錦の御旗を立ておしてくれば、こっちも錦の御旗をたてようという家康の考え。そのことのほぼ定まったときに一条関白兼家という御仁、この兼家という方はお顔が猿に似ていて、十六歳で元服を遊ばしたときに、何者ともなく、

猿の頭に冠着せけり

と悪口をいった。このとき兼家公が、

元服は未の刻に傾きて

とおっしゃった。それで三十一文字、立派な歌になりました。この兼家と秀吉とを取りちがえて、秀吉公が猿に似ていたと申しますが、じつはこの兼家が猿に似ていて、秀吉は犬に似ていたということです。犬面異相といって、口が大きくって耳が垂れていて、目じりが下がっている、どっちにしても人間には遠かったとみえます。その一条兼家公一人が不承知で、

兼「征夷大将軍たる者が鬼門を恐れるというはどういうわけだ。さようなことを恐れない者を選んで征夷大将軍にするがよろしい、もし鬼門ぐらいを恐れるならば退役をなさい」

といって一本突っこまれた。そこでぐずぐずになり、二代の将軍秀忠の代になって、家康公ご他界の際に、どうかぜひとも皇子さまのご下向を願わなければ、徳川の家安泰でない、よってその方よしなに取りはからって、必ず実行してくれるようにとご遺言になった。二代将軍はご如才のない方ですから、ご自分のお姫さまの和子というお方を京都へ中宮に差しあげた、後にこのお

方を東福門院さまと申しあげました。そこで二代将軍が参内をなすったが、そのときに関白鷹司公へ数々のお遣い物、これで関白の心をすっかり握っておいて、秀忠公また三代家光公にたいしてご遺言になってご他界。三代家光公はご兄妹ですから、東福門院さまへお話になり鷹司関白にご沙汰がありましたから、ここではじめて関東へ皇子をお下しになり、江戸の鬼門除けというものができるようになりました。京都の

鬼門除けは比叡山、延暦十三年伝教大師の開山で建てたから延暦寺。江戸城の鬼門除けは上野、開基は天海僧正、寛永元年に建立になったから寛永寺、叡山を関東にうつすという意味で東叡山。そのときにこの上野の宮様のお乗り物についてご相談になり、陽の緋色になっては悪いというので、上へ黒い漆をかけて朱黒色、これを俗に飴色という。

これらの話からもちこんで山内伊賀亮が、

伊「天一坊さまご親

子ご対顔の上は、いかなるお位におつきになるかたとえばご還俗にて御三家ご同様にあいなり遊ばすか、ないしは日蓮宗のご出家でおわらせられるか、いまだご身分が定まりませぬから、陽の緋色とあいなっては悪いと存じ、陰の飴色網代にお乗せ申し、ご道中なれば、御御足を投げだして差し支えなきよう蹴出しをしつらえ、出家であるによって、黒の塗り棒にいたしました。そのいずれが悪いとおおせられまするか」

とうとうと水の流るるごとき伊賀亮の弁舌。このとき大岡越前守しばらくのあいだお考えになっておりましたが、これはいつまで問答をしていては、伊賀亮の弁口のために説き伏せられ、恥辱の上に恥辱を重ねる道理と考えましたから、

越「しからばそれにてよろしい。ついてはお墨付き、ご短刀の二品を拝見いたしとうござる」

伊「委細承知いたしてござる」

待ってましたといわぬばかり、お墨付き、ご短刀の二品を取りよせて越前守の前へだす。越前守忠相御覧になると、吉宗公がおしたためになったものに違いない。ご短刀も志津三郎兼光の鍛えた一刀、葵ご紋散らしがついておりますから、こればかりはにせものとは思われない。

このとき越前守、なに思いけんお席を下がり、ものをも言わず、かたわらにいた天一坊の手をとって引きたてるようす、一同さてはと思ううちに、かねて御座の間をしつらえておきましたから、そこへ案内をする。前に御簾をさげ、後に金屏風をたてまわし、手あぶり、煙草盆、紙台、ひじかけ、すっかり揃っております。

越「まずご一統にもこれへ……」

御簾の前のところに赤川大膳、藤井左京、常楽院天忠坊、山内伊賀亮が控える。越前守忠相は

るか後ろに下がって両手をつき、

越「天下の御ためとは申しながら、重ねがさねご無礼の段恐れいりまする。越前の儀は差しひかえ、閉門謹慎つかまつり、さらにご親子ご対顔の儀をお取り計らいつかまつりまする。先ずそれまでは八つ山御殿へお引き取りを願いまする」

この時赤川大膳が、

大「恐れながら申しあげます」

御簾のうちから天一坊、

天「ああいや取り次ぐに及ばぬ、お父上が名奉行とおっしゃるほどあって、今日の調べ、よく行きとどいておる、必ず差しひかえ閉門には及ばぬ。越前、予は美濃表を出立いたしてより、片時も早くお父上にお目どおりをいたしたいと存じおったるところ、よしなに取りはからいくれよ、今日は大儀であった」

山内伊賀亮それへ進み、

伊「まことに今日は失礼を申しあげてござる」

越「てまえこそ恐れ入りました、この上とも御前体よろしく」

伊「かしこまってござる、一日も早くご対面になるよう、お取りはからいを願います」

越「委細承知いたしてござる」

それ還御というので、先のとおり行列を揃えて悠々と戻っていく。越前守殿ご門前へ両手をついて控えている。赤川大膳が、

大「申しあげます。越前、これまでお見送りにございます」天「お大儀である」大「越前殿大

儀とのおおせ」越「ははっ」

越前守が頭を下げておりますうちに、シーッシーッという警蹕の声とともに、天一坊の行列は八つ山を指して戻っていく。

大岡をおそれる伊賀亮

やがて頭をあげた大岡越前守忠相、行列のいくあとをはったと睨み、

越「享保二年町奉行おおせつけられ、今日までただの一度も不覚をとったることなきに、憎むべきやつは天一坊、恐るべきやつは山内伊賀亮、たとえ今日恐れ入っても、ご親子ご対顔の儀を何とて取りはからおうか、いま一度調べし上、きっと恐れ入らしてくれるぞ」

と拳を握り、歯を食いしばっておいでになると、門番の姿をしていた池田大助がそれへ進んで、

大「恐れながら、ここはご門前にございます」

越「おうさようか」

大助に心づけられてわれに返った越前守、そのまま奥へお引きとりになりました。こうなるともう登城はできない、登城をすれば上様が、さあ越前どうしたとお尋ねになるは必定、そのときに今日の問答に負けました、もう一度調べさせていただきたいとは申しあげられない、といってご親子ご対顔をさせることはなおさらできない、いかがいたしたものであろうと、しばらくは、

両手を組んだまま考えておられたが、このうえは病気の届けをして、その上とくと工夫をしようと、ここで越前守は、さっそくに病気届けを差しだしました。さてこちらは天一坊の一行、八つ山御殿へ立ち帰ってきて、ほっと一息。赤川大膳が、

大「いや山内先生、今日はご苦労でございました、じつに先生のご弁舌とうとう水の流るるごとく越前守も恐れ入ってしまいましたな。これでもう恐るるものはございますまい、のう藤井」

左「左様、もう大丈夫、こと成就も近いうちだろう、まことにめでたいことだ。先生、ご苦労でございました」

一同が喜ぶに引きかえて、山内伊賀亮うれしい顔もしない。

伊「いやいや、まだめでたいといって安心はできぬ、越前は恐れ入ったと口にこそいったものの心から恐れ入ったわけではない。拙者の弁舌に一時は恐れ入って、ご親子ご対顔を取りはからうといったが、あれは嘘だ、いま一度調べるか、それがかなわぬ時は、腹かっさばく覚悟じゃ。恐るべきは越前守、あっぱれの男だ」

大「へえー、先生がそう弱音を吹いてはこまります。してこの先はどうなります」

伊「されば、まず大岡が書き置きをのこして腹をきって死ぬ、けれども何本書き置きがあろうとも、それは越前が乱心のしょいとあって、その書き置きは焼き捨てられてしまう」大「なるほど」

伊「越前が死んでくれればわれわれの望みは成就するが、なかなか越前は腹は切るまい」大「それでは先生、忍びの者でも遣わして越前を亡き者にいたしたら」

伊「ばかなことを申せ、さようなことをすれば、かえって越前のために捕えられ、自ら望んでことを仕損ずるようなものだ。まずこの伊賀亮が越前ならば、病気届けをして、病気引きこもり

のうちにことをするが、越前はいま問答に負けて気がいらだっているところだから病気というところへは気がつくまい」

といっているところへ、

○「申しあげます」大「なんじゃ」

○「大岡越前守公用人白石治右衛門という者がまいりまして、お上還御の後、急に病気につき、全快しだいご親子ご対顔の儀取りはからいまするにより、御前体よろしくご披露を願いますとのことでございます」

これをきくと赤川、藤井が、

大「先生、越前が病気届け」伊「うーむ、えらいやつは越前、決して各々油断はならぬぞ」

大「へえ、どうなりましょう」

伊「先ず越前自身がいくか、それとも公用人がいくか、必ず紀州へ調べにいくであろう。往きが四日、帰りが四日、往復八日、先方の調べが四日と見つもって前後十二日かかるが、二挺駕籠がいけば越前の家来がいくのだし、一挺なれば越前自身がいくのだ、いまにこの前を乗り物がとおるに違いない、見ていなさい」大「さようでございましょうか」

一段高い八つ山から御殿の窓を開いて、今か今かとまっている、ところへエッサ、エッサと二挺の乗り物が、品川さして宙を飛んでいく。

伊「それみなさい、駕籠がいくだろうな」

大「先生、二挺でございますな」

伊「うむ、心ききたる家来二人を遣わしたとみえる」

といったが、伊賀亮という人物もなかなか大したものでございます。

二挺の早駕籠紀州へ飛ぶ

こちらは大岡越前守殿、病気の届けをしておいて、すぐに紀州家お屋形へきて、加納大隅という人にあった、この加納大隅というのは、八代将軍が源六郎とおっしゃって、加納将監の屋敷においでになった時分に、沢野という女中にお手がついたのですから、この加納方で尋ねたら、沢野の様子も知れようと思召した。ところが将監は病死して、今はせがれの大隅という人の代、年二十八歳、天一坊の生まれたのは二十二年前のことですから、大隅にはなにもわかりません。幸い大隅には母、加納将監の妻が生き残っておりましたので、この老母に越前守殿おあいになって、お尋ねになると、そのころ女中を武家へ入れていたのは四方田屋三蔵という口入れ宿。また和歌山の在雑賀村の山岡伊勢という神官の娘で菊の井という、今は六十余歳で老婆であるが、この菊の井が、そのころ加納家に勤めていた女中であるからこの二人を調べたら、その当時の事情も分かるだろうということがわかりました。

喜んで越前守、紀州お屋形を退出したが、いくら名奉行でも、江戸の町奉行が紀州の町奉行の管轄内へ手を入れることはできない。そこで再び小石川水戸のお屋形へ参上、中納言綱条卿にお目どおりをして、これこれとお話を申しあげると、

中「もっとものことである、当家よりよしなに取りはからい遣わすであろう」
とおっしゃって、すぐに水戸家から紀州へ早打ちをさしいだし、何時大岡の手からいって調べてもいいようにお取りはからいになりましたから、もう大丈夫。越前守殿お屋敷へお帰りになると白石、池田、吉田の三人をよんで、
越「さてかようかよう、これより紀州へまいって巨細に取り調べんければならぬ。ついては白石、吉田その方両人に紀州調べ申しつける。大助、その方は役にたたぬによって、江戸へ残すという次第ではない。三人ともまいっては、越前心細く存ずるによって、その方は残ってあらかじめ相談相手になってくれるよう」
大「はっ、かしこまりましてございます」
越「そこで両人は紀州までの道中、金銭は惜しまず使うよう、金の勢いでなければ、道中は早くまいらぬから。また町人を調べるには町人となり、百姓を調べるときは百姓にならなければならぬ、必ず上のご威光をもってことをいたしてはあいならぬぞ。幸い調べが届いたらそうそう立ち帰って喜ばしてくれるよう。もし調べ届かざるときには竹挟みの書状をもって注進いたしくれるよう。来年三月までお日延べを願い、こと成らざるときは越前切腹をいたす心得である。しかしこの後いかがあいなるともその方ども両人の妻子は扶持いたし遣わすから、決して心配をいたすな」
両人「かしこまりましてございます」
白石、吉田の二人は自分の小屋へ帰ったが、越前守ばかりではない、この二人も決死の覚悟、妻子と水盃をして白石治右衛門、吉田三五郎の両人、十分の支度に及んで、大岡の屋敷を立ちいでましたが、もちろん早駕籠でございます。早駕籠とみれば、道中の雲助などが、その駕籠につかまる、それらの者にばらりばらりと惜し気もなく銭を投げてやるから、駕籠は疾風のように飛んでいく。

幸い道中川止めもなく、三日目の七つ半ごろに紀州和歌山へつきました。今日ならば東京から新幹線を使えば和歌山まで五時間そこそこで到着しますが、享保の昔のこと、三日目に着いたのは早い方。山内伊賀亮は往きが四日と考えたのが一日早くついた。かねて水戸家からお頼みがありましたから、町奉行都築重兵衛という者ご本陣へ出張、江戸より乗り物が二挺くるか三挺くるかわからないから、角々のところに奉行所から役人が出張って待っている。
そのうちにエーサッ、エーサッとかけ声勇ましく乗りこんでくる。それっと役人が付き添って本陣へつくと、医者がいて薬の用意をしている。駕籠の戸を開けてみると、三日のあいだ昼夜、もみにもまれてきたのですから、いくぶん吐血いたしたものとみえて、衣類などは血に染んでおります。両人玄関の敷台のところへきて、ここが紀州和歌山だということがわかると、今まで張っていた気が一時にゆるんで、ウームというとそれへ倒れた。「それっ」というので、薬を服ませて手当、まもなく気がついた。
しかし、疲れているから今夜は一杯飲んでゆっくり寝て、明日の朝調べようなどという悠長なことはいたしませぬ。町奉行都築重兵衛との挨拶が終わって、
治「さっそくでござるが、奉公人請宿四方田屋三蔵と申す者をお呼び寄せ下さるよう願います」
重「委細承知いたしました」
と直ぐに四方田屋三蔵のところへご沙汰がある、三蔵おどろいて、さては奉公人のことについ

て、江戸の大岡さまにひきあいのつくようでは大変だ、ことによったら身代の潰れるようなことになりはしないかと恐る恐るまかりいでまするとと、正面には、都築重兵衛控えている。

重「三蔵まいりましてございます」治「さようでござるか……四方田屋三蔵はその方か、もそっと前へ進め」三「はい」治「別に心配の儀ではない、奉公人のことについて少々尋ねたいことがある。二十二三年前に加納将監殿へご奉公をした、沢野という者を存じておるか」

三「私は当年四十二歳でございますが、二十二三年前のことはわかりませぬ、そのわけは私は八年前まで大阪心斎橋の薬店に奉公いたしておりましたところが、両親が病死いたしましたについて、立ちもどり家督相続いたしました、よって八年以前のことは一向わかりませぬ」

治「さようか、江戸表の奉公人と違って請宿があるから、請け人はだれ、親はなんということも帳面につけ止めてあろう」三「それは委しく止めてございます」

治「しからば二十二三年前の帳面を一覧いたしたい」三「まことにお気の毒さまでございますが、その帳面というものは一冊もございませぬ。先年隣家から火事がはじまって私方も類焼いたし、家財道具もすっかり焼きまして、帳面も一冊もございませぬ。それはそのみぎりお町奉行へおとどけはいたしておきました。それからまもなく両親は病死いたしましたから、てまえが相続後の帳面なればございますが、その前の帳面は一冊もございませぬ」

取り調べは難航また難航

江戸表から何十里というところを乗りこんできたのも、たった一つの帳面を頼みにしてきたのだ、それがないときいて二人ともがっかりしたが、焼失いたしたものはしかたがない。

治「それについて聞きたいが、この在に雑賀村というところがあるか」三「はいございます」

治「山岡伊勢という神主があるか」三「はい鰍沢の神主でございます」治「その神主の娘に菊という者があって、加納将監殿へ奉公をいたしたというのを承知か」

三「さようで、菊の井さんとおっしゃいまして、けさほども私のところへたちよりました」

さては達者であったかと両人は喜んで、

治「何歳ぐらいであるな」三「さよう、六十二歳かになりますが、いまだに達者でございます」

治「それはなにより……寺社方お役人へ願います、その菊の井と申す者をお呼び下さるよう」

内「委細承知いたしました」

と、寺社奉行の田中内匠という人、奉行所の提灯をつけさせ、下役の者に仲間一人を付けて遣わしました。ちょうどご亭主さんの神官はご神前で太鼓をたたいてお勤めをしている、お内儀さんは台所で夕飯の支度をしているところへ、

役「お頼み申すお頼み申す」菊「はいはい」

お婆さん開けてみるとびっくりした。御用提灯、バタバタと奥へかけてきて、
菊「もしあなた、大変なことができました」
夫というのは二代目山岡伊勢という人。
山「なんだ」菊「御用提灯をつけた役人がきて、頼む頼むと申します」
山「阿呆、紀州の御領分にいれば御用提灯は珍しくない、寺社奉行の提灯でなければいい」
菊「いえ、それがお寺社の御用提灯でございます」山「なにっ、寺社奉行から」
聞いて驚いた神官自身にそれへでてきて、
山「なに御用でございますか」
役「われわれは寺社奉行田中内匠組下の者であるが、江戸表大岡越前守殿家来白石、吉田の両人が、お菊殿へ少々尋ねることがあると申すによって、さっそく本陣へ出張ってもらいたい」
伊勢はおどろいた。
山「それでは私へ用ではなく、菊へ御用でございますか」役「さよう」
山「さあ菊ここへこい、どうもおまえはおしゃべりだからなにか下らぬことをしゃべったに相違ない、なにを悪事を働いた、なにをしゃべった。江戸のお町奉行から調べにくるようでは容易ならぬことだ。町人百姓とは違って神職にある者だによって家内の不調法を知らぬといっては済まない、なにを不調法を働いた」
菊「わたしは不調法を働いた覚えはちっともございませんけれども、大岡さまは恐ろしい怖い人だといいますから、わたしは病気といっていきませぬ」
役人これを聞いていて、

役「これこれさようなことは成らぬぞ、江戸役人のおっしゃるには、病気なれば乗り物でまいっても苦しゅうないといわれた、さあ——すぐにいきなさい」山「さあ、どういうことだか、ここで私にいってしまえ」
役「これこれそこでなにもかれこれいっている場合ではない、さっそくまいれ」
山「はい、ただ今ご同道いたしますが、その前に私が一応下調べをいたしまして」役「下調べなどはいたさないでもよい、あちらで調べるから」
菊「わたしは今年六十二歳でございます、長生きすれば恥多しとはこのことでございましょう」ぶるぶる震えているのはもっとも千万、江戸町奉行大岡越前守といえば長年勤役をしておりますから、紀州にもよくその名が響いております。ことに以前伊勢の山田奉行をいたしておった人ですから、この辺でも知らぬ者はないくらい。伊勢は神職でございますから、
山「少しお待ち下さい」
といって、何だか大きな風呂敷包みを背負って夫婦して本陣へまいりました。治右衛門、三五郎、寺社奉行、町奉行など真鍮の燭台に蠟燭を点じて待っているところへ、烏帽子を被り裝束をきて神主のいでたちの山岡伊勢、お内儀さんは着物の上に白木綿の上っ張りをきてぴかぴかする袴に陣羽織のような物をきて、巫女のような姿でならんできた。こんなに支度をしてこなくってもいいにと思ったが、治右衛門は夫婦に向かい、
治「拙者は大岡越前守の家来白石治右衛門、これは吉田三五郎と申す者、貴下が山岡伊勢とおっしゃるか」山「さようでございます」治「そこもとはお菊殿といわれるか」菊「斎女でございます」

治「お菊殿とはおっしゃらぬか」菊「斎女と申します」治「それはどういうわけじゃ」菊「屋敷におりましたときは菊の井、家におるときには菊、巫女の姿でまいりますれば斎女でございます」

余計なことをいっていると思ったが、

治「さてお菊殿、二十二三年前に加納将監殿方へご奉公をなすったでござろう、その儀について少々お聞き申したいことがあって江戸表からわざわざまいった」菊「ちっともわたしは存じませぬ、十年たてばひと昔」

三「二十二三年もたったことゆえ、忘れるのはもっともだが、よく考えてみるように」治「加納将監さまへご奉公をしたことがあるか」

なにを聞いても存じませぬ存じませぬという、これはご亭主がいいつけてよこしたので女のことだからなにを聞かれても、存じませぬ存じませぬといっておればそれですむ、なまじっか知っているなどといえば、引きあいがついて大変だといわれたから、ただ知らない知らないといっている。そこで白石吉田が考えて、

治「なにかここはただ恐れているようであるから、こっちの一間へまいるよう」

と奥へつれてきて、茶菓子をだし、当人に安心をさしておいて、聞こうと思うから、

治「さあお茶をのむように」

菊「ありがとうございます、お茶はのみませぬ」治「いや敵の家へきても口をぬらすというから一つのむがよろしい」

ぶるぶる震えていて、みんなお茶をこぼしてしまいます。

治「さて当国は暖国であるから、さぞご老人もお暮らしよいでござろう」

菊「わたしはちっとも存じませぬ」

そんなことを知らんでは困る。まず当人に安心をするようにと、金子を十両取りだして紙の上にのせ、

治「さて菊殿、このたびわれわれ両人が当国へ調べにまいったお話を大略いたそう。ただ今の上様は紀州の加納将監方にいらしって、源六郎とおっしゃった。その時分に沢野という女中がたいそうよくお世話をいたしたについて、今度将軍家にお成り遊ばし、予は若年の時分に沢野の世話になったからどうか礼をしたい、男なれば江戸表へ呼んで取りたて申してやりたいが、女のことゆえ仕方がない、金子を十両遣わすからどうか届けてくれと紀州家へお頼みになった。

紀州家で段々調べたところが、どうも知れない、ついて越前守へおおせつけられて、その方は永く町方奉行をして下方の調べは詳しいから、どうぞ沢野という者を尋ねだして、この十両をやってもらいたいとお頼みになった、よってまえども両人を当地へ遣わして、その沢野という者のなりゆきを調べることにあいなったのである。

ついては越前守加納将監方へ参って母御に面会をして、これこれだが何かお心当たりはあるまいかとお尋ね申したところ、親の名前も身元引受人の名前もわからぬが、沢野の勤めていたころに菊の井という者があって、神主伊勢の娘で、当時は二代目山岡伊勢という者の妻になっている、この者が知っているということであったについて、お尋ね申すのだ。

どうかこの十両の金子はお納め下さい、てまえどもは沢野殿のありかが知れれば、沢野殿へも十両差し上げ、死んでしまったといえば親類へ下さる、親もなければ寺へ納めて祠堂金とするつもり、もし貴女のお考えつきから、その沢野殿の身の上がわかればその恩賞として、あなたのご

亭主伊勢殿が御朱印を頂戴することもできる、どうか一つお考えを願いたい、早い話が同じ御三家でも、当紀州からお乗りこみになった上様であるから、ご当家のご威光というものは広大なものだ、なかなか江戸の町奉行が当地のものを縛ってつれていくなどということはできない、江戸の町奉行は江戸だけのこと。

ただ沢野殿へ金子を遣わすだけの使いにまいったのであるから、どうか安心して考えてくれるよう、決してあなたの身の上に引きあいのかかるようなことはない、まだ三日ほどは滞在するつもりゆえ、その間にゆっくりとお考え下さい」

菊「ああそうでございますか、それではこの十両を頂戴いたします。そうくだいてお話をして下さいますれば、わたしも心配のところはございませぬ、そういうこととわきまえませんで大きに失礼をいたしました、それではそくそく考えだしましょう」

変な考え方があるもので、しばらく考えておりました菊の井が、

菊「知れました」

治右衛門、三五郎喜んで、

両「さようか」菊「ええ、その沢野という女中は呉服の間の女中でございまして、色の浅黒い丈の低い、疱瘡の痕があってまことに醜い女、しかし気だてのいい、源六郎さまのお気にいりでございました」治「そのころいくつぐらいであったか」

菊「さよう十八か九でございました」三「家はいずれにあるな」菊「ところをわたしは存じませぬ、また親の名も知りませぬ」治「それは大きに困った」

菊「いやわたしは存じませぬが、その沢野さんのところへたびたび使いにまいりました仲間の治助という者がまだ達者でございます」

治「その仲間治助を呼んで、聞いていただきたい」三「それはいまいずれにおるかな」

菊「その人は松川筋というところに権四郎という材木問屋がございまして、そこにおります、わたしが奉公をしているころに、加納さまのお屋敷に仲間奉公をしておりました」

そこでその松川筋の権四郎方へ沙汰をするともう夜分の四つごろゆえ肝をつぶして治助がそれへきたが、これもぶるぶる震えております。

菊「お役人の前だと当人がおどろいて、口がきかれませぬから、わたしがあなた方の名代になって聞いてみましょう、どうぞわたしに任して下さいまし」

三「なにぶんよろしく願う」

治助はそれへ両手をついて、

治助「私は悪いことした覚えはございませぬから、どうかお慈悲を願います」菊「治助さん、べつに心配のことではないから顔を上げなさいよ」

治助「どうぞごめん下さいまし」菊「顔を上げなさいよ」治助「どうぞごめん下さいまし、大岡さまはこわい方だと聞いております、どうぞ首を斬るならば江戸でなく、こっちで斬るように願います、島へやるなれば島へやって下さいまし」

紀州さまの領分に又島というところがあって、悪いことをすればそれへ流す、治助がふと顔を上げてみると、側に懇意にした菊の井が座っている。

治助「やあ、これは菊の井さんでございますか、なんで私を呼び出しなすった」

菊「治助さん、ほかではないが少し調べる筋がある、江戸のお方のご名代にわたしがお役人だ、

隠し立てをするためにならぬぞ」治助「脅かしてはいけない……。なんだね菊の井さん」

菊「わたしが加納さまのお屋敷に奉公をしていた時分に、お前も加納さんに奉公をしていたろう」治助「さようで」菊「使いに方々へいかしったろう」

治助「それは仲間のことだから、使いにもいくし、水も汲む、殿様のお供もした」菊「その使い先のことについて調べなさるんだよ」

考えていた治助が、

治助「使い先のことといえば私は覚えがある」

菊「なんだえ、聞かないうちに覚えがあるとは」

治助「それは八百文買い物を頼まれた時に、七百五十文買って五十文懐へ押しこんでしまったことがある、それは私のほまちというものだ」

菊「なにも棒先をきったことなどをお調べになるんではないよ。加納さまのお屋敷に奉公をしているころに、呉服の間の沢野という人があったろう」

治助「そうそう、色の浅黒い丈の低い、痘痕のある女で、たしか二十二三年もまえのことだ」と聞いて、治右衛門、三五郎は襖の陰へ菊の井を呼んで、

三「さてここに十両ござるから、これを当人に遣わして下さい、当座の褒美として十両金、すっかりことがわかれば後金を遣わす、いまお前に話したとおり、どうか当人の安心するように話をしてもらいたい」

そこで菊の井が十両の小粒を紙にのせて、

菊「さあ治助さん、おまえに江戸のお役人さまからお金を下さった、わたしも小判で十両もらった」

治助「へえ、……して菊の井さん、十両といえばたいそうなことだが、何で私にこんなお金を下さるのかね」

菊「じつはこういうわけで、考えてもらえば沢野さんのしあわせになり、わたしもおまえもしあわせになるし、お役人も手がらになるから、どうか考えてもらいたい、お前さんも沢野さんのところへよく使いにいったことがあるからわかるだろう」

治助「それはわからないことはないが、考えだしたら後金をいくら下さる」

菊「それはまだわからないが、損にはならないから考えだしておくれ」治助「そうかい、後金がでるなら考えだそう」

と、こいつも変な考え方をするやつです。ちょっと考えていましたが、

治助「ああ考えだした」菊「考えだしたかえ、……お役人さま、考えだしたそうでございます」

白石治右衛門、吉田三五郎それへでてきて、

三「よく考えだしてくれた、してその沢野のありかがわかったか」

治助「はい、思いだしましてございます、なんでもその沢野さんには、おっかさんが一人あって、お酒のすきな婆さんで、おさんという名でございました」三「さようか……、何という村におった」

治助「さあ、それがはっきりしねえでございますが、なんでも平の字のつく村でございます」

坊主の口から初光をつかむ

それから郡奉行と相談をして調べると、

三「平田村、平田村。平吉村、平沢村……」

治助「あっ平沢村でございます、名主さまは松右衛門さんといいまして、沢野さんがその平沢村のおさん婆さんのところへ、加納さまのお屋敷から下がるときには脹満のように腹が大きくなっておりましたが、まったくは子供ができたので、それもだれの子供だかわかりませぬ、後で聞いたら男の子を生んだということでございます」

ようやく口が開いてきた、治右衛門、三五郎喜んで、そこですぐに、平沢村の名主松右衛門のところへご沙汰。おどろいてきてみると、役人がずらりとならんでいる。町奉行が、

役「これへまかり出でました者、平沢村名主松右衛門にございます」

治「ああさようでござるか、……松右衛門と申すか、拙者は江戸表町奉行大岡越前守手付き、この度当地へ出張をいたしたるは徳川天一坊殿御身の上について相尋ねることあってまかり越しを去る二十二三年前に呉服の間へご奉公を勤め、当時源六郎さまと申しあげた若君のお情けをこうむり、懐妊の後ご平産云々のことを申し立てておるが、そのさんと申す者の出生は、やはりこ

の平沢村の者であるか、あきらかに答えてくれまするよう」

松「さようでございます、それは平沢村の者ではございませぬ、もうさようさ、私は今年六十四でございますが、たしか三十三四のときとおぼえております、平野村というのが、平沢村の隣にございます」治「うむ」

松「その平野村というのへまいりました夫婦者で、小さい女の子をつれておりました、ところがその亭主が卒中で死にましたので、その内儀さんのおさんというのが、その女の子を抱えたまま平野村に住むことになりました、その後子細あって私のほうの平沢村にまいったのでございます」治「うむ……」

松「その娘のさわというのが年ごろになりまして、紀州さまのご家来加納将監さまのところへご奉公、呉服の間へ勤めて、その時分から沢野と名を改めたそうで、それからしばらくしてその沢野というのが、加納さまから下がってまいりましたが、どうやら身重になっていたようす、月が満ちて、生まれましたのが男の子、たいせつのお方のお胤だといって、おさん婆さんはだいじにしておりましたが、お七夜にならないうちになくなってしまいました、子供が死んだと聞くと、沢野も血が上がって、まもなくこれも死んでしまいました」

治「ふふーむ、さてはご平産にあいなると沢野も産死いたし、またお待ち申しあげたお方はご早世にあいなったか」

松「へえ、なんだか知りませんが、なくなりました」治「うむ、女子ではなかったろうか」松「女の子ではございませぬ、男でございます、奇態なものでございまして、女でなければたいてい男で……」

治「控えい、して、さんはいかがいたした」

松「それがもとでおさん婆さんは気が狂って、娘はどこへいった、孫はどうしたといって、狂い歩いておりますので、もとは平野村からきたものでございますから、平野村の名主の新右衛門さんのところへ帰しました。新右衛門さんが親切者で、座敷牢同様のところへいれておきましたが、酒の好きな婆さんでございまして、かわいそうに雪の降る日に、炉の中へのめり込んで焼け死んでしまいました」

治「うむ、よく申し立てた、してそのお生まれになったお方はどこへ葬ったか存じておるか」

松「はい、この村うちで、光照寺さまといって、門徒宗の寺でございます」

そこですぐに寺社奉行の手から光照寺の住持をよびだす。

治「初めてお目にかかるが、拙者は江戸町奉行大岡越前守家来白石治右衛門、吉田三五郎と申す。住持のお名前はなんと申されるや」周「私は周山と申します」治「お年は」周「六十二歳でございます」

治「ただ今これにいたる松右衛門の話に

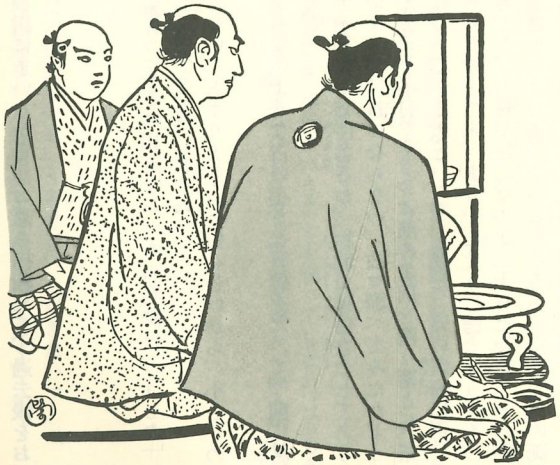
はこうこう、まったく貴僧が沢野ならびにその腹にできたお子さまを葬ったに相違ござらぬか」

周「いかにも相違ございませぬ」治「松右衛門のいうには、別に身寄り親類もないようだが、無縁にあいなっておるか」

周「はい、当時は別に付け届けをする者もございませぬ」治「してみれば無縁にあいなっているな」

といわれたときに周山、如才ない坊主だから考えた、お子さまというからには当上様が源六郎といって、紀州においでのときにお側の女にお手がついたものに違いない。無縁になったといえば、銭にならないと思いましたから、

周「決して無縁にはいたしませぬ、ご身分高きお方のお子さまと心得ましたから、日拝月拝をいたしご回向を申しあげております。南無阿彌陀仏……」



坊主うまいことをいっている。

治「それは奇特のことである、これより両人参詣にまいるから、お墓を掃除して、過去帳をお調べおき下さい」

周「委細承知いたしました」

といって、周山は寺へ帰ってきて、

周「これこれ珍念や、こうこうだ、さっそく墓参りにくるに相違ない、あの石碑はどうした」

珍「この前、崖の崩れたとき石垣につんでしまったからございませぬ」

周「それは困ったな、石碑がなければ銭にならない、あまり大きいと白々しいから、小さいのをたてておいてくれ」

それから、苔がついていてもう字もなにもわからないような古い小さな石碑をたって、前に蓆を敷き、すっかり支度をしてまっている。

住持は段々過去帳を調べてみると、正徳三年十一月二十日俗名さわ、釈能貞操信女としてあります。ところが子供の戒名がない、子供の戒名がなくては銭にならない、段々調べてみたがどうしてもない、多分見おとしだろう、一つこしらえようと小刀でそーっと前の名前を削り落とし、茶碗をもってきてぎゅうぎゅう上をこすって、上についている釈という字を残し、いい塩梅に汚して、なんでも値うちのありそうな戒名をと、いろいろ考えた末、ありがたそうに徳という字をつけ、玄徳童子、正徳三年十一月としたが、また考えた、沢野が死んだのが二十日だから、その前に死んだのだから十一月十八日として、位牌へ古びをつけてまっているところへ、白石吉田の両人がまいりましたから、周山出迎えをいたし、墓地へ案内をする。二人がみると、墓石の文字は

はっきりわからないが、掃除が届いて薄べりがしいてあるから、それへ平身低頭。

治「ご住持ご回向を願います」周「承知いたしました」

と周山回向をする。

周「過去帳を御覧にいれる」

といって座敷へ案内をして、取りだした過去帳を拝見すると、一つは釈能貞操信女、正徳三年十一月二十日、また一つは玄徳童子、正徳三年十一月十八日としてあります。

三「だれがこの戒名はお好みになりました」

周「別にお好み遊ばした方はございませぬが、野僧が心得をもってかくいたしました」

と聞いて治右衛門、三五郎もおどろいた、将軍家のご落胤ということを知ってしたわけでもあるまいが、かような立派な戒名をつけるというはじつにえらいものだと思いながら、両人手をついてお辞儀をする。

ようやく正体の目星つく

両「さて貴僧にお頼み申すが、当寺内に葬ったに相違ないという書付をいただきたい」

周「委細承知いたしました、もとより葬ったに相違ないから何本でも差しあげます」

そこで当寺内へ葬ったという趣をしたためて差しだしました。

さてこうなってみると、お子様は死んだに相違ない、沢野もそれがために病死をしたということがわかった。さては江戸表八つ山にいる天一坊は偽者ときまった、直ぐに両人立ち帰って召し捕っても大事ないが、昨夜七つ半時分に当地に着し、今日正午にならぬうちにわかったのだから、ついでに天一坊の身元を洗ってくれようと考えた。

天一坊は、なんでもこの近辺からでたやつに相違ない、沢野の死んだ以上はおさんという老母の手元に、短刀とお墨付きがあったに相違ない、それを今の天一坊がもらったか、また金をだして買ったか、おさんをだましてとったか、あるいは殺して盗んだか、一つ調べていこうと、それから平野村の新右衛門という名主の方へまいって、

治「さて新右衛門、ほかではないが、沢野という者の母、さんという者がおって、相はてた趣であるが、病死いたしたか、変死いたしたか、また何年前のことか承知いたしたい」

新「さようで、当村にきておりまして、一二年のあいだ洗濯をしたり使いをしたりしておりましたが、大酒呑みだによっておおかた酔ったものとみえ、炉の中へ落ちてやけどいたしたのがもとなって相はてました」治「うーむ、あとはだれが取りかたづけた」

新「それは私の隠居所へおきましたから私が有り合わせの物を売って葬式の金をこしらえて、寺へ葬ってやりました」治「その売り払った道具のうちに脇差が一本、証文のようなものが一通ありはせぬか」

新「そのようなものは一向見当たりませぬ」

三「そうか、してその患っているうち、だれか側に看病をしていたか」新「別に看病をした者はございませぬ」

三「しからばだれが一番先にそのさんの病死をしたというのを見つけた」新「それは私のせがれでございます、新吉と申しまする者、いつも早起きの婆さんが寝ているし、別に締まりはなし、戸を開けて中へはいってみると、死んでいる騒ぎでございます、それから近辺の者がでてきて、いろいろ私に手伝ってくれて、あとの始末をいたしました」

治「その新吉というせがれに少々聞きたいことがあるが、これへ呼んでもらいたい」

新「それは死んでおりますか、生きておりますか、一向わかりませぬ」三「いかがいたした」

新「十三歳の時に家出をいたしましたまま今に行方がわかりません」

三「さようか、ただ今なれば幾歳だ」新「二十二歳になります」

三「親の目からみたら利口のものと思ったか、また阿呆のものと思ったか」新「ええ私の口から申しまするもいかがでございまするが、いたって利発の子で……」

治右衛門、三五郎はこの新吉が天一坊ではないかと思った。

治「その面体、かたちはどういう風であったか」

新「さよう色の浅黒い丈は小兵で、三つのときに疱瘡をいたして、左の目が一眼潰れております」

それでは違う、天一坊はいい男だ。

三「当村にその新吉と同じ年ぐらいで、色の白い皮膚こまやかのむっくりとした顔の男はなかったか」

新「左のほうの小指が半ばちぎれている子がありまして、それは感応院という修験者の弟子で、源氏坊戒行という、いたって利口の子でございました、小さいときに山へ自然薯を掘りにいって、

自分で左の小指を切りまして、泣いて戻ってきたことがございます」

三「うむ、口をきくときに、舌のまわらないようなところはないか」

新「さようで、舌の短い者はありますが、戒行さんのは、ちっと長い方で、口をきくときに舌の先がからまるような工合でございました」

さてはこれが天一坊に相違ないと思うから、

三「その戒行というものは当時どこにおるか」新「さようでございます。もうとっくに死んでしまいました」

治「はて死んだわけはないが、病死いたしたかそれとも変死か」

新「ええ十二の時でございましたか、おさん婆さんが死にましたその翌年故、十三歳の暮れでございます、師匠の感応院が十二月の煤払いのときに頓死いたしまして、翌年十四になった時に師匠さんのあとを相続しなさいと、村内の者が勧めましたところ、野に臥したり、山に伏したりするが修行なれば、師匠さんの歩いていったところを修行をするといって村をいでましたが、不憫や加太の浦というところにいって、人に殺されてしまいました」

治「うむ、その死骸はだれが引きとって葬ったか」新「その死骸はございませぬ」三「死体のないものを殺されて死んだというはどういうわけか」新「さようで、戒行さんのきていた衣類、頭巾、鈴掛け、笠、行衣など血だらけになって海からうち上げられておりました」

三「衣類があって死体がないというはどういうわけか」新「その死骸は鮫が食ってしまったということでございます」

治「衣類を残して鮫が食うものか」新「さようでございます、どうもそのへんのところは鮫に聞いてみなければわかりませぬ」

この時に、同道いたした郡奉行の日下部内匠という人がそれへでて、

内「そのとき私の兄が奉行をいたしておりまして、現場へ立ちあいましたが、なにぶん合点がいりませぬ故、衣類、頭巾、鈴掛け等の類は不浄蔵へ保存いたしおきましてございます。ご入用なればお目にかけましょう」

治「それはなにより、どうか拝見いたしたい」

これから直ぐ早馬で引きかえして品々を持参して、治右衛門、三五郎の前へだした。見ると、ついている血がおかしい、人間の血は年数を経ると黒くなる、それが犬の血をつけたのだから黄色になっている、そのくらいのことがわからぬようでは越前守が選んで紀州へお遣わしにはならない、衣類の前を合わせてみると下前がきれていて上前がなんともない、そのほか帯の下になっているところが切れたりなどしている。これは自分がかってに切って捨てたものだから、いかに悪才にたけた天一坊でもそこまでは気がつかなかった。

三「この品々を江戸表へお貰い申したいものでござるが、いかがでござろうか」

内「よろしゅうございます、お役にたちますれば結構でござる。ご用済みになったればお取り捨てになっても大事ございませぬ」

治「それでは頂戴いたす。そこで感応院の病死いたしたときに立ちあった医者はなんと申されますか」内「島田宗庵と申します」治「達者なれば呼んでいただきたい」内「かしこまりました」

それから右の宗庵を呼んでまいりまして、感応院のことを尋ねると、

宗「ええ毒にあたって死んだものでございます。そのときに私が中毒だといえば、迷惑をする

者が沢山あろうと心得ましたから、病死といってすませました。もっともそのころの郡奉行、町奉行、寺社奉行の三奉行へは私からそのことは申し上げておきました、決して私には不調法はございません」

治「松右衛門という者が平沢村で申したのには、さんというのは、焼け死んだと申すが、当村へ参って調べてみると、やけどがもとになって死んだという、いずれが真実でござろうか」

宗「それは焼け死にいたしましたに相違ありませぬ、しかし検視をいたしませぬからお叱りがあるかもしれませぬが、どうか寛大のお取りはからいを願います」治「よろしい」

そこで感応院は毒にあたって死んだに違いないという宗庵の書きつけを取りましたが、だんだん考えると、お墨付きや短刀が欲しいばかりに、源氏坊戒行がおさんを殺して、それから感応院を殺し、自分も人に斬られた体に取りつくろって出奔をした、大悪人であるという見極めが二人についた。そこで、

三「新右衛門、村内に源氏坊を見知っておる者があるか」

新「それは感応院の飯炊きをしておりました伝助という者がよく存じております。その戒行という者は中国浪人菊地なにがしという者があって、せがれをつれて感応院のところへまいり、厄介になっているうちに、その者は病死いたし戒行一人になったのを、感応院が不憫だといって飯炊きにいいつけ、方々を貰い乳をして歩いて育てた源氏坊で、それゆえ伝助がよく存じております」

三「して、戒行の身寄り親類は当村におらぬか」新「なんにもございませぬ」

それから伝助という者を呼びだして、

治「ときに新右衛門、伝助に頼みがある、江戸表八つ山というところに、天一坊という者がおるが、その天一坊が、源氏坊であるかどうか見わけてもらいたい、よって両人江戸表までいってもらいたい」

二人はおどろいた。

二人「どうかごめんなすって下さいまし、江戸の大岡越前守というお方はこわいお方だそうで、ここでありていに申しあげますゆえ、江戸表へまいることはどうかごめんをこうむります」

治「いや決して引き合いにつれていくわけではない、ただその顔を見わけてくれればよいのだ。用がすんでしまえば江戸見物をさして、国へ帰るときには土産物を沢山もたして送り届けてやる、少しも迷惑にはなるものではないからいってもらいたい」

二人「それでは家内親類と水盃をしてお供をすることにいたします」

大変なさわぎ。調べが届いたので吉田白石の両人は、勢いづいて本陣へ帰ってまいり、一同に礼を述べて、いよいよ紀州を出立することにあいなりました。

四つの駕籠は和歌山を立ちいでましたが、白石、吉田の二人は馴れているからさほどでもないでしょうが、新右衛門と伝助はおどろいた。

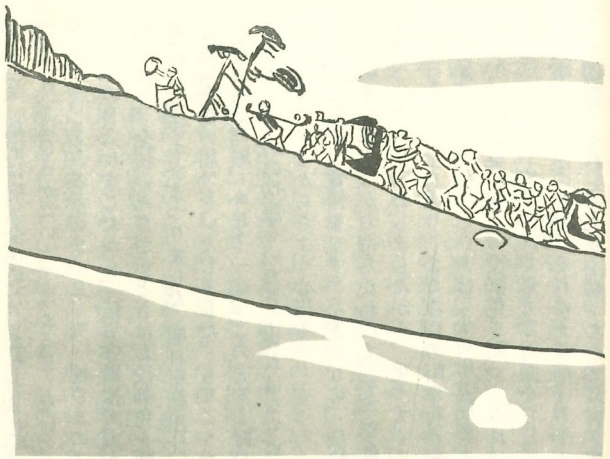
伝「やあたまらねえ、どうか代わってくれ代わってくれ」○「いま人足が代わったばかりだ」

伝「いや人足じゃねえ、わしたちが代わりてえのだ、これなら下りて駕籠を担いだほうがよっぽど楽だ、助けてくれーっ」

悲鳴を上げるというさわぎ。いくら悲鳴を上げても途中で下ろすわけにはまいりませぬ。宙を飛ぶようにして、江戸表をさしてまいります。

越前守切腹を覚悟す

しかるに八代の上様、ご名君に相違ないがご親子の情は格別、沢野の腹にできた天一坊二十三歳になって尋ねてきた、やれうれしや対面ができると思召していると、越前守が人を殺した相がある。身分に及ばざることを企てるの相があると申してみれば、たやすくあうわけにもいかず、取り調べの儀をお申し付けになったところ、越前が問答に負けたということ。さてはまったく沢野の生みし子であるかと、お心の中にいささか楽しく思召していらっしゃると、越前守が病気の届け。このごろではそれがお心にかかり、なんとなく鬱々としておいでなさるので、はたの者も心配をいたし、お鷹野はいかがでございます、おかるた合わせはいかがでござ



います、能狂言のお催しはいかがでございますと申し上げても、ただ捨て置け捨て置けとおっしゃってお採りあげにならない。一人気転のきいている人が、これは天一坊さまのことに違いないと思うから、

△「品川の東海寺へお成りはいかがでございます。お成りがけに八つ山の御殿へお立ち寄りになって、ご親子ご対顔としてはできませぬことながら、お庭をおとおり抜けになって、お縁側ででもちょっとお会い遊ばしたら天一坊さまもさぞお喜びのことと存じますが、いかがなものでございましょう」

と伺うと、お喜び遊ばした吉宗公、

吉「ああそうじゃな、それでは表向き対面はならんが、内々縁側ででも対面いたしてよいか」

△「よろしゅうございます」

吉「さようか」

とおっしゃって、しばらく考えておいで遊ばしたが、

吉「まて、越前は病気全快いたしたかどうじゃ」△「いまだ全快届けはございませぬ」
吉「それではひそかにいってはよろしくない。越前の登城いたすを待つによって捨て置け」
さあそうしてみると、まったく天一坊さまのことがもとでご病気ときまった。ご老中へ斯様斯様云々と申し入れましたから、伊豆守殿捨ておかれませぬ、越前守病気全快をしたらばさっそく登城いたせ、全快いたさざるときはお役御免を願えと申し入れました。ときに越前守、
越「病気全快つかまつりました、明日早朝出仕つかまつる、御前体よろしくご披露を願います」
と病気全快の届けをいたしました。もうこうなっては切腹するよりほかしかたがない。そこでご子息忠右衛門殿、今年十一歳、この方をお呼びになって、
越「天下のために切腹をいたさなければならぬによって、その方も覚悟いたせ。池田大助に介錯の役申しつけるからさよう心得ろ」
なんでご切腹の覚悟をなすったというに、全快なさば登城いたせとのおおせだが、登城できない。登城すれば上様がお待ちかねゆえ、天一事件はどうじゃ、さよう私は伊賀亮との問答に負け、紀州調べに家来を遣わしましたから、戻ってくるまでお待ち下さいというわけにはいかない。病気の届けをして上を偽り、また江戸の町奉行が紀州調べなどにいける道理はない。小石川お屋形のご承知を得ていったといえば、小石川お屋形と越前と申し合わせた上、上を偽ったかどになる。といってここで越前守がお役御免を願ってみれば、所司代ご城代ご老中がすでに決定いたしておるによって、天一坊をつれて来てご対面をさしてしまい、その後偽者であったとわかったときには一大事、将軍家の恥辱。それゆえ越前守も手をきるわけにはいかない。明日登城する刻限を待って切腹、それも一人腹を切ったのでは書き置きが何通あっても、乱心の沙汰といって、お取り上げにならない、掛けがえのない一人のせがれも共に腹をきらせ、大岡の家をなげうって嘆願つかまつるによって、紀州調べの戻るのをお待ち下さい、もし紀州調べが届かなければ、来年三月までご親子ご対顔のお日延べを願うといって親子がここで腹を切れば、わが子を殺してまで願うのだ、よくよく見こみをつけたところがあると思召し、お取り上げになるに相違ない。何事もみんな偽りの世の中に、死ぬるばかりは実なりけり、死ぬには偽りができない。とこう腹にきめた越前守、そのことを一同の家来に申し付けましたによって、家来もぜひに及びませぬ。一同ただ沈黙をいたして控えているばかり。そのうちにだんだん夜が更けてまいりまする。

越「さて、大助はじめとして一同、越前親子の者はここに切腹いたしても、決して殉死はならぬぞ、それを背く者は七生までの勘当じゃによってさよう心得ろ。三代の上様ご他界のとき堀田加賀守正盛が殉死いたし、日光に殉死の墓というを残してより以来、殉死ということはご法度になった、上のご法度のみならず、越前の申すことを背く者は勘当をいたす。また忠臣二君に仕えずなどと申すことはいうてくれるな。毎度町方で見うけるが、やぶれし笠をかぶり、やぶれし扇をもって謡をうたい、人の門辺にたって袖ごいをする。あれはもと大岡越前の家来であるが、あのような屋敷に奉公いたし、家断絶したために、あさましくも浪人をしていると、人に笑われるはすなわち越前の恥辱である。
越前の死後三日たたぬうちに他家さまへ奉公して、その主人に忠勤をつくしてくれるように。さすればもと越前の家来であったが、今ではたれ殿の家来になって、あのとおり立派になった、越前はよい家来をもってしあわせであったといわれれば冥土にあって、この越前の喜び。必ずや心得違いをいたしてくれるな。また治右衛門三五郎が紀州よりたち帰ってこのことを聞けば、多

くは殉死いたすと申すかもしれぬが、死する際に越前がよくよく申し置くによって、固くその方どもにおいて追い腹をとめるようにいたせ」

大「かしこまりました」

越前守殿、一々後々のことまではお申し付けになったものの、陪臣の身をもって、御三家の領分へ探索にまいった治右衛門、三五郎の心配はひととおりではあるまい、少しは紀州のようすがわかったであろうか、天一坊の身元が知れてくれれば……と口にはださねど心のうち、越前守じっとお考えのようす。池田大助進みいで、

大「申しあげます、白石治右衛門、吉田三五郎の両人は紀州調べにまいってご奉公つかまつりましたが、私は江戸表に残ってこれというご奉公もいたしませぬ、せめてはお三方をご介錯申しあげた上、私一人冥土のお供おおせつけ下さるよう願います」

越「ならぬ、死するばかりが忠義と心得るか。越前はやむを得ず天下のために腹を切る。その方は死ぬる場合でない。なんとなれば、治右衛門三五郎、立ち帰ったそのときには、長の間の旅につかれてすぐには役に相たつまい、そのとき紀州調べの一部始終両人に代わって、小石川お屋形へまかりいで、山辺主税殿について、前様へ言上いたすがその方の役目、決して冥土の供はならぬ。治右衛門、三五郎が和歌山より立ち帰るのを待つようにいたせ」

大「ははっ、かしこまり奉る」

越「さあ忠右衛門、もはやまもなく夜も明けよう、いま少々の間じゃによって我慢をしておれ」

紀州調べの使者帰る

そのうちに、ドーンドンドンドンご城内の明け六つの太鼓がきこえる。越前守殿耳をすましてこれを聞かれ、

越「これ大助、あれは明け六つの太鼓であるな」

大「申しあげます、あの太鼓は六つではございますが、今日は式日なるによってよほど刻限がお早うございます、いましばらくのあいだお待ち下さるよう」

越「いや公儀で六つなれば、明け六つに相違ない、一時片時生きながらえてなんといたそう、とめだてするな」

その一言に、座はシーンとして、水を打ったよう。越前守においては、どことなく青白い面ざし、眼を閉じて、何事か念じておいでの様子でありましたが、やおら前にあったる腹切り刀を右の手に取って、あわや腹に突き立てんとするときに、パタパタパタッとあわただしき足音。一人の家来かけ来り、

○「あいや、しばらくお待ち下さいませ。ただ今紀州より使者の両人立ち帰りましてございます……」

越「うむ、両人立ち帰ったか」

さすがの越前守殿、死装束のまま玄関へ足ばやにお立ちいでになると、いまご門内へ乗り物を乗りいれた白石治右衛門、吉田三五郎、鉢巻き腹巻きの姿のまま、駕籠より転ぶように立ちいで、玄関敷台へばったり両手をつき、

治「治右衛門、三五郎、ただ今立ち帰ってございます」

越「おおっ、両人ながら大儀であった、越前は無事であるぞ、気を確かにもて」両人「ははっ」

越「して、和歌山の調べは何といたした」治「届きましてございます」

越「おおっ、届いたか」

治「ははっ、詳しきことはこれにしたためてございます。……天一坊と申する者、じつは紀州和歌山在平野村感応院と申す修験者の弟子源氏坊戒行と申する者にございます。十二歳のとき、沢野殿の母親さんと申する者を殺し、お墨付き、短刀の二品を奪い、十三歳のとき十二月、師匠感応院を毒殺いたし、翌年十四歳で人に殺されし体に取りこしらえ、かの地を出立いたしたる大悪人、恐れ入りましたることながら、お腹沢野殿ならびにお子さまはとくにご逝去、その源氏坊の見知り人として新右衛門、伝助という両人を紀州より同道つかまつりましてございます。詳しくはこの書面にしたためてございます」

越「さようであるか、いま一時遅かりせば越前父子切腹いたして相果つべきであったに、その方両人よいところへ立ち帰ってくれた」

ここで大助が紀州調べの書面を読み上げると、調べの模様が手に取るようにしたためてございますから、越前守殿はじめ一同の家来は、手の舞い足のふむところを知らざるほどの喜び。

越「ああよくぞ調べた、白石、吉田の両人は、小屋へ引きとり、十分手当をいたせ。大助、そ

の方はすぐに供ぞろいの用意をいたすよう」大「かしこまりました」

死出の旅路も、一時に春がきたよう、にわかの供ぞろい、大岡越前守お屋敷をおでましになりましたが、途中より道をかえてご老中筆頭松平伊豆守お屋敷へまいりました。なぜ伊豆守さまのお屋敷にいくようになったというと、すぐに登城して将軍家へ紀州調べのことを言上すれば、越前、よくその方調べが届いた、忠義の段天晴れであるとお褒めのお言葉を頂戴するでしょうが、いままでのあいだ大阪城代、京都所司代、江戸閣老五人の者がほぼ実物と見込みをつけてすでにご親子ご対顔ということにまで運んだ、それが偽者であったといっては所司代、城代、老中はなにを調べたのだかわからない、こうなると不注意のかどによってその役目をひかなければならず、しだいによればお家にも傷がつくか知れない。越前守は自分ばかり出世をすればいいという人でない。そこで伊豆守殿のお屋敷へ下ごしらえにいったのでございます。

越「大岡越前、ご用談お目どおりを願います」

と申し入れる。ご家来から伊豆守殿へ申しあげると、伊豆守はさては越前、天一坊殿一件を一手に引き受けたが、一人の手際にいかんによって、この方へお詫びを願うといってきたか、腹を切ることができず、家をつぶすこともできないから相談にきたのだろう、この方が取り決めたものを彼が一手に引き受けた以上は、越前を困らしてやろうと思召したから、

伊「これへとおせ」

やがて越前守伊豆守殿御前へまかりいでて、

越「天一坊身の上について密々言上つかまつりとう存じます」

伊「いや天一坊身の上については、そのもと一手もちになっておる。この方どもに相談には及

ばぬ、そのもと引き受けた以上は、そのもと一人でことをいたしてよかろう」

高く止まって澄ましている。

越「おためよろしきことを言上つかまつりたくまかりいでました。お聞き取りがございませんければ、それまでのことでございますが、越前これにて独り言を申しますれば、さようご承知を願います」

伊「独り言を申すともどうともいたせ。天一坊のお身の上の儀は一向に存ぜぬ」

そこで越前守が紫縮緬の袱紗のうちより取りだしたる紀州調べの清書きいたしたのを読みはじめる。

越「過日天一坊殿をお招き申し、だんだん取り調べたるところ、山内という者弁舌流水のごとく越前は短才無知なり、かつ不弁舌、伊賀亮のためについに説伏せられ、近々ご親子対面の儀を、取りはからい奉ると申しいったんは引きとらせ、上へは病気と称して引きこもり、じつは公用人両人を遣わして紀州調べをいたしたるところ、お手つけになったる沢野殿、ならびに男のお子さまは逝去となり、光照寺と申す寺に葬り奉りしに相違ございませぬ。しかるにその後、沢野殿の母、さんと申す者所持いたしたるお墨付き、短刀の二品を見込み、さんを殺して品々を盗みとったるは、平野村修験者感応院の弟子源氏坊戒行というもの、その後師匠感応院を毒殺してその土地を去り、已も人に殺されたる体に取りこしらえ、紀州を立ちいでたるに相違これ無く、その源氏坊戒行見知り人名主新右衛門、飯炊き伝助と申す者をこのたび同道して立ち帰りました。さればまったく奸物と定まりました」

伊豆守殿この独り言を聞いて思わずぶるぶるっとふるえた。

伊「うむ……」越「右について直ぐに登城いたし、上様に言上つかまつりますれば、ご一統さまの不調法にあいなることと心得、ご相談つかまつりたくまかりいでましてございまする。お人払い下さればありがたきしあわせに存じ奉る」

伊豆守殿胸は早鐘をつくよう。

伊「その紀州調べの清書きいたせしものをこれへ見せい」

取り次ぎをもって差し上げる。御覧になった伊豆守、

伊「越前、まことに面目次第もないわけである。伊豆は切腹いたす。ついては越前相談というはなんじゃ。もそっと近う進め」越「お人払いを願いまする」伊「うむ一同遠慮いたせ」

越前は天下の名奉行

伊豆守殿が家来を遠ざけたので、

越「別の儀ではございませぬが、すぐに登城して言上いたしますれば、みなみなさまの不調法になると心得まするから、これよりご登城遊ばされすなわち城代所司代老中五人、上様ご落胤と決定つかまつりましたなれども、合点いかざるところ二ヵ条これあるによって、城代所司代へ書面をもって談合の上、さらに越前に申しつけて紀州表をとくと詮議をいたしましたるところ、は

たして偽者でございましたと申しあげれば、あなた様方の不調法にはあいなりますまいかと心得ます。よってさよう遊ばしたがよろしかろうとかように存じます」

伊「なるほど、そうなればわれわれどもはじめ城代所司代も不調法にならんが、しかしそれではその方一人が功名にはならぬ、それが気の毒だ」

越「いえ決してまえは功名を鼻にかける者ではございませぬ。ご一統がよろしければそれでよろしゅうございます」

伊「ああまことに感服である、なにぶんどうかそういうことに頼む」

そこで城代所司代へご書面を遣わしてあくまでも調べを遂げたつもりにいたし、そのうち登城の刻限にあいなりましたからお二方そろってご登城にあいなる。ところがご老中が登城をする、それにつづいて町奉行がすぐ登城をするわけにいかぬ。ご老中が登城をすれば若年寄、寺社奉行が登城をして、それから町奉行が登城をするのですから、越前守は差しひかえております。伊豆守殿お上がりになって、待てども待てども、越前が登城しない。

伊「越前はいかがいたした」

△「かなたにひかえております」

伊「今日はひかえるに及ばぬ、越前にすぐ登城いたすよう、見張りの者にことわって越前の乗り物をこれにつけろ」

というおおせ。そこで老中につづいて登城になり、見張りにことわって下乗橋で下乗をいたし、越前守頭を下げてひかえていると、

伊「今日は苦しゅうないによってこれへまいれ」

そこで伊豆殿の後についてお上がり。伊豆越前の両人お目どおりを願いまするとと申しあげた。上様は不思議に思召された、仲の悪い町奉行と伊豆がならんで登城するというは不思議だ、なにかこれにはわけがあるだろうと、上様ご出座になる。両人それへ手をつかえて、

伊「今日越前、病気全快つかまつりお目どおりを願いまするは、このたび上方よりご下向にあいなったる天一坊殿御身の上につきてまかりいでました。城代所司代、老中一同上様のご落胤とほぼ決定つかまつりましたるところ、合点のまいらざるところこれあり、書面をもって城代所司

代へ談合つかまつりましたるところ、ますます合点まいらず、よって十有余年町奉行をつとめましたる越前守へ調べ方申しつけましたところ、家来両人をもって紀州調べをいたさせ、恐れながらご落胤はご他界、お腹さまもご逝去、光照寺というへ葬りまして、ただ今の天一坊まったく感応院の弟子にて源氏坊戒行と申する者にございますること明白、委細はこれにしたためてございます」

と委細の言上。さすがの吉宗公もおどろき、

吉「紀州調べの書き上げ、それにて読み上げい」

かたわらのご近習がとうとうとこれを読み上げる。

吉「うむ、越前よう調べが届いた。すでにその偽者と親子の盃をいたそうといたした。その方なくんば天下の一大事にも及ぶべきところ、幸いにこれを免れしはまったくその方の働き、天一召し捕りの儀はその方が心まかせにいたせ。伊豆、その方はじめとして城代所司代老中一同心づいたる儀ではあ……」

とおっしゃった。心づいたる儀ではあるまいとおっしゃろうとしたが、あるまいといえば銘々の身の上にかかわる、そこへお気がつかれましたから、心づいたる儀ではあろうと口の中でおっしゃった。伊豆守も越前守もはっと思ったが、

伊「まったく心づきまして越前に調べの儀を申し付けたに相違ございませぬ」吉「さようか、よく気がついた。この儀について小石川屋形もことごとく心痛いたされたによって、両人小石川屋形へまかり越し、目どおりの上委細申し述べろ。伊豆その方はよい町奉行が支配下にあって喜ばしかろうな、予が鑑識どおりあっぱれ越前は名奉行であるな」伊「恐れ入りましてございます」

そのままお立ちになって、上様は奥へおはいりになりました。まずここさえすめばよいと思って、直ぐさま水戸さまのお屋形へまかりいで、お目どおりの上将軍家へ言上いたしたるとおり申しあげる。中納言綱条卿お聞きになって、

中「さようか、ようすみやかに紀州調べがゆき届いた。それにて読みあげい」

とおっしゃるから、傍らにいたご近習がとうとうと紀州調べの清書きを読み上げる。

中「じつによう行き届いたことである。やがて上様よりご褒美のご沙汰があろう。しかしこれは城代所司代老中の心づいたる儀ではあるまい」

とおっしゃった。将軍は、あろうとおっしゃったからよかったが、水戸さまは「あるまい」とはっきりいってしまった。もう水戸さまがあるまいといえば、無いに決まってしまう。伊豆越前の両人はっとおどろいて下を向いた。まったく心づいた儀でございますと水戸さまへ言葉をかえすわけにはいかず、といって、おっしゃるとおり心づいた儀でございませぬと、水戸さまのお言葉をたてれば大変。じつは伊豆、越前がこういうわけにこしらえてまいりましたといまさらいうわけにもいかず、水戸さまはご心中、なんでもこれは越前が一人でことをしたに違いないと思召したから、

中「越前、だれにも内意を受けたわけではあるまい。その方が一手で取り調べたのであろう。伊豆、その方たちはまったく心づいたる儀ではあるまい」

と再三のおおせ。よんどころないから越前守頭を上げて、

越「恐れながら言上いたします。大阪城代の儀は四国中国の探題、上様のご名代。京都所司代の儀は主上のご守護役としてすなわち上様のご名代。江戸老中五人の方は日本の政治を司どる上

様のご名代。いずれもご名代の大役をお勤め遊ばすによって、これしきの儀はお心づきあろうかと存じ奉る。寛大の思召しをもっていま一度ご上意を願います」

水戸さま膝をうって、

中「うむ、よう申した。なるほどいずれも上様ご名代なるによってそれしきのことは心づくであろう。予はそこへ気がつかなんだ。ああ心づいたであろうな、伊豆」伊「はっ」

中「越前の申すとおり、上様ご名代の大役を勤めるによってそれしきの儀は心づいたであろうな。賞め遣わすぞよ。よい者が配下にあって喜ばしく存ずるであろう」

むじなと狸のだまし合い

それから町奉行においては天一坊召し捕りの手配に及びました。第一番に品川口、つづいて板橋口、日光街道、甲州街道の木戸木戸をしめ、前日より火をたかず、木戸木戸には四十七組の鳶人足厳重に固め、また海を逃れんとするときは船手で召し捕るという手はず。越前守は公用人池田、白石、吉田の三人を招き、

越「さてその方どもの尽力によって、かく都合よく運ぶにいたったが、これから先がたいせつである。大助儀は家事万端を取りあつかえ。三五郎は召し捕り方の手配をいたせ。治右衛門は八つ山の旅館へまいり、露顕いたしたということが知れては先方からこない、こなければぜひともこちらから召し捕りに向かわなければならぬ。しかる時は一段高き八つ山のことゆえ、自然怪我人もつくらねばならぬ。よって明日ご親子ご対顔の運びにいたしたるゆえ、越前役宅までおいでにあいなりたいと、彼らを引きだすよういたせ」治「委細承知つかまつる」

これから白石治右衛門八つ山の館へまいりまして、

治「町奉行大岡越前守家来、白石治右衛門ご重役に御意申したくまかりいでました。召しつれましたものは仲間一人、徒士一人でございます」

○「さようか、ご門下奉行使い仲間一人徒士一人召しつれました」

とことわる。それから中の口へまいり、

治「越前の家来治右衛門ご重役に御意得とう存じます」

これへとあって、使者の間へとおし、

○「ご重役はどなたにおあいなさる」治「さよう、山内伊賀亮殿にお目どおりいたしとう存じます」

そのことを山内に取りつぐと、伊賀亮首をひねっておりましたが、今日越前から使いがくるわけがない、紀州調べは四日かかる、往きが四日帰りが四日、前後十二日と考えた、しかるに今日はまだ九日目だ。してみるといよいよ成就いたしたか知らんと考えたから、「これへとおせ」というので、治右衛門を伊賀亮の部屋へとおす。衝立てのところへ手をついて、

治「越前の使い治右衛門まかりいでました」

山「うむ治右衛門、たびたびの使い大儀、越前殿病気平癒の由承知したが、して今日使いの趣は何事じゃ」

治「みなみなさまご機嫌よういらせられ、恐悦至極に存じまする、ぜんたい越前守まかりいずべきはずのところ御用繁多につき、拙者をもって言上つかまつる。過日おおせこれありしにより、さっそくご対顔の儀取り計ろうべきのところ、越前病気引きこもり延引つかまつり、まことに恐れ入ります。ついては病気全快にいたりましたについて、明日いよいよご親子ご対顔の儀を取り計らいまするによって、この前ごおりのお供方にて越前守役宅においでを願います。本来なれば酒井左衛門ご元服いたすべきはずでございまするが、当人在国について、松平伊豆守代わってご元服申しあげます。ご老中若年寄両町奉行お出迎えにまかりいで、水戸家へお成り、水戸さまご案内にてご登城ご親子のご対顔、お盃事終わってお能の催しあり、夜分西丸へお乗り込み、西丸大納言さまと申しあげます。右について無禄無住にて登城にあいなっては格式よろしからざるにより、常州佐竹の城、摂津東成郡大阪の城、御高の儀は摂河泉三丹州にて三百万石、甲州にて飼料として五十万石、武州小金井において十五万石、あわせて三百六十五万石を賜りまする。明日晴れなれば青貝柄の薙刀、雨天なれば絵巻き御薙刀を上より下しおかれまする。幾久しくご繁昌のほどをお祝し奉る。この段よろしくご披露を願いまする」

と白石治右衛門弁舌とうとうと申し述べました。伊賀亮両眼を閉じて聞いておりましたが、

山「この儀言上いたしなば、定めし上様ご満足に思召すであろう。しばらく控えおられるように」

と治右衛門をそれへ待たしておいて奥へとおり、

山「さて天一坊はじめ一同、いよいよ大願成就してご親子ご対顔となった。斯々斯様斯様」

とつげたので、一同はこおどりして喜ぶ。そこで熨斗目麻上下を着用、黄金づくりの太刀を家来にもたせて伊賀亮再びそれへでてきて、

山「治右衛門、ただ今上へ言上いたしたところ、ことごとくご満足に思召し、越前にはおって褒美を取らせるというおおせがあった。伊賀亮明日お供いたすが、越前殿に粗末なきよう取りはからいくれよと申せ。これは伊賀亮よりそのもとに進じ申す、越前へ断り差し料にいたしてよろしかろう」

といって、黄金造りの太刀をそれへだした。

治「陪臣へたいして結構なるお腰の物拝領おおせつけられありがたきしあわせに存じまする、いずれ明日お目どおりいたして御礼申しあげます」山「大儀であった。ゆるゆる休息して戻られい」

伊賀亮はその席をたって二間ばかり隔たったところで壁に向かってぺろりと長い舌をだして、名奉行の越前も、いよいよあざむきおわせて喜ばしいと。そのまま奥へはいる。治右衛門刀を拝領して、これも二間ばかり下がって壁に向かって同じく舌をぺろりとだして、山内を首尾よく偽りおわしてやったと喜んだ。両方でだましっこをしている。治右衛門急ぎ立ち帰って越前守へ申し上げると、越前守殿も大きに喜んで、明日をまっておいでになる。

八つ山仮御殿、祝いの宴

さて八つ山ではお能の舞台がかねて出来いたしておりまするが、まだ身分が決定しませんか

ら、舞台を開けるわけにはいかなかったところ、いよいよ明日ご対面というので祝いとしての能の催しがございます。観世、宝生、金春、金剛、喜多などへ沙汰になって、お能狂言の催し、新規お出入りができるというので一同一生懸命に勤める。山内伊賀亮、藤井左京、常楽院ら余念もなくお能の見物をしている。ところが天一坊は根が下賤なやつであるから、高尚な能はわからない、御簾の中でこくりこくり居眠りをしている。

今までは障子がカタリッとしても、己を召し捕りにきたのではないかと思うくらいに用心しておりますから居眠りもでなかったが、もう大丈夫と思う油断から、こっくりこっくり居眠りをはじめた。そのうちにグーッ、グーッ鼾をかきはじめたので御簾の外にあった伊賀亮、あいかんな結構なお能をみることができないようでは長持ちはできない、困ったことだと思っていると、なにか苦しげなる声をだしてうなされているようす。お側の面々恐れながらお目覚めを願いまするとと申すと、はっと気がついた天一坊、

天「ああ恐ろしい夢をみた。びっしょり汗をかいた、弾正をこれへ呼べ」

はっというと、夢判断をよくする猪股弾正というものがそれへいでました。

天「弾正、予は夢をみた、よい夢か悪い夢か判断をしてくれ」

弾「かしこまりました、夢なればとてなおざりにならんことでございます。いかなる夢でございました」

天「されば、左の手に餌をもち、右の手に竿をもち、だんだん細い川を釣いたしてまいったところが、なにぶんにも魚があがらん、川じりへ川じりへとまいるうちに渺々たる青海原へでた。それへ竿を垂れ、なにか魚を釣り上げたと思うときに、予が面体たちまち変わって角を生じ、口は耳まで裂け、両眼は明星のごとくにあいなった。こういう面体になっては将軍になるわけにならぬと、その角をもぎ取ったときに、目がさめた。良い夢か悪い夢か」

という。弾正しばらく考えておりましたが、

弾「弾正申しあげます。十善万乗の君を龍体と申し奉り、尊顔を龍顔といい、お恐りを逆鱗と称し奉りまする。将軍は天子さまのご名代でありますからすなわち将軍職を勤めればとりもなおさず龍体とすべし、ただ今までのあいだいまだご身分は定まりませぬところいよいよ明日ご親子ご対面となれば、すなわち天朝のご名代職、龍体の形を示したる吉夢にございます。幾久しゅう恐悦を申しあげます」

天「なるほど、天皇の名代を勤むるによって将軍をも龍体と申すか、そこで予が龍体になったという夢じゃな」弾「御意にございます」天「さようか、追って褒美を遣わす」

さあ入れ代わり立ち代わり、恐悦恐悦といってでてくるうちに、これを聞いた山内伊賀亮、

山「幾久しゅう恐悦申しあげます」

といいながら、きっと天一坊の顔を見つめ、振りかえって大膳、左京、常楽院の顔色をじっと見て外へでた。

山「赤川、拙者にわかに腹痛を感じ、どうもたえられんから部屋へ下がって服薬つかまつる。御前体よろしく頼む」赤「さようでござるか、ずいぶんお大事に、後刻お見舞い申しあげます」

というううちに伊賀亮は自分の部屋へ立ち帰って鏡を一面とりいだし、自分の顔色をしばらく映しておりましたが、その鏡をぱったりそれへ取りおとして、

山「ああ恐ろしきは大岡越前守だ、さてはいよいよ露顕いたした。また治右衛門というものは

天晴れのやつだ。よく伊賀亮をだましおおせた。定めしもはや手配りができたであろう」

と窓を開いてみると、品川から深川まで船簞の用意十分に届いております。水上がかく手の届いてあるからには陸はもちろんのこと。よし、露顕ときまったからには勤めていてもしかたがない。くつろいで酒でも飲もうと、料理を取りよせ、伊賀亮は酒を飲みながら、家来にいいつけ、

山「だれにもあわぬが、大膳殿がまいったならばここへとおせ」家「かしこまりました」

待っていると夜の八つごろ、赤川大膳は十分に酩酊をして山内伊賀亮の部屋へきた。

大「さて先生大きに心配いたしておったが、承ればご酒を召し上がっておるとのこと、ご酒でも上がるようなれば大したこともあるまいと存じ、大きに拙者も安心いたした。お気分はいかがでござる」山「大きによろしい」

大「そこで明日お供ができましょうか」山「できる」大「それならば大丈夫でございます」

山「それについて赤川、まあ一献飲みなさい」大「拙者ははや十分頂戴してまいった」山「いや十分なれば十二分飲まっしゃい」

大「もう十分の上は飲めませぬ。この上飲むと胸が苦しくていかぬから御免をこうむる」

山「胸苦しければ酒の醒める話をして聞かせるから、まず十二分飲むがよい」大「いや酒の醒める話というのは何でございます」

と少し赤川も気になってきた。

山「明日ご親子対顔というはまったくいつわり、いよいよこのたびの一件露顕いたしたによって、明日越前屋敷へまいれば、天一坊初め一同召し捕りになってはりつけだ」大「えーっ」

とびっくりいたした赤川大膳、

大「先生冗談いってはいけません」山「冗談ではない、そろそろ酒が醒めかかってきたろう」

これは醒めるはずだ、はりつけになるということを聞いて、酔っていられるものではない。

大「先刻先生のおっしゃったは、もう大丈夫だといって白石治右衛門に褒美として刀までお贈りなすったではございませぬか」

山「いやあのときには大願成就したと思ったが、天一坊の夢でさとった。十善の君は龍体だ、その龍にもいろいろある。角のない龍のことを蟄龍という、蟄龍が昇天しようとすると、龍中恥辱になるといって、ほかの龍が水中に蹴こんでしまって、再び水面へださない。天一坊に角のはえたときにわしは龍体だといって喜べばよかったが、こんな角が生えてはいかぬといって、もぎ取ったから蟄龍になった。明日登城をしようというは、雲水をかいて昇天をするところだ。水中に蹴こまれるとはすなわち越前のために召し捕られるという夢だ。これこそ正夢にして、わしがその話を聞くとすぐに、天一坊の顔をみると、いよいよ七八日のうちに死ぬという相があらわれていた。しかしまだ三四十日の間はかかると思う。またお身を初め藤井常楽院などの顔をみると同じく剣死の相がある。それからわしが当部屋へ立ち帰ってきて鏡を取りだしてみると、今までは気もつかなかったが、わしも剣死の相があらわれた。もうわしはいかぬと覚悟をしたから、勤めていてもしかたがないゆえ、ここに気楽に酒を飲んでいる。しかしおまえには少々相談があるから、内々部屋へいれたのだ」

大「それは先生大変で、まったくでございますか」山「まったくにもなにも実に越前守にはおどろきいった」

大「それじゃあ先生早く気がついたのが幸い、金は沢山あるから、いずれかへ逃げて二年でも

三年でも生きのびるだけ得だから逃げましょう」山「それはいけない、まあこっちへきてみなさい」

と大膳に窓を開かせて見せると、品川から深川まで篝火を焚いた船が見わたすかぎりずーっと充満している。

大「あれはなんでございます。魚を獲る船と違ってたいそう用意しているようす」

山「それだ、召し捕りの手配だ、あのとおり水上まで手が届いているからは陸はもちろんのこと、もう逃れるところはない」大「へえー、なるほど」

大膳の顔は真っ青になった。

山「さあこっちへおいで」

もとのところへきて、

山「人間というものは死に際が肝要、いま逃げようという了簡をだして、後に汚名を残してはならぬ」

大「それでは先生の思召しを承ろう」山「しからばお話を申す。天一坊と左京、常楽院三人を越前守の屋敷へやってはりつけにしてしまい、お前とわしだけはここに残って腹を切ろうというのだ」

大「それは先生あなたのおっしゃることは不実だ、苦楽をともにしようとまで、五人の者が約束をして、いまさら三人やって縛らして恥をかかせ、あなたとわしだけ腹をきって死のうというのは少し不実だろうと思う」

山「そこに話がある。天一坊は師匠感応院を殺した、また沢野の母、さんという者を殺してい

る、藤井左京は神部要助というおばの亭主を殺し、出家の身として常楽院天忠は佐渡で兄弟子を殺し、美濃で師匠を殺して、三人ともに、目上の、しかも恩人を殺した。

その大悪人がとうとうあのとおりおしおきになった、悪いことはできないものだ。越前守は上様が名奉行とおおせられただけあって、あっぱれの者だと越前守も賞められ、同じ大事を企てた中でも、山内伊賀亮、赤川大膳は恥を知って早くも切腹をした。

これは目上の者を殺すようなことはしなかったのである。そうすれば人として師匠、親、主人などを殺すというは天罰の恐ろしきものだということを人がしる。死に臨んでは少しは後のためになるようなことをしておかんければならぬ。どうだ」

大「なるほど恐れ入った、それでは三人をやって二人はここで腹を切ることにいたそう、いかにも先生のおっしゃるとおり承知いたしました」山「しかし城代、所司代、老中五人までもあざむきおおせて、天下の名奉行というものまでいったん説きやぶったから、もはや露顕をしたところがわれわれの恥にはならない。さあ酒を飲みなさい」

もはや覚悟をいたしておりますから、大膳も充分に酒を飲み、夜があけると、「山内伊賀亮、赤川大膳昨夜より病気につき今日お供が出来かねるによって、左京殿によろしく頼む」ということを申しでた。

一網打尽！　悪の華散る

さて翌日になる。今日はいよいよご対顔というので、天一坊も朝早くから起きて支度、いつもなら赤川大膳が下検分として、先発に出かける役目でございますが、赤川大膳が病気というので、今日は藤井左京が下検分として出かけることになる。

こちらは大岡越前守殿屋敷においては万端の用意手配り、とどこおりなく調い、待っているところへ、松平伊豆守をはじめ老中五人が出張、天一坊のくるのを、今や遅しと待っている。越前守殿は紀州からつれてまいりました平野村の名主新右衛門、飯炊きの伝助をお呼びになって、

越「その方ども日々大儀である。ついては今日ここへ天一坊という者がまいる。それがその方どもが知っている感応院の弟子源氏坊戒行と申す者に違いない。もし戒行であったら右の手でも左の手でもあげるようにいたせ」

新「かしこまりましてございます」越「ついてはそのみなりではいかぬ、この上下をきるようにいたせ」新「へえー、お侍になるでござえますか……伝助、上下着て侍になるだ」

伝「はあ、茶番でもうつかね、茶番ならおれはあ侍より女っ子になる方がいい、これでもおれはあ女形でがすから……」

暢気なことをいっている。それから池田大助が世話をやいて、二人に上下をきせて、大小を差

させたが、その格好の悪いこと。玄関のこなたへつれてきて、控えさせておきました。

そのうちに藤井左京が乗りこんできて下検分、つづいて天一坊、行列美々しく乗りこんでまいりまする。もう偽者だということがわかっていても、召し捕るまでは敵に油断をさせなければなりませぬから、五人の老中、つづいて大岡越前守慎んで出迎える。このときに池田大助、

大「あれが天一坊じゃ、よく見るようにいたせ」

玄関のこちらに控えていた新右衛門伝助の二人、顔をあげて天一坊の顔をみたが、威風堂々辺りを払い、つづいて常楽院天忠、藤井左京、お供の者がずらりと揃って乗りこんでくるから、

「へへーっ」と平伏したなり、右の手も左の手もあげない。

そのうちに奥の間へご案内、一段高く御座の間ができている。天一坊それへ着座をする。御簾の前にご老中、越前守忠相両手をつかえ、

越「今日は吉日良辰につき、ご親子ご対顔の儀、お取り計らい奉り、恐悦至極に存じ奉ります。右につきお墨付き、お短刀の二品を上に差しあげ奉ります、よってご元服の相すむまで、この二品を伊豆へお渡し下しおかれますように」

当人は偽者ですが、お証拠の品は真の品ですから、これは将軍家へ早く差しあげたほうが、将軍家もご安心なさるだろうという考え。露顕したとは気がつかないから、お墨付き、短刀を取り出して松平伊豆守へ渡す、伊豆守一々改めてみると以前の品に違いない。

伊「まずしばらくのあいだごゆるりとご休息を願います。越前守」越「はは っ」伊「天一坊殿をはじめご一同をご退屈なさらぬようご饗応申しあげるように」越「委細かしこまりましてございます」

伊豆守はすぐに登城をして将軍家へその二品を御覧にいれる、吉宗公御覧になると、沢野にやっ

たお墨付きに違いない、お気に入りの沢野、腹の子も病死をしたかと思召すと、上つ方でも親子の情に変わりはない、両眼に涙を浮かべておられましたが、ご自身でかたわらのお火鉢の中へ、そのお墨付きをお投げ入れになったから、ぱっと炎はたってお墨付きは灰になってしまいました。短刀はお手もとへおおきになりましたが、この短刀は後に紀州家へお戻しになったということでございます。

伊豆守はこれがすめば用はない、直ぐにお屋敷へお帰りになる。

こちらは大岡越前守、白石治右衛門を呼んで、

越「治右衛門、今日山内に赤川の両人はまいらぬか」治「まだみえませぬ」

越「さては山内、赤川の両人は、露顕をさとったに違いない、その方そう八つ山へまいって、両人召し捕りの用意をいたせ、お曲輪外の人数をつれてまいるように」

というので、直ぐに白石治右衛門支度をいたして、お曲輪外に控えていた三百人の者をつれて八つ山さして乗りこんでいく。

八つ山の御殿では山内伊賀亮、残った者にあるだけの金をやって、それとなしにいとまをだしたから一同喜んで金をもって立ち退こうとしている、ところへワーワッという捕り方の人数。

「御用だーっ」「御用だっ」

と踏みこんでくる。

山「赤川、かねての覚悟だ、笑われるようなことはいたすな」赤「心得てござる」

といったが、山内とは人物が違う。浪人の後は山賊に等しいことをしていて、天一坊と共謀して、良い夢をみようと謀るくらいの男ですから、まだまだ未練がある。このとき、直ぐ腹を切っ

てしまえばえらいものだが、この男には自腹がきれなかった。寄せくる捕り方の人数を追いはらい追いはらいしているうちにつかれて、とうとう赤川大膳このところで縛につきました。奥へ乗りこんできてみると、山内伊賀亮、屏風を引きまわして、その中で香をたき、みごとに腹一文字にかききって、余る一刀で食道気道を深く刺して死んでいる。側に書き置きのようなものがあるから白石治右衛門、ひらいてみると、これまでなしたることを残らず書面に書き残してありますから、それをもって治右衛門、八つ山御殿へは留守番の人数をおいて引きあげる。

さてこちらは大岡越前守屋敷においては、天一坊の前へでた越前守、

越「ただ今にもあれ伊豆下城つかまつりますれば、さっそくにご元服に取りかかります、定めしご退屈にいらせられましょう、粗茶一服献じとうございます、広間ではございますが、あれへ成らせられまするように」

天「さようか、せわしき役目を勤めながら、茶を好むとは風流なこと、馳走になるであろう」

越「こちらへ……」

越前守が先にたつ、天一坊後についていくと、やがてきた一間、そこへいれると越前守、会釈もしないでずっと下がってしまった。それっきり、待てども待てどもだれもでてこない。茶席でもなければ待合でもない。ただ八畳ばかりの座敷、次の間をみると釜がかかっているから、天一坊しきりに考えながらかなたこなたキョロキョロ見回している。そのうちに役人一人でてきて、広蓋の上へ白布をかけた物を天一坊の前へおいて、

○「主人越前守よりの申しつけ、この衣類にお召し替え遊ばしますよう」

といって役人は下がってしまう。何もここへきて衣類などを着かえないでもよさそうなものだ

と思ったが、天一坊、その白布に手をかけて、取りのけてみるとおどろいた。加太の浦を立ち退くときに、自分でずたずたにきって、犬の血をつけておいた己の衣服ですから、びっくりした天一坊、さては悪事露顕をしたか、そういえば山内赤川のこないのは、露顕を悟ってこなかったのか、一言自分にそういってくれれば、まさかにここまで召し捕られにきはしないものを、立派に腹でもきってしまうのだが、残念なことをしたと、おどおどして、いまさら逃げることもできず、胸躍らせて柱にもたれていると、さらりと襖をあけてはいってきた二人の男。

新「やあ戒行さん、しばらくでございます、まあおまえさんどうしただね、加太の浦で殺されたとばっかり思っていたが、よくまあ無事でいなすった」

伝「やあ戒行さん、えらく立派になんなすった。そんなまあぴかぴかした着物をきて、おらはあ新右衛門旦那のとこの飯炊きの伝助だよ」

いわれて天一坊顔をみると、見覚えのある平野村の新右衛門と飯炊きだからはっとばかりにおどろいたが、そ知らぬ顔。

天「無礼を申すな、下がれ」新「なにが無礼だね、わしを忘れたかね」天「その方ごとき下郎、目どおりならぬ、下がれ下がれっ」新「なにいうだね、わしのことを下郎だなんて……」いい争っている折しも、後ろの襖がさらりとあいて、

越「天一坊、ご上意であるぞ」

雷のごとく響いた越前守の声。もうこれまでと思ったから天一坊、さしたる脇差、抜くより早く、越前守殿を目がけて飛びかかってくるのを、

越「無礼者」

ぴしーり小手をうったから、脇差をそれへ取りおとす。「それっ」という下知に、ばらばらっと、あらわれた役人、

「御用っ」「上意」

たちまちのあいだにそのところへ召し捕ってしまった。新右衛門、伝助はおどろいて、

新「どうかわしどもは勘弁して下さいまし、召し捕られると思って江戸まで駕籠にゆられてきたでねえでございます」

越「いやいや、その方どもに罪はない、心配いたすな。その方ども両人は越前邸へ引きとるよういたせ」

新右衛門、伝助を下げて、越前守、

越「天一坊、紀州の調べ、くわしく届いたぞ、感応院弟子源氏坊戒行、その方の身の上は残らず相分かった上は、偽るともかなわぬところだ、お白洲へでた節は、お手数のかからぬよう、有り体に申しあげるようにいたせ」

越前守の顔をじっと見ていた天一坊ぐったりとして、

天「いやどうも大岡さんには敵わねえ、いかにも恐れ入った、永い間ご苦労をかけました……して山内、赤川の二人はいかがいたしましたか承りたい」越「赤川大膳は召し捕り、伊賀亮は切腹いたして相果てた」

天「さようでございますか、さすが上様が名奉行だとおっしゃったほどあって、恐れ入りました。紀州の調べが届いた上は、決していつわりは申し上げませぬ、ご法どおりよろしくお願い申します」

越「うむ、悪人ながら、人の長ともなるべきやつ、よく覚悟いたした。それっ」

というと、大ぜいの役人がついて天一坊を引きたてる。

こちらは藤井左京、天一坊が越前守に案内をされていったきり、帰ってこないから、どうしたのかと思っていると、一人の役人がそれへきて、

○「ただ今お上が召しておいでございますから、こちらへおいで下さるよう」左「さようか」

左京立ち上がって案内に従ってくる。振り返った役人が、

○「失礼ながらお袴のひもがとけましてございます」左「さようか」

立ち止まっている左京の前へきて、袴のひもを結ぶふりをして、いきなり脇差をとって投げてしまった。

左「なにをする」

というちにドーンと足をすくって後ろへ投げ倒した。起き上がろうとするところを飛びかかってたちまち縛り上げてしまう。常楽院天忠も同じくよびだされてくるところを、待ち構えていた役人、ばらばらっと飛びだして、

○「御用だっ、常楽院御用っ」常「これはしたり、天一坊殿お付きの常楽院、御用とはご無礼でござろう、南無妙法蓮華経」

といったが、いくら南無妙法蓮華経といったって追いつかない。たちまちこれも捕縛。

当日天一坊の供をして来た者七八百人、これを一人ずつ召し捕っていては手数がかかる、そこで白石治右衛門と吉田三五郎が相談の上、食物を食べさせて、その食物の中へ痺れ薬を入れて一度に捕まえたということですが当てにはなりません。それから一人一人縛るのはめんどうですから、五人六人ずつ一把にしてトラックにのせて運んだといいますが、これも当てにはなりませぬ。

供方の者を調べると、事情を知っている者と、知らない者とある、めいめいその事情によってそれぞれの処分をいたしました。

首魁の天一坊、大膳、左京、常楽院の四人は、こうなっては逃れるところはありませぬ。これまでの悪事の次第を有り体に白状いたしましたから、いよいよ口書爪印がすんで、大膳、左京、常楽院の三人ははりつけ。天一坊は獄門。ほかの三人が重い磔刑だのに首魁の天一坊がなんで軽い獄門になったかというと、天一坊の面体が八代さまのお顔によく似ているというところから、天一坊をみて江戸の町人などに、八代さまのお顔に似ているなどといわれるのを恐れ、獄門にして、大きな札を顔の前へたてて、天一坊の顔が見物にわからないようにしたということであります。

天網恢々疎にしてもらさずと申しまして、どんなに周到にたくらんだ悪事でもいつかは暴かれずにおりません。

知恵者が、その知恵を絞って、十中の八九まで、成功したと思うとたんに、その悪事が暴かれたというためしは、古今東西、どこの国を捜しましても、これに変わりはないようでございます。

その例にもれず、知恵者の伊賀亮、策謀家の天忠坊という、したたか者の役者揃いで企らんだ、徳川家乗っとりの陰謀も、大岡越前守の決死の裁きの前には敵いません、お家の大事にいたるその寸前で、事なく一味一党ことごとく取り押さえられたのでございます。

これで徳川のお家も安穏に、明治のご維新まで栄えた。

この功によって、大岡越前守は、一万石のご加増にあいなり、ますます名奉行の名は高くあいなりました。

（おわり）

第二話　音羽丹七

恋のさや当て三つ巴

引き続いて大岡政談のうち、音羽丹七を申しあげます。

徳川の太平打ちつづく享保のころ、柳橋の沢潟家おとわという芸者がおりました。年は二十一、まことに気立てのよい、気性の勝ったしっかり者、芸という芸はなんでもできる、茶の湯、生け花はいうに及ばず、歌俳偕の道にまで達していて、ことに品位も高い、ただ一風変わっているのは男嫌い、どんな立派なお方から話をかけられても決して応じない、わたしは心願があって二十五までは男のそばへ寄りませんというのが評判でございます。

妙なもので、これがかえって人気を呼んで、なかなかの繁昌、ところがこのおとわにたいそう想いを寄せていましたのが、薩摩さまのお留守居役加藤佐太夫というお方でございます。

ここに薩摩さまのお姫さまがこのたび近衛さまにご縁組みになりますについて、ご婚礼のお支度、そのお掛かり仰せ付けられましたのが、伊集院築前、石黒三郎左衛門、松本利太夫、富永四郎

兵衛、加藤佐太夫の五名。お出入り町人の日本橋石町一丁目丹波屋丹右衛門が万事の御用を承り、調度一切を整えて納めました。もっとも十のもの七八分までは丹波屋で承り、残り二三分のところは、同三丁目三河屋喜蔵という者が承ったのでございます。

しかし丹波屋に三河屋では家格も違いますれば、身代も大変な違い。そのころ権門ととなえて、諸家共に商人が御用の品が納まりますと、そのお礼として掛かりの役人方を茶屋小屋へ招待してお饗応をいたすのが習わしでございました。

こういう大家になりますと始終色々の御用がありますので、お招きすることも一度や二度ではない。沢山役人のある中で、かの加藤佐太夫、いつも柳橋の万八楼に招待されて饗応を受ける。そのつど佐太夫お気に入りの芸者おとわをよばせ、酒の相手をさせます。しかしおとわのほうでは柳に風と受け流しておりますので佐太夫もどかしく思いますが、身分がらとしてどうも直掛け合いをするわけにもまいりません。

ちょうどそのころ丹波屋丹右衛門は病気のためせがれの丹七という者が、おやじの名代に、お屋敷へでては御用を承っております。この息子さんいたっておとなしく、それに男振りもよし、生意気などというものはさらにございません。たとえ家柄や身代は自分のほうが上でも、三河屋喜蔵を先輩にたてて、小父さん小父さんと敬っている。饗応の席へも、この丹七が名代にでて、丁寧に酒席をもてなしております。

加藤佐太夫あるとき三河屋喜蔵に、

佐「三河屋、どうもおとわという芸者は艶やかなものだな」喜「さようでございます」

佐「これ喜蔵、じつはわしはとうからおとわに執心だが、どうじゃ、折をみて媒酌の労をとら

んか」

喜「それほど御意に入りましたら、おとりもちをいたしましょう」

これはさすがに佐太夫も、年若な丹七にはいい兼ねましたから、喜蔵に頼んだ。

ところがこの喜蔵というやつがすこぶる善くないやつで、年は五十に手の届く分別盛り、頭もピカときておりますが、なかなか色欲両道に抜けめのないしれもので、こいつがかねておとわに恋着しておりますところから、どうかこれを自分のものにして、その上佐太夫にとりもち、それを枷に当時留守居役で飛ぶ鳥を落とす勢いの、加藤の旦那を抱きこんで、丹波屋丹右衛門を蹴おとし、自分が薩摩様の御用を一手に引き受けたいという、なかなか腹黒いやつでございます。

佐太夫の前は折を見ておとりもちをいたしましょうと申しておいて、己が内々、おとわのところへ入り込んでは、なんのかのともちかけます。けれどもおとわは喜蔵ごときに応ずる女ではない。

と「旦那冗談いっちゃいけませんよ」

と、てんで相手にいたしません。佐太夫にもなびかなければ喜蔵にも従わない。だがおとわも年ごろの女、まるで色気のないはずはございません。口数をきかず、ただおとなしく酒席をとりもっているかの丹七には、ひとかたならず思いを焦がしているのでございます。ところが丹七は木仏金仏石仏、ちっともこっちの心がつうじないので、おとわは焦れったくてたまりません。

今日も今日とて万八の二階で大勢の芸者をよんで、結構なお料理を取り寄せてのおもてなし、相変わらずその席へおとわも連なっております。そのうちに佐太夫、

佐「大きに酩酊いたした、もうそろそろ帰宅いたそう」

喜「旦那さまもうお帰りでございますか、お供はお駕籠にいたしましょうか、お船にいたしましょうか」

佐「ああ駕籠は窮屈でいかん、船のほうがよいな」喜「ではただ今申しつけます」

それからすぐに屋根船をあつらえ、脇櫓の船頭をつけて二挺櫓、桟橋へまわしました。

女「旦那さまのお立ち」

大勢周りを取り巻いて桟橋まで送ります。丹七もつづいて送ろうとするのを喜蔵が、

喜「いや丹七さんあなたはよろしゅうございます、私がお送り申すから」

丹「さようでございますか、じゃお頼み申します」

年輩の人のいうことに背いてはよくないと思うから、送りもいたしません。佐太夫たいそう酩酊をして、桟橋から屋根船にはいる。一同、

甲「ご機嫌よろしゅう」乙「ご機嫌よろしゅう」

喜「どうも旦那恐れ入りますが、丹七はお送り申しません、まことに不都合のやつで、しかし若年者でございますから、どうかご容赦を……」

佐「ああよいよい、差し支えない」

佐太夫はいたって淡白な人物、そのまま船は桟橋を離れます。

こちらは丹七、送らなくてもいいといわれて奥の小座敷でみんなの帰りをまっている。ところへ静かにはいってきたのは例のおとわ。

と「若旦那お一人でございますか」

丹「へえ一人でございます。おとわさん毎度ご迷惑さまで」

と「どういたしまして、お引き立てありがとう存じます。お一人でお寂しゅうございましょう」
丹「いえ別に寂しくもありません」
そばへ座ったが、なんとなくおとわも手持ち無沙汰。
と「あの若旦那、烟管がつまって困るんですがちょっとあなたのを拝借な」
丹「粗末な烟管でございますが、これでよろしゅうございますか」
と「ありがとう存じます、たいそうおとなしいお烟管ですわ」
丹「なに粗末なものでございます」
おとわは一ぷくのんでポンとはたいて、火皿を掃除してあとを詰め、
と「お返し申します、一ぷく召し上がれな」
と吸いつけ烟草、色気たっぷりでございます。目に物をいわせて丹七に渡すと、
丹「頂戴いたします」
とる手もふるえるくらいの丹七、きまりが悪いか顔あからめながら烟管をとる。これをのんでポンとはたいて烟草をそばへおき、どこまでも内気の若旦那、もじもじ下うつむいております。
と「ねえ若旦那、すこしあなたにお願い申したいことがあるんですよ」
丹「なんです」
と「ずいぶん変なお話ですが、あなたもいずれお内儀さんをお持ちになるんでございましょうね」
丹「左様でございます、まあ生涯独りでもおられませんから、いつか一度は家内をもらいますが、それも両親の思召しによってでございます」

と「もしあなたに死ぬほどほれてる女があるとしたらどうなさいます」
丹「そんな方はございません」
と「でも、もしあったら……」といいながら、盛んにモーションをかける。それに感づいた丹七、耳のつけねまでまっかにして、
丹「そんなお話をなすって、もしひとに聞かれたら……おとっさんやおっかさんに私が叱られますから……」
と「なんですね若旦那、じつは女の口からこんなことをいいだしては、なんて、はしたない女だろうとお思いでございましょうが、初めてお目にかかったそのときから、男嫌いで名をうったおとわが命までもと思い込んだ若旦那……」
丹「あれっ、そのようなこと」
と「ねえ若旦那、お願いでございます。そんなに思った女なら、末は女房にしてやろうと、あなたのお口からたった一言おっしゃって下さいませんか……」
と、丹七の手を引きよせる。
丹「おとわさん飛んだことをおいいなさる。私はまだ部屋住みの身でございます。そんなことをあなた、ひとに聞かれようものなら、大変でございますよ」
と「ですから淫らなことはないんですよ……女房にしてやると、たった一言おっしゃっていただけば……」
丹「でもそんなこと……いえとおっしゃってもおとっさんやおっかさんに相談して」
と「女と生まれた冥加にはこういう殿方にと、見込まれたのがあなたの因果、女の一心わたしはきっとつらぬこうととうから思って……いいえご大家だからどうの、ご身上がどうの、そんな欲得ずくではないので、折もあったらと思いながら、つい厚釜しく話もしにくいので、今日が今日まで我慢に我慢をしていましたが、今こうしてお目にかかりましたので……たとえ芸者をしておりましても、浮いた心で申すのではございません」
丹「いけません困りますよ、そんなことをいって、だれにきかれても大変ですよ、まして廊下で立ちぎきでもされて御覧なさい、すぐ丹七がおとわさんとどうのこうのと、噂を立てられ、お互いの身のためになりませんから、どうかやめて下さいまし」
と「いいじゃありませんか若旦那、たった一言女房にしてやると……」
丹「困りましたな困りましたな」
と途方にくれております。

喜蔵の無理難題

そのところへ、荒く唐紙を開けてはいってきた三河屋喜蔵、
喜「お楽しみの中を悪かったな」
と「おや三河屋さん」
さすがにおとわもちょっと顔を赤らめ、いずまいを直す。丹七も体裁悪げに、

丹「おお小父さん、ご苦労さまでございました、旦那はお帰りになりました」喜「へえ、いまお船でお帰りになりました」

それっきり口もきかず慌ただしく手を鳴らして酒を取り寄せる。女中や芸者もそこに集まって参りました。

女「こちらはお狭いじゃありませんか、あちらへ」

喜「いや打っちゃっておけ……丹七さんお話の邪魔をいたしてすみませんでした。お楽しみのところを飛んだお気の毒さまでございます」

丹「いえなに邪魔もなにもありゃあいたしません。あの私が一人こちらで待っているところへ、おとわさんがおいでになったのでお話をしているところ……」

喜「はあそうでございますか、しかし丹波屋の若旦那、あなたも立派な物持ちのご子息さん、芸者を買って遊ぼうというなら、船宿もあり、茶屋もあり、そこへいって、おとわをよんで遊んだらようございましょう、お出入りの旦那方をもてなしのご馳走に呼んだ芸者をこっそりと、小座敷へよんで遊ぶというなあ、ちとおかしかああありませんか」

丹「いえ遊んだわけでもなんでもありません、そうおっしゃられると、私はなんだか心持ちが悪うございます。小父さん困りますよ、決して猥らなことはございませんから……」

喜「いや小父さんはよして下さい、あなたは石町一丁目丹波屋丹右衛門さんという大町人の立派な若旦那だ、私どもは比べものにならない小商人、小父さんなんとおっしゃられると、ばかにされるようでいけません。……おとわもそうだ、へん、何だ、以後、男嫌いだの、奴のおとわだのと、高慢なことをいってもらいたくないよ。ちょっとの隙をみて、ほかの座敷へ客をくわえ込むなどというなあ、柳橋芸者の名折れだろう、これから座敷へでるときには、三味線をもたねえで、枕をもってきたらよかろう」

と「おや三河屋さん、妙なことをおっしゃいましたね」

おとわは想う丹七には弾かれ、いやだと思う三河屋から皮肉に喧嘩を仕かけられたからむっとした。

と「三河屋の旦那、そうまでいわれちゃあ、ちっとわたしも黙っていられません。さては三河屋さん、あんた話を立ち聞きしていなすったんですね。ええわたしは男嫌いの評判をとっていますよ、でもわたしはこれでも立派な女ですよ、女として男の嫌いな者はありません、まあ人によりでしょう、行く末はこの人と思う人があれば気も動きます、惚れもします。いいじゃありませんか、わたしのきめた夫はこの丹七さんのほかにはありません、ずっと前からわたしの心にきめた夫は、丹七さん、それでいま若旦那を口説いていました」

丹「おとわさん困りますよ、私が迷惑しますから……」

と「なに若旦那構やあしません、わたしが口説いて弾かれたというんだから、いいじゃありませんか……三河屋さん、それをあなたがお聞きなすって、妙なことをおっしゃるが、わたしは丹波屋の若旦那に惚れたんですよ」

丹「困りますよ、おとわさんやめて下さい、そんなことをおっしゃって……もうやめて下さい」

と「ようございますよ若旦那、なにがこわいんです、あなたね、親御さんに知れて、そんな道楽者なら家におけない、勘当するとおっしゃったら、勘当されていらっしゃいな、はばかりながらおとわがお引きとり申します。芸者屋の長火鉢の向こうに座って、長羅宇の烟管で烟草を召し上

がるのも妙なものですよ、ね若旦那、きっとわたしが立て過ごしにいたします。お膳の上にお肴はきらしませんよ、わたしがどんな苦労してもあなたに結城紬の着物に古渡の羽織はお着せ申し、立派にお養い申しますから、安心していらっしゃい」

丹「困りますな、そんなことをおっしゃられると、私どうすることもできませんから、おとわさん思召しはありがとう存じますが、どうかやめて下さい、私ほんとに困りますから……」

喜「ふふ石町一丁目の丹波屋丹右衛門さんの若旦那、一人息子の丹七さんはたいそうなものだなあ、芸者に惚れられて立て過ごしにされようって、いやお立派なもんですねえ、ヤンバラ芸者の男めかけ、おうらやましいものですなあ。だが丹波屋さん、これからお屋敷さまの御用は丹波屋さんは丹波屋さん、三河屋は三河屋と別にして頂きましょうね、ようございますか。このあいだから加藤さんがおとわをとりもてとおっしゃるが、私も痩せても枯れても一軒の主、たとえ五人でも八人でも奉公人をつかっている商人が、太鼓持ちじゃあるめえし、色のとりもちはしたくねえけれども商売大事と思えばこそ話をすると、この女がいやにぷりぷりしやがるから、野暮なやつだと思ったがそのはずだ、お前さんという女蕩しがついているからだ。もう向後お屋敷さまの御用は、一緒には勤めません、別々にしてもらいましょう。なあおとわ、ずいぶんおまえには喜蔵も入り上げたものだなあ」

と「およしなさいな愚痴らしい、あなたも立派な商人ではありませんかね、その立派な商人のあなたが、入り上げたなどおっしゃられると、わたしも心持ちが悪い。だがねえ三河屋さん、お客はお茶屋へきて芸者を呼ぶものでございますよ、そのお客が芸者屋へ入り込むというのは、野暮の骨頂、それをあなたはときどきお出でなすって、やれこんな帯がはやるの、こんななにがはや

るのと持ってきて下すっても、あなたから頂いたものは、なに一品でも着もしなければ、締めもしないから、惜しかったらいつでも取りにきておくんなさい、ありがたいことにはわたしも夏冬の物は質の上げ下ろしをしないで、どうにかこうにかちゃんと箪笥にしまってあるおとわですから。……ね、わたしはあなたが嫌いなんですから、好かないあなたにこういうものが欲しいから、こしらえて頂戴とただの一度でもいったことがありますか……」

と散々な皮肉。三河屋喜蔵いよいよ器量の悪い話になったので、間に入って丹七はただおどおどするばかり、一座も自然しらけるというありさま。

なんと思ったか喜蔵、前にあった盃洗、薄手の結構なものでございます、それを座敷の真ん中にザブッとあけて、

喜「一杯酌をしねえ」

と「仕方がありませんやねえ、お客さまだから酌をしろとおっしゃられると厭ともいわれません、お酌だけならしましょうよ」

喜「黙って、酌すりゃいいんだ」

一杯ついだ酒をぐーっと一口に飲みほし、

喜「おーもう一杯つぎねえ」

またなみなみとつがせて、

喜「えー丹波屋の若旦那、三河屋喜蔵がおさし申す、一つお受けなすって下さい」

丹「そんなことをおっしゃっても、私が平常お酒を頂かないのをあなたもご存じじゃありませんか、そんな大きな物へ一杯、どうしていただけるものじゃございません、迷惑でございますか

ら、どうぞご無用に願います」

喜「そんなことをいわねえで、一つ飲んでおくんなさいな、女のさした盃なら、にっこり笑ってお飲みなさろうが、白髪交じりの禿頭三河屋喜蔵のさした盃じゃ、受けられませんかえ」

丹「なんとおっしゃっても、そんな大きな器でいただけやいたしません、どうぞご免なすって下さい、困りますから」

喜「そんなことをいわずに飲んで下さい」

丹「どうかご無用に願います」

困り抜いている丹七をみ

て、おとわ、

と「若旦那、あなたいいじゃありませんか、お受け遊ばせ、三河屋さんが無理に飲めとおっしゃる盃、お受け遊ばせよ、こわいことはありません。こんな内気な若旦那をいじめるという三河屋さんは、なんという性悪だろう、お受け遊ばせよ若旦那、わたしがお助けします」

丹「けれども私はこんな大きな器ではいただけやしません」

と「じゃ、三河屋さん、丹七さんに代わってわたしがいただきましょう」

とその盃洗をひょいと取

り上げたとみると、息をもつがずにぐーっと飲みほしたが、好きで飲むのではない、いわゆる勤め酒というやつで、飲み干した例の盃洗。

と「若旦那、あなたのご名代にいただいたせいか、たいそうお酒の美味しいこと。さあ三河屋さんご返盃、お受けなさいよ」

と少しおとわも癪にさわっているから、ぼーんとほうった盃洗、三河屋喜蔵がぼんやりして、てれ隠しにくわえていた煙管の雁首へ当たって、ぱっちりわれて飛んだかけらが喜蔵の額にあたりました、青額なればとにかく、禿げてるところへ当たったから、流れるというほどでもありませんが、少しばかり血がにじみました。

喜「あー痛え痛え、痛え痛え、ああ痛え、ひどいことをする」

と手の平で二つ三つぐいぐいとおした、手の平にいささか血がついている。これを見るとかっとして、

喜「おお痛え、丹七さん、三河屋喜蔵の額へ傷をつけましたね、いやさ男の面へ傷をつけましたね……」

丹「飛んだことでございます。私は知りゃしません、おとわさんが……」

と「ええわたしですよ。いくら三河屋さんがお酒を召し上がっても男と女の見さかいはつくでしょう、その盃洗を投げたのはおとわですよ」

喜「いや三河屋喜蔵は男だ、おとわという芸者を相手にはしねえ、若旦那の代わりに頂いた盃といって投げた盃洗だ、丹七さんよく男の面に傷をつけなすったね」

丹「いえそれははなはだ迷惑」喜「いえ丹七さんに眉間をわられた、丹波屋の若旦那が三河屋喜

蔵の額をわった」

とぱっと立ち上がって、とんとんと梯子段を蹴たて、みんなのとめるのもきかず、足袋はだしで、眉間をおさえて飛びだしました。

先を越して丹七を勘当

こちらは石町一丁目の丹波屋、主人は病気、せがれが名代に屋敷へでまして、店を預かっていますのは番頭の彦兵衛、

喜「御免なさい」

彦「いやこれはこれはどなたかと存じましたら三河屋さん、さあどうぞお上がりを、……おやどうなすった額のお怪我は……」

喜「えーこの怪我のことについてちょっと彦兵衛さんにまでお話をいたしておきます」彦「なんでございますか」

喜「じつは今日お屋敷の加藤の旦那を万八へお招きいたしまして、おもてなしをいたし、旦那は船でお帰りになりました後で、座敷に引き返してみると、あろうことかあるまいことか、若旦那がおとわという芸者と小座敷に隠れて甘い話、罪のようだが立ち聞きするととうから深い仲らしいようす、このおとわという芸者は加藤の旦那がたいそうのご執心で、かねて私にどうかなるま

いかなどと話もございました、私も商売がら、お留守居方のご機嫌を損じてはならないと思いますから、まあどうかおとりもちをしたいという考え。ところがご当家の若旦那はそうでない、決して思召しに従ってはいけない、おまえに操があるなら、たとえ家は勘当になってもきっと夫婦になるからとこういう話。それから私が中へ入りまして、さいぜんからの話をみんな立ち聞きをしました。おまえさんがたも水の出ばな、世間にいくらもありがちだが、もしお留守居の旦那方に憎まれては、お互い様に御用が勤まりませんから辛くもございましょうが、ここは一遍思い切って下さい、そうしてどうかお互いに商売大事としようじゃありませんか、どうぞ今の約束は反古にして下さいと、ことをわけて申したのでございます」彦「へえなるほど」

喜「すると若旦那がたいそうご立腹なすって、生意気なことをいうな、三河屋と丹波屋とは身上が違う、おまえたちに意見をされるような丹七ではないと、酔ってもいなすったでしょうが、盃洗を私にぶっつけまして、このとおり眉間へ傷をつけました。なんとまあもってのほかの振る舞いではございませんか、なにぶんいきりたっておりますから、よんどころなく丹波屋さんは丹波屋さん、蚊の涙ほどの身上ではありますが、三河屋は別にしていただきましょう、けれどもご当家の旦那さまはご大病でおいでなさるから、お耳に入れてはお体に障りましょうから、大旦那さまには内々に願います」

彦「それはどうも飛んだことでございます、しかしどうかもう少々お静かに願います、大旦那は中の間に寝ていらっしゃいますから、すぐにお耳にはいります、どうぞ静かに……」

喜「えー大旦那にご内々でお耳に入れないように……」彦「どうかお静かに、お静かに」

彦兵衛は気が気ではありません。

喜「それだけのことをお話し申せば、別に用はないからごめんをこうむりましょう」

と一言のこして喜蔵はそのままぷいと飛び出しました。さあどうしたものかと彦兵衛が胸を痛めておりますところへ、当惑したようすで立ち帰った丹七、直ぐに彦兵衛が飛びだして小声で、

彦「いまじつは三河屋さんが来なすって、こうこうしかじか……あなたなんということをなすったんでございます、ふだんにもお似合いなさらぬ、三河屋さんの頭へ盃洗をおぶっつけなすったというじゃございませんか」

丹「それがまるで嘘なんで。じつは斯々云々というわけ。あとでおとわからだんだん話をきいてみたら、三河屋さんという人は腹の黒い人でおとわを自分の持ち物にして、加藤の旦那にとりもち、やがて自分が取り入ろうという寸法なんだ、あんな人じゃあないと思っていた」

彦「ああさようでございますか、いやおっしゃられるとそうでございましょう。お父さんへ内々といいながらあんな大きな声でいうところなんぞなるほど思い当たりましたな。それじゃあ三河屋さんは芝のお屋敷へいって加藤佐太夫さまになにか焚きつけやあしないかと思われます。ことによるとお留守居の旦那方に憎まれて、飛んだことにならねばよいが……悪いやつが中へ入りましたなあ」

中の間に重き枕についておりました主人の丹右衛門、

丹右「彦兵衛、彦兵衛」彦「はい、はいはい」

丹右「丹七が帰った様子だが、ちょっとこれへ」

彦「はいただ今……若旦那入らっしゃいまし」

丹「おとっさんがご立腹だろう」彦「ご立腹だってあなたがわるいんじゃあないんですから、よ

くお話をなさいまし」

こわごわ丹七、彦兵衛の後について中の間へ参りました。丹七は手をついて、

丹「おとっさんただ今……」

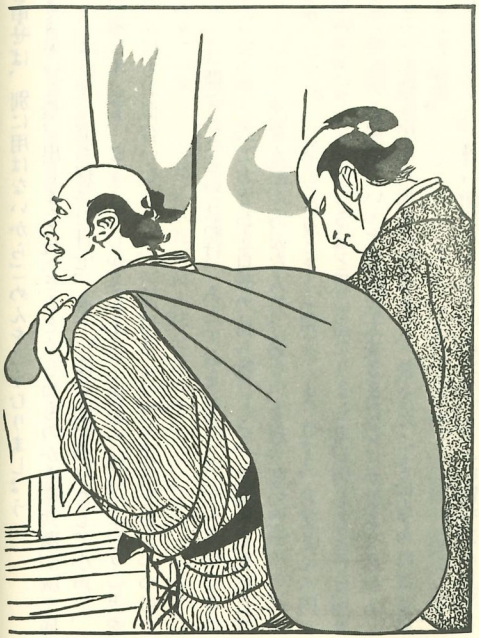
丹右「少しいうことがある、丹七、もそっと前へ……改めて勘当するから、でておいで」

丹「はい」丹右「勘当したからでておいで」

丹「私は勘当になります覚えはございません」

彦「大旦那、それはあなたご無理でございましょう、始終のことをお聞きなく、若旦那をご勘当なさるというのは……」

丹右「いえ彦兵衛おまえはとやかくおいいでない、親が勘当するのだ、どうももってのほかのことで。親父が病気で、名代にお屋敷の御用を承っ



ていながら、旦那さまのご執心の女と淫ら事をして御用の差し支えを生ずるような、不心得のせがれは、当家の相続人にはさせられません。たったいま勘当したからさっさとでていけ」

妻「あなたそうおっしゃるけれども、ひととおり丹七のいうこともきいておやんなさいまし」

丹右「なにもおまえがとやかくいうには及ばない、彦兵衛、親孝行でご褒美を頂いて八百八町の自身番へ名前を書き上げられたせがれ丹七、年老いてほかに子のない一粒種、その親孝行のせがれを勘当するのだから、なんにもいいなさるな、とりなすおまえたちより、勘当する私の了簡を察してくれ」

彦「へえ」

丹右「婆さん泣きなさんな、こんな不心得のせがれに身代をゆずったら、表の戸に売家の札をはられ、ご先祖様へたいしてすまない。当分小遣いに困るだろう、紙入れに金を二十五両入れてやるには及ばんから余計なことをしなさんな。彦兵衛横山町の長左衛門のところへ、伝助に夜具を持たせて送らせて、せがれを預けるなどということをするにも及ばない。さあさあ早くおいだしてやんなさい」

母親は前に泣きふします。丹七も涙にくれる。中へ立ちまして彦兵衛、

彦「若旦那、こっちへいらっしゃいまし」

次の座敷へたって、

丹「彦兵衛、私は勘当されるわけがない」

彦「まあまあよろしゅうございます、おっかさんもこっちへいらっしゃいまし、大旦那には深いお考えがあって、ご勘当なすったのでございましょう。とにかく紙入れへお小遣いをいれなさいまし。若旦那、横山町の長左衛門のところへ入らっしゃい、晩に私がまいりますから。なにこれも当座のことでございますから、さまでご心配には及びません。婆や、あの若旦那の夜具蒲団とお袴をすっかり包んで伝助に、……おい伝助」伝「ひゃあ」

彦「この夜具蒲団をしょって、横山町の頭のところへ若旦那のお供をしていって、どうぞ若旦那をお預かり下さい、晩に番頭さんがお話に上がりますと、こういってきなさい、もし頭がいなかったら、お内儀さんにその話をしてきな」

伝「ひゃあ、じゃあおらがこの野郎の供をしていくかな」彦「なんだこの野郎とは」

伝「この野郎に違えあるめえ、丹波屋丹右衛門さんの小旦那ならご主人さまだが、いまおらがきいてれば勘当になった、してみれば赤の他人だ、男のことを野郎というにさしつけえなかろう」

彦「理屈をいうな。若旦那、こういうたちの男ですから、どうかお気にも障りましょうがおゆるしなさいまし」

しおしおとして丹七、

丹「じゃあ彦兵衛、おやじさんのご病気を気をつけておくれ。おっかさん、私の不行き届きで飛んだご心配をかけまして相すみません。またあまりご心配下さるとお体に障りますから、私のことはご懸念なく、おやじさんのご介抱を願います」

母「おまえまあ生れてついぞ一遍よその家へ寝たことのない体、よく体をたいせつにおしよ」

丹「ありがとう存じます」

伝「さあさあ愚図愚図いってねえで、いったらよかっぺえ」

丹「いまいかあね」

裏口からぼんやり丹七がでる、夜具蒲団を背負って伝助が供をいたしまして、横山町二丁目、鳶の組頭、長左衛門方へまいります。

内儀さんをおまつといって、もとは柳橋で鳴らした芸者で、当時は頭の世話女房、仇っぽい意気な年増でございます。

なんだいその悪口三昧！

まつ「おや若旦那入らっしゃいまし、さあどうぞこちらへ……あらまあ伝助さん、大きな包みをしょっておいでなすって……」伝「姐御、頭あいるかね」ま「今日はね、出役でうちはいないが、なんですえまあ……」伝「ほかのことでもねえけんど、この野郎勘当になっただ」

ま「おやまあ、若旦那が、なにかの間違いでしょう、親孝行でお町奉行からのご褒美をいただいたくらいの若旦那が、なんで勘当なんぞになるわけがない、伝助さん冗談じゃあないよ、寝呆けたんだろう」

伝「この年をして真っ昼間寝ぼけるばかがあるか、こんなときにおどけはいわねえもんだ。なに大旦那がご大病で、ご名代でお屋敷に出張っているうちに、どうだろうかまあ、柳橋のおとわちゅうあまっ子と淫らあして、それがために大旦那がえらくご立腹で勘当だ」

ま「あらまあ若旦那、いつまでもお坊っちゃんだと思っていましたら、まあそうでございますか、いえね、わたしが柳橋にでていた時分には、おとわちゃんと姉妹同様につきあってね、親戚もなにもないのでわたしのような者でも、姐さん姐さんといって、本当にさっぱりしたいい妓ですよ、あのくらいな芸者とあなたいい仲になれば、ご苦労なさるのは当然、一遍くらいのご勘当はしかたがありませんよ。ねえ伝助さん」

伝「姐御、つまんねえことこくでねえ。なんでもこの野郎勘当だからね、構あねえから朝早く起こして水うくませるがえいし、米もとがせるがえいだ、みせしめだから」

ま「伝助さんなんだって、先っきから黙ってきいてれば、この野郎野郎てえのは若旦那のことをおいいかえ」伝「そうだよ」ま「おふざけでないよ、いくらご勘当になってもご主人はご主人だよ」

伝「駄目だ、勘当になったら赤の他人だ、野郎に違えねえ」

ま「なんだい、この権助め、黙って聞いていればなにをいってやがる、大抵にしやがれ、かりそめにもご主人さまのことを野郎というやつがあるかい、百姓め、芋っ掘り、凸凹島からでてきやがって……」

伝「あれ、おらあ上総国望陀郡久留里在ちゅうところだ、おらあ芋をほることはあるけんど、凸凹島ちゅうところの者でねえ」ま「なにをいってやがるわからずや、畜生。口惜しいねえ、だれか家の若い者がいれば赤い頭巾でもかぶせてやるんだけれど……」

伝「巾着っ切りじゃあるめえし、赤え頭巾なんぞかぶされてたまるもんけえ」

丹「お内儀さん、とんだ迷惑だがお頼み申します、お気の毒だが、当分おいてもらわなければならない仕儀になった」

ま「いえもうご安心遊ばせ、確かにお預かり申します、何かこれにはわけのあることでございましょうから、うちが帰ってまいりましたらよく話をいたします」伝「姐御、番頭さんが晩にきて、話をするから、とにかくこの野郎あずかっといてくれとそういった」

ま「愚図愚図いわないで早く帰りゃあがれ」

丹「伝助、大きにご苦労だった、これは少しばかりだが、煙草のおあしだよ、大きな物をしょ

わして供をさせて気の毒だったの」

と紙に包んでお金を二分。

伝「これはなんだね、おらに煙草の銭だって、ばかなことをいわねえもんだ、それだからおめえらあ了簡違えだ。おらあ元日から大晦日まで毎日暗えうちにおきて飯を炊いて給金いくらだか知らねえことあるめえ、また石町一丁目から横山町まで何町ある、おれがこの包み一つしょってきたって、二分ちゅう大え金をくれる、そういう了簡違えだから勘当されるだ。おらあ貰わねえ」

ま「大抵にしやがれこん畜生、本当にまあ若旦那がお優しくおっしゃるもんだから、つけ上がりやあがってしようのないやつだ。鈎でもあったらぶちこんでやりたいね。さあ若旦那、いまお煙草盆をもってまいりますから、二階へおあがり遊ばせ。構わずにお早く入らっしゃい」

と丹七を二階へあげ、

ま「態あみろ百姓、芋掘り、凸凹」

伝「なんだねそれやあ……姐御、ちょっとここへ顔貸してくんろ」ま「うるさいよ」

伝「そういわねえで顔貸してくんろ、あの若旦那が今日勘当になったなあなにも悪いことはねえだよ、おらが話残らず聞いたけんど、あの三河屋の喜蔵ちゅう人が腹黒でのう、大旦那に深え考えがあって、ご勘当になったんで、若旦那に悪いこと芥子ほども無え、お気の毒のもんだ。けんど、おらがまあ毒口をきくのも心あってのことだ、もったいねえ、ご主人さまから二分というお金を下さる、それをお返し申すちゅうは家来の道でねえけんども、実はいま家で二十五両紙入れへ入れてもらってきたのを知ってるだ、あるときの金はなんでもねえが二十五両で、三月たって勘当がとけるか、半年でとけるかわからねえ、そのうちから二分の金をおれがもらっちゃあどうもすまねえからけえしただよ。大旦那のおっしゃるには、親孝行でご褒美をいたでえた一人息子、勘当される者より勘当するおらがの了簡を考えてくれといっただ、それ聞いておらあ障子の陰で泣いてただ。大事の一人息子だから、朝もゆっくりねかしておいて風邪ひかねえようにして下っせえ。また下帯なんちゅうものは人に頼んで洗ってもらえねえもんだから、おらが洗えにくるだからとっといて下っせえ、大切にお頼う申すだよ、おめえらのところじゃあ荒えことをする人たちばかりで、おまんまも定めしこわんかんべえが、楽うしている若旦那にゃあ、硬え飯毒だからの、厄介ついでにやわらけえおまんまを炊えてやってくらっせい」

飯炊きだけにご飯の注意まで行きとどく、女は優しいもので、おまつはほろりと涙をこぼして、

ま「伝助さん、おまえがそういう了簡とは知らないから、口惜しくて口惜しくてしようがなかった、よくうちが帰ってきたら話しますよ、方々、お店向きを歩くが、丹波屋の伝助さんくらい感心な人はない、見上げた人だと話をするんだよ、決して若旦那のことは心配しないでもいいから、番頭さんによろしく申しておくれ」伝「どうぞお願え申しやす」

と伝助もしおしおとして立ち帰りました。その晩番頭の彦兵衛がきて、長左衛門にあって万事の話、生粋の江戸っ子鳶の者。

長「よろしゅうございます。わっしが確かにお預かり申しましたから、ご安心なさいまし」

と胸をたたいて引き受けました。

しかるにこちらは三河屋喜蔵、芝の薩摩様のお屋敷、お留守居役の加藤佐太夫のところへきて、

喜「ご執心のおとわは丹波屋のせがれ丹七と深い仲でございまして、それ故、旦那さまの思召しにしたがわないのでございます。また丹七がしきりに旦那さまのことを悪口いたし、まことに

怪しからぬやつでございます」

と、嘘八百並べ立てましたから加藤佐太夫真っ赤になって怒った。この人は別に悪人というではないが、恋の遺恨は恐ろしいもので、三河屋喜蔵にあおられて丹波屋丹七を憎むことひとかたならず、その隙につけ入って三河屋喜蔵、

喜「必ず私が二人の仲をさいて旦那さまのお心にしたがうよう取りはからいます、その代わり思召しどおり叶いましたときは、どうか三河屋一手をもってお出入りのことを願います」

佐「それはきっと計らってやる、丹波屋のせがれめ不らちなやつだ」

加藤佐太夫立腹のあまり、たちまち一通の書面をしたためて丹波屋方へ送りました。その文面は、

一、その方せがれ丹七、お屋敷へまかり出で、奥女中と猥(みだ)らがましきうわさこれあり、お館のご外聞に候あいだ、丹七儀は当分出入り差し止め申し付け候。

丹波屋丹右衛門殿

としてある。さすがは丹右衛門、こうしたこともあろうかと早くも察し、留守居役に憎まれては商売にさわると思い、先んじてせがれを勘当したのでございます。丹波屋からは番頭彦兵衛をもって、せがれ丹七儀は不行跡の者にございますれば勘当いたし、今日は路頭に迷いおりますようにございます、と届けさせました。

ところが丹七が勘当になったということを聞きました芸者のおとわ、ひとかたならず胸をいためまして、ちょうど三日目のこと、

と「今日は、姐さんいる」ま「おやおとわちゃんお上がりな、ちっともこのごろみえなかった

ねえ」

と「忙しかったもんだからご無沙汰をいたしました、ちょっと聞きたいことがあって上がったんですの」

ま「丹波屋の若旦那のことでしょう」と「そうなの、こちらにいらっしゃるんですってね」

ま「そうなのよ、いらっしゃるよ」と「ぜひちょっとお目にかかりたいんですが、姐さん会わして下さいな」

ま「いいから二階へおいでよ、一人で考えてばっかりいらっしゃるから、ご病気にでもなってはならないから……」

と「けれども姐さん、会って下さるだろうか」

ま「ちょっとおまちよ」といいながら、おまつは二階へあがり、

ま「あの若旦那、あなたにぜひお目にかかりたいという人がありますが、会ってやって下さいますか」丹「どなた」

ま「あなたのためなら命までもという、おとわちゃんがきたんですが」丹「それはおまつ、どうしたって会えないじゃないか、私は覚えのないことだが、もとはといえばおとわさんから。そのおとわさんに会ったということが、もし世間の口からおとっさんの耳へ入ったら会わしたおまえがいいわけがたつまい」

ま「なにあなた、立ったって立たなくったってそんなことはかまいません。若旦那、いいじゃありませんか。おとわちゃんおいでよ、おいでってばさあ」と「だって姐さん、若旦那に……」

とさすがにおとわも気をかねて、階段の下でうろうろしています。

ま「いいからおあがりよ」
おまつに手をとられて二階の小座敷。
ま「若旦那、会ってやって下さいよ」
とおとわを無理におし入れてばったりおまつが唐紙を立てきる。
と「若旦那、申し訳がございません」とかけよって、うつぶしたまま、後はなんともいうことができません。それからおとわは毎日ここへきては丹七の身の回りの世話をいたし、なに不自由のないようにつくしてくれます。

一難去ってまた一難

お話かわってこちらは島津家のお姫さま、近衛家へご縁組みにつきまして、お道具一切前申しあげたとおり、丹波屋、三河屋から納めずみになりましたところ、さらにまたお土産として伯耆三郎太夫安綱の名刀をお贈りになるについて、丹波屋丹右衛門自身まかりいずべきのお沙汰がありました。
丹右衛門はまだ病後の衰弱はございますが、このごろは床も離れておりますから、彦兵衛がつき添いまして、羽織袴で芝三田の島津さまお屋敷へ出でお座敷へとおりますと、伊集院筑前より、このたび姫さま近衛家へおこし入れにつき、お土産として、お贈りにあいなる伯耆三郎太夫安綱

の白鞘入れなおし、中身鋳きたて七日の間に調えよとのお沙汰。かしこまって丹右衛門お刀を拝見いたして、お請け書きをしたためてその刀をお預かりしてお屋敷を下がり、すぐに職人のほうに回し、精々急がして日限どおり調いましたから、そこで丹右衛門、手代彦兵衛を呼んで、
丹「滞りなくお刀も調いまことに安心しました、明日はお屋敷へ納めるについて、かかる名刀はわれわれ町人風情の家へ一夜でもお宿をするというはまことにもったいないお話、今晩は私がお守りをしようと思う」
と、二方を床の間にすえ、それへ例のお刀をおき、御神酒灯明を供えました。
彦兵衛これを聞いて、
彦「旦那さまお一人では定めてお退屈でございましょう、私もここでお守りをいたします」
丹「そうかえそれは話相手があってありがたい」
やがて家内一同眠りにつき、十六畳の座敷の襖のほうへ寄りまして彦兵衛、床の間の前に手あぶりを前において主人丹右衛門が座りまして、色々と座談をしておりましたが、四つ（十時）から九つ（十二時）ごろまでは大して眠くもありませんが、九つ半（一時）、八つ（二時）となりますと、ひどく眠気を催してきました。
もう八つ半（三時）という頃になりますと丹右衛門、病後の衰弱もあり、かたがた疲れましたのでわれをわすれて膝を崩してうつぶしました。そのうちに早や暁七つ（四時）となりますと、えりもとから吹きこみまする風の寒いのに目をさました丹右衛門、
丹「ああ飛んだことをした、お守りをしよう徹夜をしようといいながら、眠るともなくついうとうととした、とりたくないのは年だ、ああ寒い寒い」

といいながら手代の彦兵衛を見ると彦兵衛も両手をついて、お辞儀をしたまま眠っております。

丹「おやおや、彦兵衛も眠ってしまった、彦兵衛彦兵衛」

彦「へえ、へえへえ……おっとこれはまことに相すみません、どうも飛んだ不行儀なことをいたしました」丹「いや無理はない、暁近くなると、いっそう眠さが増してくる、疲れてつい私も眠ってしまった」

彦「私もあなたさまがうっとりうっとり遊ばすのをみてつい引きいれられるというようなことで、まことに面目次第もございません」

丹「いやお茶でも入れてのみましょう、……お寒い風がはいると思ったら障子が開いている、便所へでもいったらば、なぜ後を閉めておきなさらぬ」

彦「いえ私は便所へはまいりません」

丹「でも障子が開いてるではないか」

彦「だれかまいりましたか」

といいながら、彦兵衛縁側へでて、

彦「おお旦那さま、雨戸が一枚開いております、どろぼうでも入ったのじゃございませんか」

丹「なに雨戸が……」

というときに、早くも三方の方へ眼をつけますと、こはいかに、供えておいた刀はどこへやら。

丹「あー彦兵衛……」

と床の間へ指さしたまま後の言葉がでません。

彦「……これは大変」

と直ぐに庭へ飛びだして、どろぼうがどこから忍びいったかと調べてみると、土蔵の二戸前あるその間が黒板塀になっている、そこの開きの錠がねじ切ってあって、風にあおられ、バタリバタリと音がしている。

彦「旦那さま、これからどろぼうがはいりました」

さあ大変とすぐ自身番へ人をやりましたから、町役人がかけつける、つづいて近所の手先がかけつける、上を下への混雑、とかくするうちに夜があけました。ところへあたかも南町奉行大岡越前守手付同心中定回り木川良助という方が、伊兵衛、金蔵という二人の手先をつれまして、この前をとおりかかり、だいぶ混雑しているようだがと、自身番へ立ちよりまして、このことを聞き、

良「そうか、いってみてやろう」ということにあいなりました。

町役人が先ばしって、

役「旦那さま、いま木川の旦那がおいでになります」

昔は市中定回り同心を、町家では一口に八丁堀の旦那と通称しております。ところへ良助手先をつれて奥へとおり、

良「主人丹右衛門はその方か」丹「私にございます」良「その刀紛失した座敷はどこだ」丹「ここでございます」

と十六畳の間へ案内して、それから一部始終を細かに申しあげました。

彦兵衛があやしい

良助は座敷のうちから戸障子から鍵、忍び返しなどまでくまなく取り調べました。
良「よしよしわかった、手代彦兵衛一人後に残り、そのほかの者は一同下がれ」○「へえ」
若い衆、小僧ぞろぞろみな引きさがりまして、残ったのは彦兵衛一人。
良「彦兵衛」彦「はい」
良「前へでろ」彦「はい」
良「刀はどこへやった」
彦「へえ、なんとおっしゃいます」良「その刀はどこへやったよ」
彦「刀はこれにございましたのが紛失いたしました」良「紛失したのはどこへ持ってったというのだ」
彦「どこへもってまいりましたか、どろぼうのいたしたことで一向私存じません」良「なに」
彦「え一向存じません」
良「ばかをいえ、上役人の眼を暗まそうとしたって、こんなまぬけのことじゃあ駄目だ。外から賊の入ったようにみせるんなら、もうちっと器用なことにしておけ、ちゃんと締まりのある縁側の雨戸をあけようというのは、鑿か小刀か相当の切れ物がなくって破れるわけがねえ、敷居も

鴨居もどこも一カ所として傷のついてるところはないじゃあねえか。またこの錠のねじ切ったのもそうだ、外から賊が入ったのならば、先へ黒板塀の上の忍び返しをこわしてはいらなけりゃならねえ、でていくときに、錠をねじきったものとみせるつもりだろうが、忍び返しをこわさずにはいれたら、でていく時にも錠をねじ切って木戸を開ける必要はねえ、こんな間抜けなことをしておいて、上役人の目を暗まそうと思ってもそうはいかねえ。有り体に申しあげろ」
彦「それはどろぼうのほうでどういう手都合にいたしたか存じませんが、私は一向存じません」
良「それはうぬ一人でねえ、申し合わしたものがあるだろう、黒板塀の外に待っていた者があって、主人丹右衛門が病後のつかれで、寝たところを見すまして、そっと盗みだし、そいつに渡して、この座敷へ帰って寝たふりをしていたに違えなかろう」
彦「いえまったく主人と同じく、とろとろと眠りましたに相違ございません」
良「ばかをいえ、いまうぬの眼を見ると眠った眼じゃあねえ、そんなことじゃあ、上役人の眼を暗ませられねえぞ。有り体に申しあげろ」
今日のお役人と違って、昔の同心は調べるのが荒っぽかった。いわゆる江戸っ子のべらんめえ口調で、小気味よく取り調べる。ところが彦兵衛知らぬ存ぜぬ一点張りで実を吐かないものだから、
良「うむ痛え思いをしなけりゃいわねえんだな、……こら伊兵衛、庭へ引き下ろして、うてうて」
すると手先の伊兵衛が、
伊「へえへえどうかお慈悲を願います、お慈悲を願います」

と旦那のほうをつくろっておいて、

伊「おお彦兵衛、定回りの木川の旦那だ、一度にらんだ眼は違いっこねえ、存じません、覚えませんで、そうかといってお許しになる気遣えねえんだ、申しあげちまいねえ、おれたちは少しもうちてえことはねえが、おめえがいわなけりゃあしかたがねえ、うたなけりゃあならねえ、手数をかけねえで申しあげちまえ、えー彦兵衛」

彦「それはまことにありがとう存じますが、決して私は覚えございません、ただ今申しあげたとおり主人の家がつぶれればすぐに路頭に迷います、それを知りながら刀を盗んで主家をつぶすなどという道理がございません、よろしくおとりなしを願います、一向覚えはございません」

伊「じゃあなにか、おれたちがこんなに心配して親切にあつかってやってもどうしても知らねえというんだな」彦「存じません」

伊「おめえが知らなけりゃあよんどころねえ、おめえの体から聞くから」

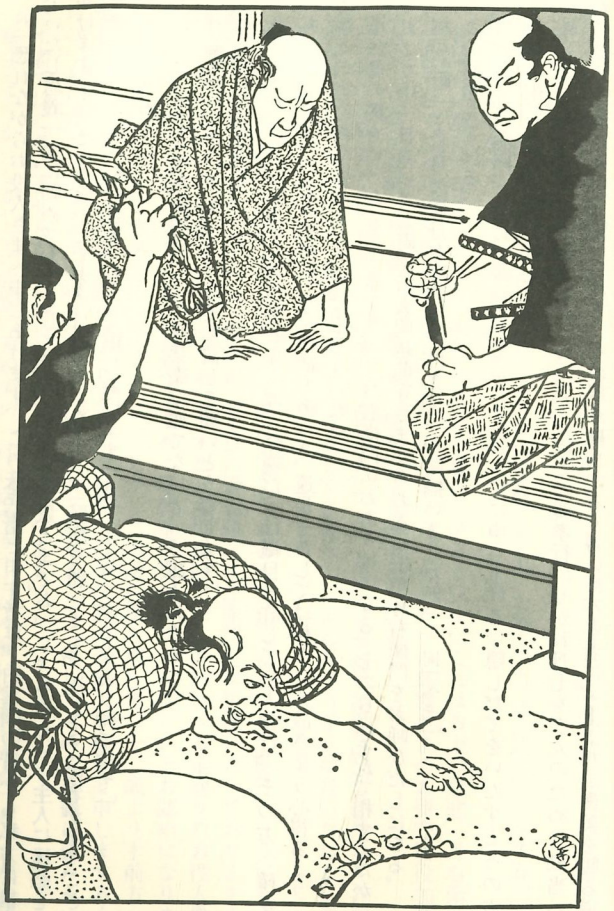
と箒尻という、太い籐の四尺ぐらいありますのを四枚糸で堅くまいてあるもので、しなってうつのに至極力がはいって、うたれる者はたまりません。これを取りあげて、

伊「きっというな」彦「それは親分困ります、どうかお慈悲を願います、まったく覚えはございませんから」良「うてうて」

ぴしーりぴしーり肩から尻へかけまして、背中へ綾をとったように打ちたたく。

彦「あいたたた、あいたた」伊「申しあげろ申しあげろ」

とうちたたく。今日から見れば残酷なもの。さあ彦兵衛七転八倒の苦しみ、このありさまを縁側に控えてみております主人の丹右衛門ぶるぶる震えだし、



丹「恐れながらお役人さまへ申しあげます、この彦兵衛と申す者は、白雲頭の昔から私方に奉公いたし忠義一徹に勤めておりまして世間さまでも白鼠とまでおっしゃるくらい、主人に迷惑をかけますようなことをいたす者ではございません。ご賢察を願います。決してこの者が賊でございませんことは、私が証人となって申しあげます」良「うーむ、困るなあ、待て待て」

手先をとめまして、

良「じゃあ主人丹右衛門が、この彦兵衛は賊でないという証人になるな」

丹「御意にございます、なにとぞお許しを願いとう存じます」

そこで木川良助が、

良「そうか、それほど見こみがあるならば、今晩だけは縄目を許して主人預け、その方へ確かにあずけておく、いずれ奉行からご沙汰もあろう、遠足をさしては相ならん故さよう心得るよう、万事その方にあずけるから心づけるようにいたせ」

彦兵衛の縄をいったんおとき下すって丹右衛門におあずけになる。その日はそれで相すんだが、それより中一日おいてお町奉行大岡越前守さまからお差し紙で丹右衛門をお呼びだしになる。

越「石町一丁目丹波屋丹右衛門ほか付きそい一同揃いましたか」一同「へえ」

と一同頭を下げる。

越「これ丹右衛門、奉行が尋ねること少しも包まずに申し上げろ、隠しだてをいたすとその方のために相ならぬぞ」丹「へえー」

越「上より青縉五貫文の褒美をいただいたるほどの親孝行のせがれ丹七をなんのために勘当いたした、子を見ること親にしかず、その親が勘当するくらいの不孝者に、上よりご褒美を賜る道理はない、なにが故の勘当じゃ」丹「はなはだ恐れ入りましたが、この儀は子細ございまして申しあげかねます、ご容赦のほど願いまする」

越「それでは吟味に差しつかえる、もっとも聴き取りし上、次第によっては忘れとらせる、つまびらかに申せ」

昔はいい都合でございました。聴いたことも忘れてやるという、これはお上の慈悲。丹右衛門もかようおっしゃられると申しあげない訳になりません。そこでかの薩摩さまのお留守居役加藤佐太夫と三河屋喜蔵、おとわと丹七との関係をつぶさに申しあげる。

丹「右の次第で一人のせがれ、不憫とは存じましたが、お出入り屋敷お留守居の旦那方にお憎しみをこうむりましては、御用向きを承ることもできません、よんどころなく勘当いたしましてございます」

越「うむその勘当の後せがれ丹七はいずれにおるや、その方は知らぬか」丹「御意にございます、風の便りにきき及びましたには、横山町二丁目の鳶組頭、長左衛門方に居候いたしておりまする由にございます。その儀について申しあげますが、木川良助さまとおっしゃる定回りのお役人衆が刀紛失の際ご出張の上だんだんお調べ下され、手代彦兵衛と申す者を怪しいとお認めになりまして、庭先においてご吟味にあいなりました。しかしこの彦兵衛と申す者は十二歳より手前方へ奉公いたし、まことに忠義に勤めておりまして、世間では丹波屋の白鼠大黒柱など申しまするくらい、それゆえ木川さまがお調べのおり、私が証人となりまして、決してこの彦兵衛は盗みをいたす者ではございませんと、お許しを願いましてございます」

越「さようか、しかしこの安綱の刀紛失の一件は薩摩家へもはや届けいたしたか」丹「まだお届

けはいたしません」

越「然らばさっそくこの由一応届けをいたしておくよう、今日はたちませえ」

そこで丹右衛門をお下げになり、翌朝木川良助をお呼びになり、

越「丹波屋丹右衛門盗難の一条、その方手代彦兵衛と申する者を、怪しいと認めたる趣である」良「御意にございます」

越「さようか、しかし予の考えと相違いたす、これにせがれ丹七と申す者、罪なくして勘当になり、その父の所為を恨んで、家に迷惑をかけんため、案内詳しき座敷へ忍び入って、盗みたるものに相違あるまい」

良「へえ、せっかくにございますが、この丹七と申す者は、いたって孝行者にてお上より青緡五貫文のご褒美をいただきましたるくらいの温順の者、勘当になりましたについては、なにか深き子細がございますように聞き及びました。まさかに彼は実父を恨み、その刀を盗みだして迷惑をかけるものとは存ぜられません」

越「いや確かにそれと認める。横山町二丁目の鳶頭長左衛門方に食客いたしておる由さっそく召し捕れ」

と仰せられておいて、首をひねりました。

木川良助お奉行の申しつけだからよんどころない、すぐに伊兵衛、金蔵の二人の手先のほかに男を一人つれ、横山町二丁目の長左衛門方へ出張いたし、

良「長左衛門はおるか」ま「やどはほかに建て前がございまして、まいっております、なにか御用でございますなら呼びに遣わしましょうか」

良「いや別に長左衛門に用はない、石町一丁目の丹波屋のせがれ丹七という者を当家にあずかっ

ておるか」ま「さようでございまして、しばらくおあずかり申しております」良「今おるか」ま「二階に本ばかり読んでいらっしゃいます、おとなしい若旦那さまで……」良「よんでくれ」ま「はいかしこまりました、若旦那、若旦那」丹「はい、なんです」

ま「木川の旦那がおいでになりましてちょっと会いたいとおっしゃいます」丹「そうですかただ今……」

二階から降りてまいりました丹七、いやしからぬようすにて、

丹「入らっしゃいまし、私が丹七でございますが、なにか御用でございますか」

良「それ召し捕れ」

いきなり手先がばらばらと寄って縄をかけました。

おどろいたのは長左衛門の女房、

ま「あれ旦那、なにをなさいます、丹波屋の旦那からおあずかり申している大事の若旦那じゃあございませんか、ご冗談をなすっちゃいけませんよ」

良「控えろ控えろ、上役人に冗談があるか」

ま「だってあなたいけませんよ、ちょっと旦那、あら仕様がありませんねえ」

というちに引き立っていってしまいました。

ま「まあなんてえことだろう、飛んでもない……金太いるかえ、おい金太」

黄色い声で内儀さんに呼ばれて、なにか働いておりました若い者の金太、

金「へえなんです」ま「ちょっと頭をよんできておくれ、武蔵屋さんの建て前にいってるから……、大変のことができたから、すぐ帰ってきておくんなさいって……」金「へえ」ま「急いで

いっといでよ」金「へえ」
と金太が飛んできたのは横山町一丁目の武蔵屋さんというお店。いま立派な土蔵の建て前、組合の若い衆が大ぜいよって、木遣り音頭で棟上げをいたし、長左衛門手ぬぐいを鷲づかみにして、一同へ指図をいたしているところへ金太が飛んできて、
金「頭、大変です大変です」
長左衛門拳を上げて突然金太の横っ面をぽかりっ。
金「痛え」長「なにをいやあがるんだべらぼうめえ、建て前でお目でてえ

とこへきやがって大変だ大変だというやつがあるか、どじの野郎じゃあねえか」
金「姐さんが大変だといって来いったんで」
長「姐さんがいったって、大きな声をするやつがあるか、どうしたんだ」
金「今あのお店の若旦那をね」長「うむ、若旦那がどうした」金「定回りの木川の旦那がきて縛ってつれてっちまいやした」長「なに、それあ大変だ」金「それ御覧なさい、大変でしょう……」
長「そいつあ打っちゃっておけねえ」
と長左衛門はあとを頼んで、そのまま宙を飛ぶように家へ帰ってまいりまして、
長「おまつ、若旦那がど、どうしたって」
そこで、おまつはありのままを長左衛門に話す。
長「うーむそうか、羽織をだしねえ、ちょっといってくる」

印半天の上へ羽織を引っかけ、すぐに数寄屋橋内の南町奉行所へまいりました。するとちょうど、良助が今丹七を召し捕ってきて、留置所へおいて、お出掛けになろうというところ。

長「ええ、木川の旦那、はなはだ恐れ入りますが、御用のところをお足をお留め申してはすみませんがちょっと伺います」良「なんだ」

長「ええただ今私がよそへ建て前にまいっておりました留守、旦那さまがご出役になりまして、丹波屋のせがれ丹七をお召し捕りになりましたそうでどういうなんでございますか、ちょっと伺いとう存じます」

良「長左衛門、懇意は懇意、役は役、どういうわけだとお前に聞かれても、話はできねえじゃあねえか、そいつあ困るよ」長「ではございましょうが、どうか一つおっしゃって下さい、長左衛門のお願いでございます」

良「困るなあ、じゃあちょっと話をしようか、こういうわけだ、あの丹波屋の刀紛失の一件だ」

長「へえ」良「お前もあの時い合わしたろう、どうもおれは手代彦兵衛という者が怪しいとみている、ところがお奉行の思召しがそうでねえらしい、なんでもせがれ丹七が罪なくして勘当になったものだから、親のしかたを恨んで、遺恨ばらしにしたに違いねえと、こうおっしゃる」良「へえ」

良「さっそく召し捕れというご下知で、良助がなんといってもお用いにならねえで、いまおまえの家へいって召し捕ってきたんだ、夕方入牢だろう」

長「へえ、そのことはせっかくでございますけれども……」

良「だからさ、役は別だというんだ」

そのまま良助は袖を払ってお出かけになってしまう。さあ長左衛門目色をかえまして、どんどん

石町一丁目丹波屋へ飛んできて、

長「さて旦那え、あなたさまはご存じございますまいが、……若旦那を私どもへおあずかり申しておりましたところ、たったいま定回りの木川の旦那がおいでになりましてお召し捕り、斯様斯様でございます」

と良助から聞いたことを残らず話しました。

丹右衛門はただ茫然としてあきれるばかり、聞いておりましたお内儀さんは、あまりのおどろきにうーんといって癪をおこし、それ鍼医をよんでこい、医者を迎えろと大さわぎ。親類へ人を飛ばし、町役人もやってくる、出入りの者が見舞いにくる、上を下への混雑。

こういう場合にはいくら親類が集まって相談しても、小田原評定でなんにもならない。上役人のすることは、どうにもしかたがない、ことに同心の見こみで召し捕ったわけではなく、大岡越前守さまのご下知であってみると、なおさら手がつけられない、それを勝手元に聞いておりました下男の伝助、声をはなって泣きだし、

伝「ああかわいそうに小旦那が、これから温気に向かうに牢の中にいれられてたまるけえ、地獄の一丁目といって二丁目の無えところだ、町奉行の大岡越前守ちゅう役人はばかだ、人を見ることを知んねえ、駄目なやつだ」

と泣きながら座敷へはいだしてきました。

伝助、越前守をへこます

伝「旦那さま、ご相談中でござえますが、ご親類方相応のお考えもございましょうが、家来は家来だけにまたおらの考えもござえます。家主さん願書を書えてくんろ、それをもっておらが奉行所へ願ってでて、どうしても小旦那をつれて帰らなければなんねえから、さあ願書を書えてくれ、書けちえば」

噛みつくようなありさま。家主もおどろいて、

家「伝助さんそいつあ困るよ、わしが願書を書いたところでどうなるものじゃあねえ」

伝「どうなるものでねえとはなんのことだ、ご主人さまが無実の罪で牢の内へ入れられてるを、家来の身で黙ってられるか、だからおらが願ってでるで願書を書けちゅうに理屈がいるけえ、書けちえば書かねえかこの野郎」

家「書くよ書くよ、書くから静かにしてくれ」

伝「おらがいうとおり書け」

家主はしかたがございません、昔は願書は美濃紙に限っておりました。墨をすり筆をとりまして、

家「なんと書く」伝「一、おらが小旦那丹七様どろぼうでねえ」家「おかしな願書だな」伝「いいからほかに文句は入らねえ、ええか、……それを召し捕ったのは役人の目違えだ、……書けちえば」

家「そんなことが書けるわけのものでねえ」

伝「ええから書けちえば、すぐに縄をといて帰してくんろ、さもなくば伝助合点ならねえと」

家「そんなばかばかしい願書は書けねえ」

伝「書けなければ書くな、書いたものもってかねえでも、しゃべる口があるから、おらが大岡越前にじかに掛け合うから、願書なんちゅうものいらねえ、……旦那さまご心配遊ばすな、おめえさまま患ってはなんねえ、いくら上役人だって、こっちに悪いことがなければ怖えことねえどうしても小旦那さまつれて帰るから心配なさるな、なんの」

と伝助勇気ぼつぼつとして、帯締めなおして藁草履を突っかけ、勝手元からかけだしました。始終の様子をみておりました丹右衛門、下を向いてほろほろ涙をこぼし、

丹「なんにも知らず、ただせがれを助けたいという真心、あの勢いでお奉行所へ暴れこんで、どんなことをしない限りもない、そうするとあれまでが縛られる、なんにも知らない質朴のやつ、早くいって留めろ留めろ」

小僧に若い衆があとからおっかけ、石町一丁目から堀端の方へどんどん伝助がかけていくのを、おっかけて捕まえようとすると、

伝「この野郎ども、小旦那さまが無実の罪で、この温気に向かって牢へ入れられてたまるか、それでお奉行所へ掛け合いにいくに待てちゅうことがあるか、そばへきてみろ、はり倒すぞこの野郎」

骨太の伝助、げんこつを振りあげて、寄らばうたんという意気込み。若い衆、小僧おどろいて、少しくひるんでおりますうちに、どんどん呉服橋をはいりまして、数寄屋橋内の奉行所の門前へきて、

伝「まだお奉行ちゅう人はとおらねえか、だれか知らねえかね、大岡越前ちゅう人はまだとおらねえかね」△「お奉行さまはもう直きにご下城だろうよ」伝「そうかね、ありがてえ」

まごまごしているうちに、例刻のご下城。

○「ホーホーホーホー」

五百石のお旗本、もっとも町奉行勤役中は、役高ととなえて三千石下さる、そして町奉行は市中往来のときは、一万石の格式がございます。

そのお乗り物をみるやいなや、伝助一生懸命われ鐘のような声をあげて、

伝「待ってくんろ、天下の役人に目違えがあってすむめえ、石町一丁目丹波屋丹右衛門の飯炊き伝助ちゅうものだ、掛け合いがあるだから待ってくんろ」

侍「控えろ控えろ無礼者、差しこし願いはならん、願いの筋あらば順当をもって、町役人付きそいで願え」

どうとその場へ突き倒した。強情我慢の伝助なかなかもってひるみません。

伝「主人の一大事だから訴えるだ、丹波屋の伝助ちゅうものが尋ねるが、役人に目違いがあってはすむめえぞ」

お乗り物の中で越前守眼を閉じ、このたびの事件についていろいろお考えなさりながら、お下がりになってくるところへ、いま丹波屋の下男の訴え。なにか調べの種になろうと、

越「これこれ主人の一大事と申すは聞きずてにならん、例にはならんが取りあげ遣わせ」
とお乗り物からお声がかかった。
侍「神妙にしろ、お取り上げになるぞ、願書を持参いたしたか」伝「そんな物は無え」
侍「恐れながら申しあげます、願書は持参いたさんそうでございます」
越「しからばさっそく白洲へまわせ」とおっしゃって、お乗り物はそのままご門内へはいる。
お腰掛けにいた連中、往来をしていた連中おどろいて、
甲「なんだなんだなんだ、野郎縛られて首でも斬られるんじゃあねえか」
と噂をしている。伝助は腰縄になりまして直ぐにお奉行お役宅へ引きいれられる。間もなく越前守お席へつき、この伝助という者の面を御覧になると、眼に一ぱい涙をふくみ、この奉行が下知をもって大事の主人を召し捕って、罪なき丹七に苦しみを与えるを恨むというようすが、十分にあらわれ、恐れ気もなく、越前守の顔を見つめている。
忠相という方は骨相学を修めておいでなさるから、その相貌をみて、学問もなし、世間のことも知らぬ朴訥の者なれども、ただ忠義一徹の者であるということを御覧になって、
越「石町一丁目家持ち丹波屋丹右衛門召使伝助面を上げえ。ただ今往来に大声をあげ、上役人に目違いがあると申した、元来差しこし願いは取り上ぐべきではないが、その方主人の大事という一言によって、とくに調べ遣わす。なにをもって上役人に目違いがあるか申せ、どうじゃ」
伝「はい、おらが主人の丹波屋丹右衛門ちゅう人は、まことに実直の人でござえます、それがどういう巡りあわせかえれい災難つづき、薩摩さまからおあずかり申した伯耆の安綱ちゅう刀が失くなっただ、このあいだ木川良助ちゅう役人が調べただ」

同「これこれ言葉遣いを心つけえ、さような暴言をはいてはならん」
と蹲踞の同心が注意をいたします。
越「捨ておけ捨ておけ、かような下郎に言葉咎めをいたすと物が申されなくなる、疎言は忘れ遣わす、捨ておいて苦しゅうない。その安綱の刀紛失について、木川良助が調べてなんといたした」
伝「手代の彦兵衛ちゅうものがあやしいと、庭前で打ったたいて吟味しただ、ところがおらがにはどうもはっきり判らねえけれどもご主人の丹右衛門さんが彦兵衛はどろぼうするものでねえ、証人になるちゅうんで、彦兵衛を勘弁してもらっただ、ところがおめえらがそれを調べて、刀を盗んだものは勘当になったせがれ丹七に相違ねえと、木川良助にいいつけて縛って牢へ打っこんだてえことだ、やいなんで小旦那がどろぼうだ、こんなわけのわからねえことをするとはなんちゅうこった」
越「されば予の認めたところは、確かに丹七の所為として召し捕ったがなんといたした、これがなんで目違いか」
伝「それが目違えだ、なぜちゅうとその小旦那は、この前の奉行さまから偉え親孝行の者だというんで青緡五貫文の褒美を貰って江戸町中の自身番へ名前を書き上げられ、なにかあると丹波屋の小旦那を見さっせいと、道楽者に意見する手本にされるだ、それが刀を盗む道理がねえ、その刀がでねえもんなら丹波屋の家は押っつぶれるでねえか、親孝行の小旦那がそんな太えことをする道理がねえ、よく考えて見さっせえ、どろぼうはほかにあるに違えねえ」
越「いや人心のかわり易きは手の裏を返すがごときもの、ことに二十から三十という年ごろには朝夕に心がかわるもの、したがって行いもかわる道理じゃ。親孝行で青緡五貫文の褒美を賜った

丹七が何で勘当をうけたか、親の鑑識に叶わぬ不孝の罪があればこそ、勘当にもなったものであろう。世の中には昨日まで人を殺し、財を奪うがごとき悪人でも、己が良心に責められて改心いたし、善良の人となる者も沢山ある。また善人と賞めそやされた者でも、ふとした心の迷いからたちまち悪人となる例も少なくない、その孝行者の丹七がなんで勘当になった」

伝「それはおめえらが知ったことでねえ、なにも不孝したわけでねえ、別に親御さまの思召しに逆らったわけでもねえ、ええ息子どんだ、そこにゃまた人さまに話のできねえわけもあるんで、大旦那さまも涙あこぼして勘当されたでがす」

越「いかなる深い事情あるにもせよ、丹右衛門にはただ一人のせがれ、それを勘当するは、定めて丹右衛門も苦痛であったに相違ない、その苦痛を親にあたえる不孝者、己の非を顧みず、勘当されたる実父を恨んで、迷惑をかけんと刀を盗みしものと認めた、誓って上役人に目違いはない」

伝「それが違ってるだ、なんで小旦那がどろぼうするかね、そいつをどろぼうだてえば目違えに相違ねえが」

越「それはそちがただ一人の考えである。申さば得手勝手と申すもの、しかしどうでも丹七を賊でないといいはるその方が、もし安綱の刀を盗みし本人を召し捕って、当奉行所へ引きたてまいれば、なるほどその方のいうとおり、かく申す越前忠相、目違いをもって罪なき者を召し捕り、入牢の苦しみを与えたことになるので、その目違いの申し訳には天下へ対して切腹いたす」

伝「じゃあ、おらがそのどろぼうおっ縛ってしょっぴいてきたら、やあ伝助すまねえと切腹さっしゃるか」

越「その方に対して申し訳に切腹するのでない、天下にたいして目違いの罪を詫びての切腹じゃ」伝「その口忘れるでねえだ、俺が一生懸命でどろぼうをしょっぴいてくるだから」

越「もちろん武士に二言はないわ」

ここで家主をよびだし伝助をお下げになりました。しかるにこちらは丹波屋から島津家へたいして安綱紛失の一件お届けをいたしましたから、すぐに町奉行のほうへおかけ合いになり、当家重宝安綱、町人丹波屋丹右衛門方にて紛失いたし、その盗賊はせがれ丹七にうたがいあり、町奉行にて召し捕りになりし由、当家に問注所の設けあり、当家において吟味いたすによってさっそく丹七をお引き渡しにあいなりたい。これまでは町奉行、寺社奉行、勘定奉行みな島津家の勢いに恐れまして、薩摩家関係の罪人は必ず渡してしまい、先方において調べるということになっておりましたが、今回は越前守これを承知いたしません。

越「せっかくなれどもお膝下の町人、町奉行において吟味いたすは当然、また貴家ご重宝安綱の刀、向こう百日の間に必ず吟味の上、とどこおりなくご返納申す。これは奉行越前誓ってお請け合いいたす。万一百日以内に吟味届かざる場合は申し訳として越前切腹いたしてお詫びつかまつる。丹七儀は貴家へお渡し申すことはあいならん、飽くまで町奉行において吟味いたす」

と立派に言い張る。そこで百日の間に刀の吟味届かざれば越前守切腹いたすという証文を薩摩家へ入れました。こうしておいてまた一方は木川良助に内命を下し、ある方法によって探索にかかりました。

こちら伝助は越前守と前申しあげたような約束をいたしましたから一生懸命、どうか刀の賊を探しだし、早く小旦那を牢からだしたい、日増しの暑さに定めしご難儀だろう、ああ憎い奴は大

岡越前、罪のない小旦那を牢の中で苦しめるとはなんたることだろうと、それのみ心にかけております。

するとそのころ本所原庭に縄掛け地蔵というのがありました、この地蔵さまに願をかけると、必ずどろぼうがあらわれるという話をきいた伝助、元来かような質朴な人物だけに、神仏を信ずる念が一倍深いので、毎日用をすますと本所まで参詣をいたし、帰りがけに横山町二丁目の鳶頭長左衛門のところへ立ちよりまして、なにかと丹七の身の上を案じ合っては石町の主人方へ帰る。昨今では伝助ろくに御飯も食べません。

おとわ姐さんの心意気

それをみて長左衛門の女房おまつが、

ま「おまえさんしっかりしないといけないよ、そう心配して体を痛めたらしょうがない」

長「ほんとに伝助さん、おまえ痩せたぜ、そんなに苦労したってしかたがねえ、しっかりしねえよ」

伝「ありがとうがす、日増しに暑さが強くなるが、小旦那はどうしてござらっしゃる、ちっとも早くどろぼうつかめえて奉行所へしょっぴいていきてえと、毎日地蔵さまにおまいりにいってるだが、こういうことは神様や仏様に、おすがり申すよりほかに仕様がねえだからな」

長「それやあまあ神様仏様にお願え申すもいいが、どうだね、三人よれば文珠の知恵とやら、膝とも談合というから三人でじっくり話し合いをしてみようじゃねえか」と長左衛門がいいだした。

長「幸いいまここに三人きりだれもきく者もねえ、これからお互いに油をなめた蛙じゃあねえが、腸を洗って話をしよう。こいつ怪しからねえと思うのがあったら、だれでもかまわねえいってみねえ」

伝「そうさまあ考えはねえでもねえ、刀のなくなったあくる朝、番頭の彦兵衛さんが怪しいと木川良助ちゅう役人が、岡っ引にいいつけて庭へ引きおろして吟味しただ。そのときに旦那さまがこれは手前のところの大黒柱、白鼠といわれる忠義の番頭でござえまして、決して悪事をする者ではございません、ご勘弁なすって下せえといっただ。おらもまさか彦兵衛さんにそんなばかのことがあるわけがねえと思ったが、考えてみると、あの彦兵衛ちゅう番頭が怪しいな。なんでも良助の調べたときに、彦兵衛貴様が持ちだして塀の外に待っている者があって、それに渡したろう、どうだ、申しあげろといっただが、ことによるとだれかに渡したかなと思うんだが」

長「そうか、伝助さんおれもそういえば彦兵衛じゃあねえのかとおもうことがある。その塀の外に待っていた者というのはおれの考えじゃああの三河屋喜蔵じゃあねえかとこう思うがどうだ」

伝「それだ、小旦那が勘当になったその時分から、立派な番頭だけんども、腹黒い人間ちゅうことはきいていただ、三河屋喜蔵の野郎かな」長「もともとこれは色事から起こったことで、女の手を借りて調べれば早かろうと思うが、伝助さんどうだね」

伝「さあ女ちゅうことが俺がにはすこしもわからねえ、どういう人の手をかりたらええか見当がつかねえだ」長「なあおまつ、彦兵衛と喜蔵の懐をさぐるについて、女の手を借りるというと、だれだろうな」ま「お前さん良い人があるよ」長「だれだ」

ま「伝助さん怒っちゃあいけないよ、じつは若旦那を家におかくまい申しているうちに、おとわちゃんがちょいちょい遊びにきたんだよ、私ももと柳橋でなんとかかとかいわれていた時分、おとわちゃんとは仲よしで私のような者でも姐さん姐さんとあの妓が頼りにして、親身の姉のようになんでも私に相談してくれる、私が堅気になってからも、やれお稽古帰りだ、お参詣の帰りだといって、家へよっては話をするうちに、自分の恋こがれている若旦那が、勘当になって家にきているものだから、それでまあ若旦那に会ったこともあるんだよ、家の人にも内証だけれども……」

伝「そんなことはまあ若え者同志でしかたがねえが、若旦那だって新造に惚れられてみればにくくもねえだからな」ま「けれどもあの三河屋喜蔵め、髭もじゃのげじげじみたような面をして、自分がまあ弾かれたのを口惜しがって若旦那とおとわちゃんにきずをつけようと、鳥羽絵みたいなものをかいて方々の家へほうり込んだり……」

伝「ばかなやつだね、いけご苦労な」ま「それやあまあいくらもあることなんだがね、三河屋の仕業は少しあくどいんだよ、それからおとわちゃんの人気もすっかり落ちちまってね」伝「う、ひでえもんだね」ま「で、あの人もおっかさんが生さない仲なんで、なんのかのと面倒くさいことがあって、とうとうかわいそうにあの妓は吉原へはいっちまったというじゃないか」

伝「なにっ吉原」

ま「ああ、江戸町の兵庫屋という家へいって源氏名を音羽滝という花魁になったんだよ、すると三河屋喜蔵がね、花魁なら表向いて売り物買い物、自由にすることができると、せいこらせいこら一生懸命吉原へいくんだよ」伝「へえ……」ま「ところが、おとわちゃんにしてみれば土台きらいなやつだから、花魁になったからって、矢張りきらいだろう、散々にふりつけるんだよ、先っきもおとわちゃんから手紙がきたけれどもね、どうだろう頭とお前さんと二人で吉原へいって、おとわちゃんに会って、斯々だと話をして、いやでもあろうが三河屋をいい塩梅に綾なして、懐を探ってくれと頼んだら早く分かるだろうと思うが、ねえおまえさん……」

長「うむこいつあおまついい考えだ、伝助さんそれがいいじゃあねえか。おまつと伝助さんと二人で吉原へいって、おとわにこういう訳だから、嫌でもあろうがと頼んだら……」伝「駄目だっちば、たのむというなあえいが、姐御と二人でいくのは嫌だ」源「じゃあ金太をつれてったらよかろう」伝「だれでも一人いくならええが、二人ぎりでおういうするちゅうはよくねえ」

これから金太が案内で、おまつと伝助が吉原にいくことになった。こちらは江戸町二丁目の兵庫屋に身を売りました柳橋のおとわ、音羽滝といってすこぶる全盛、そのところへ長左衛門の女房おまつと、丹波屋の下男伝助つれだってきて、丹七のこのたびの一件逐一物語りをいたし、いやでもあろうが、敵同志の三河屋喜蔵の懐へ立ちいり、様子をさぐってもらいたいと、おまつと伝助が代わる代わる言葉をつくしての頼みに、ついに覚悟して、

と「ようござます、身を切られるほど辛い話でありんすが、丹七さんのおためといえば、身を汚しても心は汚しいせん、三河屋の懐をさぐって、一々横山町の姐さんのところへ知らせいす。伝助さんといいなんすか、こののちとも若旦那のことはくれぐれも頼みんす」

と涙ながらの話。

さて密談を遂げて帰る。さあこれから音羽滝はしきりに喜蔵を厚くもてなして様子をうかがう。

一方伝助は、番頭彦兵衛に絶えず目をつけております。

番頭彦兵衛の変死

するとちょうど六月二日の夜がふけ、伝助、台所のわきの自分の部屋、狭い室の中で太いため息、

伝「一日も早くどろぼうを捕めえて、奉行所へしょっぴいていって、小旦那を帰してもらわなけりゃあならねえ」

と寝る間も丹七のことを案じている。折しも抜き足差し足忍んできた者がある様子、はてなと伝助が寝たふりをして部屋の外をじっと見ると、番頭の彦兵衛だ、身動きもせずに先方のようすをうかがっている、と勝手元を開けてそっとでていく、そのそぶりがいかにもおかしいから、すぐに伝助も部屋をいで、手ぬぐいで頬かぶりをいたし、草履をはいて後をつける。そんなこととは気もつかず、彦兵衛はやがて三丁目まできて三河屋喜蔵の門にたってトントントンと戸をたたく、かねて約束でもあったのか、しばらくするとガラガラッと大戸を開けて、

喜「ああ彦兵衛さん、お待ち遠おでございました、……あとをしっかりお締めよ、遅くなると

今夜は帰らないかも知れないから、……さあいきましょう」

喜蔵と彦兵衛が肩をならべて、小声でひそひそ話をしながらいく。

伝「はってな、家と敵同志のようになった喜蔵のやつとばかに仲がいいぞ」

そのあとをつける伝助、本石町から真っ直ぐに伝馬町へ曲がりまして大伝馬町、俗に大丸新道、このころこの辺は粋な新道で、ちょっとまあ稽古の師匠とか、囲い者などありました静かな横町、一軒新しい家がある、家は小さいが、ちょっと小意気にできていて、まだ造作全部調わないというようす、その表へ立ってトントントンと合図をすると、間もなく年のころ二十二、ちょっと愛嬌のある女が入り口を開ける。

喜蔵、彦兵衛の両人は奥へとおる。伝助は表からのぞきますと下女もいない、いまの女が一人暮らしらしゅうございます。

伝「はてな、いよいよこりゃあ喜蔵と彦兵衛が怪しいぞ、どうか話をする様子を聞きてえものだ」

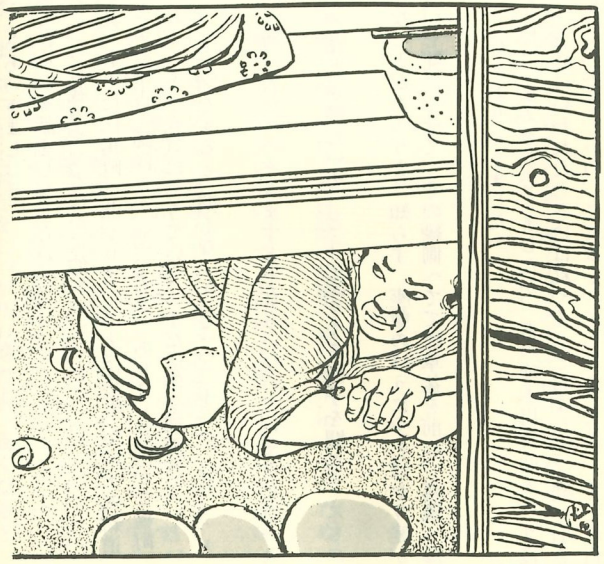
そっと縁の下へはいり込む。かようなことがあろうとは知らず、座敷のほうに少しばかり庭があって、暑いころでございますから雨戸を開けさせて、その縁側へでて煙草盆を前に、喜蔵、彦兵衛がひそひそ話をしている。

喜「いや彦兵衛さん、どうやらことが八分どおりいきました」

彦「さようでございます、まあこうなればてまえも安心しましたが、あの晩木川良助という役人がきて、彦兵衛刀をどこへやったと、突然にいわれたときには私やぞっとしました。庭へ引きおろされて、散々に打ちたたかれ、苦しいの、恐ろしいの、これはとってもたまらない、すでに白

状しようとしましたときに、丹波屋の旦那のお陰でまあ危ない所を助かりました。しかし私も遠足を止められておりますし、また飯炊きの伝助というやつが、私の気のせいかなんとなくこのごろでるにもはいるにも私の様子に目をつけているようでございます。ご存知のとおり田舎者で、世間の事はなんにも存じませんが、ただもう丹七の身が大事であるということばかりいっております。あいつがどうも危なくってかないません」

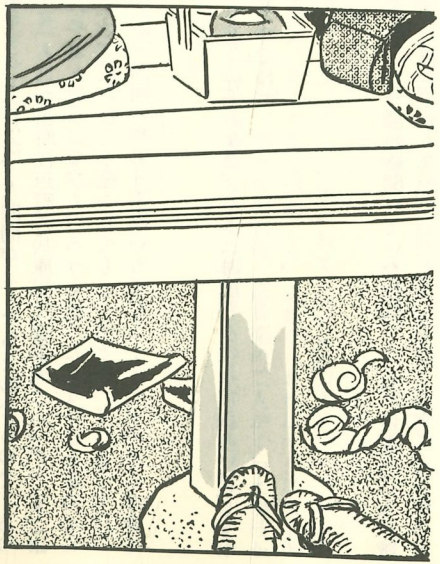
喜「なにそれは気のせいだよ、田舎者の飯炊きがなんでそんなところへ気のまわるものじゃありません、矢張りおまえさんが疑心暗鬼というようなことでございましょう」



彦「まあそれなればようございますが、私もあれが、……（火鉢の前に、茶を入れる支度をしている女の方を指さして）深川の檜下で小竹といって左褄を取っておりました時分、ふとしたことからお互いに夫婦といい交わしましたが、しかし主持ちの身分でなんともできないところをあなたが大金をだして身請けをして下すって、家までもたせておもらい申した、二人ともあなたのご恩は決して忘れません。されば身を粉に砕いても、あなたのためにはつくさなければなりません」

喜「なんですなあなた、そんなことはどうでもいいじゃありませんか」彦「悪いと知りながらお屋敷からおあずかりのあの安綱の刀、私が盗み出し、あなたへお渡しして、この家へもってきて、簞笥の引き出しにしまってあるということはだれ一人気がつきません」

喜「さよう、そのうちに加藤の旦那が、鹿児島へお帰りのとき、この刀をお持ちになって終え



ば、いくら大岡越前守が名奉行でも、どうしたって知れっこなし。さすれば丹波屋の身上は立つ気遣いなく、まあこれが潰れるとなれば、つまり今日の丹波屋の代わりに私がなる、そしてお前さんが三河屋の格になりお互いに相談相手、お前さんは小竹と末永くそい遂げるという、まずそうなればまことに重畳、あははは」

彦「ありがとう存じます。なにからなにまでのご親切、どうかそう仕遂げたいものでございます」喜「ときに彦兵衛さん、おかしな話をするようだが、人間間がよくなると妙なもので、あの柳橋のおとわという芸者ね」彦「へえ」喜「あれが当時江戸町の兵庫屋で音羽滝といって、すこぶる全盛、花魁になってみれば、今度はいやおうなしになびくだろうと思ったがなかなか私の心に従わない、こっちもそうなれば意地ずくで、振られても振られてもせっせと通っているうちに、ようやく私の親切が通じたと見えて、この三四回いやもう手厚いもてなし……どうですえ今夜これからつきあいませんか」

と誘われてみれば、彦兵衛も嫌ともいえず、

彦「はい、じゃおつきあいいたしましょう」竹「あなた、……三河屋さんのおつきあいで、……いってらっしゃい。……浮気なんてしないでね」

小竹にしてみればちょっとやけます。

喜「さあ出掛けましょう」

彦「後を気をおつけよ」

とこの二人はでていく。縁の下に息を殺して一部始終聞いていた伝助、たしかに彼ら二人が賊の本人と見極めがつきましたから、伝助は縁の下からまたはいだして、そのままどんどん駆けだした。伝馬町の通りにでてみますと、向こうへいく二人づれはたしかに彦兵衛と喜蔵、はてどうしようかと、考えていましたが伝助、これから道を変えてとっとと横山町二丁目の鳶頭長左衛門方へまいりまして、いま聞いた次第を物語った。

長「じゃおまつ、おとわさんがいい塩梅にあつかったに違いねえ、明日の朝でなけりゃあ帰らねえから、別にやきもき思うにゃ及ばねえ。そこでだな伝助さん、これからおれはすぐに八丁堀の木川の旦那のところへいってこの話を申し上げ、明日の朝喜蔵、彦兵衛の二人がくわえ楊枝かなんかで、大門をでるところを、御用と縄をかけちまやあなんの手間ひまもいらねえ、おまえはここで待っていねえ」

伝「今夜縛らねえでも大丈夫かな、じゃそうしてもらおう」

新吉原から急の使い

そこで長左衛門は手早く着物を着なおして、子分の金太に提灯をもたせ八丁堀の木川良助の宅を指してどんどん急いでいく。伝助はおまつがくんでだしたお湯を飲んで、長左衛門の帰りをまっていると、

×「ああそこだそこだ、ちょっと待っておくれ」

というのは長左衛門の家の前、ぽんと駕籠が一挺おりた、ドンドンドン。

×「今晩は……」ま「はい、なんでございます」
入口の戸をがらりと開ける、
×「えー兵庫屋の庄吉でございます。花魁から急の御用で、駕籠を飛ばしてまいりました、へえお手紙……」ま「おやそう、大きにご苦労様」
その手紙を行灯の前へもっていって、開封して見ておりましたおまつ、
ま「大きにご苦労さま、いまこちらから、人がまいりますからそのつもりで、少し綾なしていて下さいと、別にご返事は上げませんが、花魁にそのとおりいっておくんなさい」庄「かしこまりました」ま「ああちょっと待って下さい」
さすが俠みの頭の女房、なにほどかのお金を紙につつんで、
ま「大きにご苦労さま、ほんの煙草の代」庄「恐れ入りました、毎度頂戴いたしまして、どうぞお早くお願い申します」
と兵庫屋の使いは駕籠を急がして帰る。
伝「姐さん何だね」ま「伝助さん、いま花魁から手紙がきたんだがね、妙なことがあるよ」
伝「どうしただ」
ま「先方へいったのは喜蔵一人だよ」伝「いやそんなことはねえ」ま「花魁からの手紙はそうだよ」
伝「ああそれじゃあ彦兵衛め途中から喜蔵をまいて、大丸新道の女のところへ帰りゃがって、喜蔵一人で吉原へいったのかな」
ま「それがね、喜蔵の着物に血がついているって。花魁がそれで感づいてどうもおかしいから、

早く来てくれという手紙なんだよ」伝「さあこうやっていられねえ」ま「まあお待ちよ」
というおまつの袖を払って伝助、そのままここを飛び出して、八丁堀の木川の宅をさしてどんどん駆けてくると、ちょうど向こうから木川良助手先が二人、供が一人、それに長左衛門と金太、一方は御用と書いた提灯、一方は、に組と書いた手長提灯。
伝「やあ頭か」長「おお、なんだ伝助さん、どうした」
これをきいて木川良助が、
良「伝助か、いま長左衛門から万事きいたが、えらい骨折りだったの」伝「それどころでねえ、いま斯々だ、早くいってくれ」良「ええそうか、それ急げ」
とこの面々が急ぎに急いで吉原へ駆けつけました。伝助は先へ先へとまいりまして、早や日本堤、なにかにつまずいてたたたたっと前へめった。
金「どうした伝助さん」伝「金太、早く提灯をもってこう、なにかつまずいた、大きなものだぞ」
金「ななんだ」
といいながら例の提灯をつきつけて、
金「おっ伝助さん人だ……やあ斬られている」
伝助は倒れている死骸の顔をのぞいて、
伝「ああ金太、もうちっとこっちへ提灯をもってこう。……やあっ、彦兵衛番頭、……おい良助、早くきてみてくんろ、彦兵衛番頭が斬られてるぞ……」
良助も足を早め、その場へ駆けつけ、
良「どれどれみせろ、あっ殺られたか、正しく喜蔵が殺ったものだろう」伝「それに違えねえ」

無茶苦茶について、脇腹背筋の二ヵ所を深くつき急所にふれておりますから、もう手当のしようがない、死骸はそのままにしておいて、急げ急げといっそう足を早めて江戸町の兵庫屋へきて、三河屋喜蔵と尋ねると、音羽滝がでて応対をいたし、

と「ただいま出ました、あなた方が田町辺りですれ違ったかと思うころでございます、どうもようすがおかしゅうございまして、常になくそわそわしておりましたが、ことに右の袖に血がついているようす、怪しいと存じまして、すぐに長左衛門頭のところへ人をつかわしました。その私が怪しんだようすを悟ったものとみえまして、急に用があるからと申して帰ろうといたしますから、もう少しと引き留めましたが、袖を払って飛びだしました、まだ遠くもまいりますまいと思います」伝「ああいけねえなあ」

と伝助も長左衛門もがっかり。

それから一行はまた吉原をでまして、どんどん急ぎに急いで、小竹の家へ乗り込んできてみるとこはいかに、締まりもなし、行灯もつけっ放しになっており、簞笥用簞笥ともに引き出しが取りちらしてあって、なにさま目ぼしい物を持って逃亡したあとのようなありさま。さいぜん縁の下に忍んでいたときには、簞笥の引き出しに安綱の刀がしまってあるとたしかにいった、その簞笥の引き出しに刀はさておき小刀もない。それからすぐに、石町三丁目の三河屋喜蔵宅を調べますと、手代由兵衛という者が、

由「さようでございます、主人は今しがた立ち帰りまして、なにかお屋敷の御用で急に出立しなければならない、当分留守になるから、後を頼むと申して、取りいそいでただ今出かけました」

良「ああ残念至極」

夏の夜は明け易く、もう東が白んできました、伝助はがっかりして、ただ腕を組んで涙をこぼすばかり。木川良助はそれより奉行所へまいりまして、ご登城前に越前守さまへお目どおりをして、昨夜から今朝へかけての始末を遂一申しあげました。

さては三河屋喜蔵が露顕をおそれて、同類彦兵衛を殺害したに相違ない、その彦兵衛の妾であった小竹という者がなんで逃亡したかは不明だが、逃亡のときに刀を持って逃げたに違いない、それにしても喜蔵を押さえてみなければわからない。で喜蔵は家をでても、未だ江戸の内を離れまい、隠れるところはたぶん島津家留守居役加藤佐太夫のもとならん、ほかに忍ぶところはないと越前守お見込みになりました。

どろぼうは上か下か

そこで直ぐに越前守から島津家へお掛け合い、

伯耆安綱紛失の一条、段々取り調べ候ところ、貴家出入り町人三河屋喜蔵の所為と相わかり候。しかるに露顕を恐れ、丹波屋丹右衛門手代彦兵衛と申す同類の者を日本堤において殺害いたし、御尊邸へ逃げ込み候由、確かに認めたる者これ有り候、さっそくお召し捕りお差し出しあいなり候や、この方より踏み込み召し捕り差し支えこれ無く候や、この段ご貴答に預かり度くお問い合わせ申し候。

と、書面をもってお掛け合いになりました。そして一方品川、新宿、千住、板橋の四宿問屋場へ、三河屋喜蔵の人相書きを回して、厳密に警戒なし、見当たりしだいに召し捕れと触れださせました。さあ島津家藩中おのおの奇異の思いをなし、万一右の喜蔵がご当家において召し捕りに相成る場合にはご恥辱この上もない、かくまったのはだれであろうかと、こうなると家中同士いわゆる共吟味。

三河屋喜蔵は佐太夫のところへ逃げ込み、佐太夫も今日の場合よんどころないから、かくまっておりますが、こうなりますと、自分の身の上が危ないからそのまま隠しておく訳にもいかない、その月の九日、どっと南風はげしく、吹き降りになりましたのを幸い、真夜中に戸棚の内にかくまってある喜蔵をそっと引きだし、

佐「定めし窮屈であろう」喜「恐れ入りました、いろいろご配慮をいただきましてありがとう存じます、いかがでございます」

佐「いやどうもだんだん詮議が厳しく薄氷を踏むの思いをしている、じつに風前の灯火とはその方が今日の場合、いかにも危ない、ついてはとてもここへおくわけにならんから今夜あらしのはげしきを幸い、当家を逃げろ、さあこの手形切手を遣わす、これをもっていれば鹿児島の城下へ入れるから、たとえ一期半期の奉公なりともいたしておれば、明年はこの方上へ願って国へ参り、その方の妻子も鹿児島へ引き取らせるよう道を設けてやる。そこで東海道筋はことに厳しいから、町人姿ではいけぬ、衣類大小ひととおりそろえてあるから、侍姿になって道中心着けてまいれ」

喜「まことに恐れ入ります、ついてはお言葉に従って私はお国へまいります、妻子の儀はよろしくご配慮を願います」佐「承知いたした、しかし喜蔵、ご門からでることはなかなか難しい、水

門口からでるようにいたせ」

喜蔵は急ごしらえの侍姿、ふだん差しつけない大小をさし、蓑笠を纏い、杉本嘉兵衛と申す佐太夫の家来に送られて水門口から忍びでました。もとより逃亡する体だから提灯はもちません。三田から田町、伊皿子下、高輪の大木戸海岸、あらしの中を、笠を取られまいとへりをおさえて、チャッチャッ急ぎ足にまいります。八つ山下から品川新宿へかかってまいりますと、思わずどんと突き当たったものがある、双方無提灯で下を向いてきたから出合い頭、こっちから突き当たったという訳ではないが、

喜「失礼御免」

と避けていこうとするとたんにかの男が、

○「どろぼう」

大きな声で呼ばった、こっちは侍姿、先方の懐へ手を入れた訳でもなし、賊とは何だととがめるだけの権式があるはずだが、もとより本当の侍ではない、ことにいま逃げようというところだから、喜蔵がどんどん逃げだすやつをどこまでも追いかけて、とうとう追いついて、

○「この野郎太えやつだ」

と後ろからしがみついた、本当の侍なら引きはらって、それがためにさしてる大小、抜きうちにしても差し支えないが、気がてんとうしているから、抜こうという考えもなく、取っ組みあいがはじまった、しかるにかの者なかなか力強く、二三度揉み合ったかと思うと、喜蔵が組みしかれ、

○「この野郎太え奴だ、どろぼう野郎」

とこぶしを上げて、二つ三つ横面をなぐりました。

喜「無礼者、無礼者」

○「なにが無礼者だ、どろぼう野郎め、……おー問屋場役人どろぼうつらめえた、きてくんろ、問屋場役人、おーい……」

詰めている宿役人どろぼうをとらえたというから、御用と書いた提灯をもち、六尺棒などをたずさえ、五六人でてきて、

役「なんだなんだ」○「どろぼうつらめえた」

役「どれどれ」

と各〻提灯を突きつけてみると立派な武士。上になってるのが百姓体の男。

役「これやどっちがどろぼうだ」

○「おらがつらめえただ、下のがどろぼうだ」

喜「これ無礼をすると許さんぞ、島津薩摩守家来だ、宿役人無礼があると勘弁いたさんぞ」

○「あれこの野郎どろぼうだよ、薩摩の家来でねえ、どろぼうに違えねえ、押っちばる、縄貸してくんろ」

喜「無礼をすると捨ておかんぞ」

さすが薩摩さまのご威光は広大なもの、宿役人も縄をもってくる者もなければ、手伝う者もない。

ふんどしで喜蔵を縛る

役「なにかの間違いだろう、泥棒だというが立派な武士だ」

○「立派な侍でも、この野郎どろぼうに違えねえ、縛るだから、縄を貸せちば」

喜「これ縄を貸してはならんぞ、無礼があると捨ておかんぞ」○「この野郎生意気のことをぬかしやあがって……」

と折りかさなっていた男が、宿役人のさしだした提灯の灯火に下の武士の顔を見て、

○「やあこれだれだと思ったら三河屋喜蔵だな、この野郎……」

喜蔵もおどろいた、因果と丹波屋の飯炊き伝助につかまり、南無三といよいよ縮み上がってしまった。

伝「まああありがてえ、神様のご利益は大したものだ、うぬを縛るためにどのくらいくろうしたか知れねえだ、あーありがてえ」

伝「問屋場役人縄貸せっちば。宿役人がこの人間知らねえでどうする、町奉行から人相書きがまわっている三河屋喜蔵という悪人はこれだぞ。それを縛ろうというに縄を貸さねえとは飛んでもねえことだ。おらは丹波屋の飯炊き伝助ちゅうだ」

宿役人これには驚きました。

役「ええ石町三丁目の三河屋喜蔵、それは大変だ……」伝「なに、こうなったらおらも意地ずくだ、貸さねえ縄なら借りねえ」

と左手で押さえて右手を懐へ入れて、もじもじしておりましたが、締めておりました下帯をずるずると引きだして、後ろ手っこに縛って、大小を取り上げてしまいました。さあ伝助喜ぶこと限りがない。しかしこのまま引っ立っていくと危ない、万一のことがあってはならぬと考え、

伝「問屋場役人、なんでも構わねえから、この悪人三河屋喜蔵をあずかっておいてくれ、明日の朝役人が取りにくるから、それまで確かにあずかっておいてくんろ」役「委細承知いたしました、ご苦労さま、どうもお骨折りさまでございました」

伝「あずかりの一札を書け」役「はあ、なんと書きます」

伝「おらは無筆で字が読めねえから仮名で分かりやすく書いてくんろ、囚人三河屋喜蔵確かにあずかり申し候と、長いことは要らねえ」

問屋場役人も伝助のいうに任せて、そのとおり書きました。

伝「うむ、これでええ、確かにあずけたぞ」

伝助小躍りして帰りました。なんで伝助がこの辺りを往来していたかというと、前申したとおり、二日の晩に彦兵衛が殺され、喜蔵が行方不明になったについて、品川にこのごろたいそう繁昌する足留稲荷というのがあります。

このお稲荷さまを信心するとどろぼうまたは逃亡者なぞ、足をとめるというので、足留稲荷。二日の晩に行方不明になった喜蔵に遠く逃げられてしまってはならぬ、三日の晩から毎晩世間の寝静まったころはだしになってこのお稲荷さまへ参詣いたします。伝助が夜参りをはじめてから、ちょうど今夜が七日目、この雨風をおかして参詣の帰り道、暗いためにどんとぶつかったけれどもそのぶつかった人間を三河屋喜蔵とする由もない、首にかけた財布の紐が突き当たったとたんに、彼の刀

の柄頭へ引っかかった、喜蔵は気もつかない、柄頭にかかった紐と共にずるずると財布がぬけた、それに伝助は、懐へ手を入れて財布を引きだしたと思ったので「どろぼう」と声をかけた。まことに偶然のことでありますが、これを天罰というべきでございましょうか。

そこで伝助は、石町の主人方へ帰ってくるとちょうど夜があける、さっそく横山町二丁目の長左衛門のところへきて、

伝「頭、喜んでくんろ、昨夜三河屋喜蔵を捕めえたぞ」長「えー、どうして」伝「是々斯々」

長「そいつあえらいことをやったな」伝「それで品川の問屋場役人へ喜蔵をあずけてきた、夜明け方に一人で引ったててきては危ねえと思って」長「行き届いたものだ、感心感心」

伝「これから直ぐに八丁堀の木川の旦那のところへ一緒にいってくれ」長「ああいいとも」

伝「これはあずかり証書だ」長「なるほど、念が入っている。これなら確かなものだ」

それから長左衛門支度をして伝助をつれてやってまいりましたは八丁堀の木川良助の宅。

長「木川の旦那、丹波屋の伝助が昨夜品川新宿で三河屋喜蔵をつかまえましてございます」

良「えー、喜蔵をとらえた」長「さようでございます」

良「うーむえらいやつだな、どうして……」長「品川の足留稲荷へ日参して帰り道、斯様斯様是……」良「なるほど、さては薩摩の加藤佐太夫かくまい切れなくなって逃したものとみえる。伝助という者じつにあっぱれのやつだな」

長「喜蔵がしきりに薩摩の家来といいふらしますので、問屋場役人が縄を貸しません、伝助じれ込んで下帯で縛って、問屋場へあずけてまいったそうで」良「それは気の利いたことをした、連れてまいったか」長「へえ、門口に待たしてございます」

良「こっちへ呼びな、良助彼に手をついて礼をいいたい」長「はい承知をいたしました。……お伝助さんこっちへおあがり……」伝「はい御免なさいまし」

良「やあ、伝助こっちへとおれ。どうもその方の真実木川良助感服いたした、上役人も及ばざるその方のこのたびの働き、あっぱれ、木川良助このとおり手をついて礼をいう」伝「そう礼をいわれては困る、おらは上役人の手助けをしたわけでねえ、ただご主人さまを助けてえと思って、一生懸命どろぼうをとっつらめえただ、おらがえれえのではねえ、稲荷さまのご利益だ」

と、どこまでも木訥な忠義者でござります。

それから伊兵衛、金蔵、伝助ほかに供一人、以上の四人をつれて木川良助品川の問屋場へ出張、このたびは長左衛門はお供をいたしません、きてみると三河屋喜蔵も観念したものか、悄然としております。そこで手先が伝助の下帯をといて縄をかけ、問屋場をでて、高輪海岸を引きたってまいります。

さて木川良助は無事奉行所へ喜蔵を引きたてまいりました。越前守さっそくのお調べ、凶悪な三河屋喜蔵ももはや絶体絶命、自分の罪悪を顧みて免れざるところと覚悟をいたし、逐一白状いたしました、そこで直ちに入牢となりました。ところが肝腎の安綱の刀はどこへどうまいったものでございましょうか、かいもく見当がつきません。

はて？　この煙草入れは……

さてお話は少し前へ戻りますが、かの小竹は喜蔵、彦兵衛が出かけたあと、戸締まりを仕ようと手燭をもって辺りを見まわしておりますと、

竹「あらなんだろう、どうしたんだろう、……こんなところに煙草入れがおちてる……」

取り上げたのは、俗に淀屋という上方製の煙草入れ。

竹「はてな、旦那のじゃなし、三河屋さんがこんな煙草入れを持ってる気づかいない」

といいながら前の隠しのところをみると、鼠半切れの受取がはいっています、金若干、河内木綿一反、裏地一反、綿、袖口、仕立代、右確かに受け取り申し候、月日、丹波屋様内伝助様、上総屋として仕切り判がおしてある。

竹「おやおやどうしてこんなもの……ああふだんから旦那が、丹波屋の伝助というやつが気味が悪い悪いとよく話をしているが、あいつがきっと旦那のあとをつけてきて、縁の下へはいこんだに違いない、して見ると先っきからの話をみんな聞かれてしまったに違いない、さあ大変だ、どうしたらよかろう」

と、さすが女の狭い了簡、立ったり座ったり、思案にくれておりますところへ表から、

○「え－少々お聞き申します」竹「なんでございますか存じませんが、私共は昨今まいった者でございますからご近所のようすはわかりません、どうぞほかでおききなすって下さいまし」

○「え－更けておりまして、ご近所のどなたさまも閉まっていて、お宅さまばかり明かりがさしておりますからちょっとお尋ね申しました、深川檜下十二軒の尾花家の小竹という芸者が堅気になって、この近所に家をもったという話をききまして、それを尋ねてまいりました、ご存じならどうぞお教えなすって下さいまし」

竹「尾花家の小竹というのはあたしですが、あなたはどなたで……」

○「おおどうした妹、熊吉だよ」

とがらり表を開けてあがってきたのは蛇形の単衣物、白木綿の三尺、年齢二十七八、目のぎょろっとした眉毛の濃い、どこか凄味のあるやつ。

竹「おやまあ兄さんじゃないか、なんだっていま時分きたんだねえ」

熊「ひどい挨拶だなあ、おめえに会おうと思って尾花家へいって聞いたんだが、どうも曖昧のことをいって、まじめに教えやがらねえ、どうやらこの新道と当たりがついて、方々尋ねてちょうどいい具合に聞きあてた。ああ暑い暑い」

と傍らにあります団扇を取って、風を入れながら、

熊「まことにすまねえが、わざわざ結城からこうやって尋ねてきたんだ、ちっとばかり心配してくんねえな」

竹「冗談じゃないよ、大ていにしたらいいだろう、やれ五両だ、やれ十両だといじめられ、あたしはもうどうにもなりゃしない、大てい考えてもみておくれな、地蔵の顔も三度というたとえがある、一分のお金だってできないから、兄さん帰っておくれ」

熊「やい大きな声をするな、夜中じゃあねえか、地蔵の顔も三度というが、同じ仏様でもお賓頭盧さまは何度撫でられたって怒りゃあしねえ、親のねえ後は兄が親だ、そのお兄上さまがこうやって結城くんだりからおめえを頼りにして相談にきたんだ、一分の金も出来ねえというなあひでえ話だ、どうかしてくんねえな、金がなけりゃあ品物でもいいや」

竹「おふざけでない、親のない後は兄が親なら、ちったあ妹のことも心配しておくれな」熊「心配しているよ、心配はしているがこっちもご難続き、どうにもしかたがねえんだ」

竹「それどころじゃあない、こっちだって、いま大変な心配のことがあるんだよ。後生だから帰っておくれよ」

熊「なに、心配ごとがある、なんだ、おどおどしているようすが、ただじゃあねえと思ったが、はてな……」

傍らにあった長羅宇に煙草をつめて小竹の顔をきょろきょろみている。

熊「いってえどうしたっていうんだ、一つ腹から生まれた兄妹、さて兄さん、こういうわけだから五十両だしてくれ、百両だしてくれといわれてもそりゃあおれにゃあできねえ相談だ。ほかのことなら十分のものは五分心配しようじゃねえか。場合によりゃあ、体を張っても結末をつけてやらあ、話せねえこともなかろう、いってみねえな、膝とも談合ということがある」

竹「それじゃ話をするがねえ兄さん、じつはあたしの旦那というのは石町一丁目の薩摩さまの御用達、丹波屋という大家の番頭さん、彦兵衛という人なんだよ、ところが先方は主人持ち、いまのところなかなかあたしを身請けして、家を持たせる力はない、すると石町三丁目の三河屋喜蔵という人が、あたしの借金をぬぐって家を持たしてくれ、ゆくゆくは彦兵衛さんと夫婦にさせ

るつもりで、ここに住むことになったんだよ、けれどもこれにはそのわけがある、というのは三河屋さんに狂言があるんだよ、あたしたち二人に恩をきせ、彦兵衛さんを自分の手下にして丹波屋という家をつぶし、自分が今の丹波屋さん、彦兵衛さんを今の三河屋の格にしようという計画だあね」

熊「うーむ、よくねえな」竹「それについてこのあいだ薩摩さまのお屋敷から、丹波屋さんへ御用が下った立派な刀があるんだよ」熊「うむ」

竹「それを彦兵衛さんが盗んで三河屋さんへ渡したのを、あたしのところへもってきて、箪笥の下の引き出しにしまってあるのさ」

熊「箪笥の下の引き出しに、……なんという刀だ」

竹「伯耆安綱とかいうんだって、この刀がでなければ、丹波屋の家はつぶれてしまうんだよ。ところがその丹波屋にご飯炊きの伝助という田舎者がいて、そいつが始終彦兵衛さんに目をつけている。今夜三河屋さんと彦兵衛さんといろいろ悪事の打ち合わせをしているところを、縁の下へはいこんでその伝助が聞いていたとみえて、この煙草入れが庭に落ちていたんだよ、二人ともいないし、どうしたらいいかと心配していたところさ」

熊「それは心配だな、はてな待ちねえよ、おめえがなんにも知らなけりゃあ、たとえいったんは縛られてもお上の慈悲で許されるだろうが、そのとおり一から十まで知ってて見りゃあ、どうしたっておめえも同類、その伝助が飛び出していったとなると、まあおめえの亭主も三河屋さんも、いまごろは縛られてる時分だろうな、そうすりゃあすぐにお役人がこっちへきて、おめえも縛られるだろうな」

竹「あら嫌だねえ、まあ縛られたらどうなるだろう」
熊「そうさ、まさかはりつけにもなるめえけれども、三人ながら獄門は免れめえ、三尺高え所へ首を二つさらされるのが落ちだ」
竹「嫌だよ、あたしゃあ縛られて首を斬られるのは嫌だよ、夫婦になろうといったようなもの、一緒に獄門になろうとまで惚れちゃあいないんだからね」
熊「そんなら逃げちまえ、ここにまごまごしていりゃあ縛られるに違えねえ」
竹「じゃあ一緒に逃げちまおうか」熊「それがいいぜ」
竹「じゃ、兄さんあたしをつれてっておくれよ」
熊「そうと決まったら一刻も早く、持てるだけ持ってけ」
と四つの箪笥の引き出しをからにして、大きな包みをこしらえました。

欲に目がくらんだ熊吉の刃（やいば）

熊「その用箪笥の引き出しになにかねえか」竹「これあ三河屋さんからあずかった、煙草入れと紙入れ、家の人のもあるの」熊「そりゃあ結構だ、みんな金目のものだ」
とこれを小さく包んで着物の間へ入れ、
熊「ドッコイショ、こりゃあ重い」

竹「ああ兄さんちょっと待って、この刀はどうしよう」熊「そうそうそいつは、大事なものだ、うーんこれが伯耆安綱というのか、大したものだな、よし、こりゃあおれがあずかった」
三尺帯をかたく締めて、右の刀を腰にさし、
熊「ところでおめえ、いくらか金をもってるだろうな」
竹「そうさねえ、兄さん水くさいようだけれども、彦兵衛さんにも話さない、いざというときの腹きり金、用意はしてあるんだよ」
熊「いくらある」
竹「どうせ女だからいくらもありゃあしないけど、……封じてあるのが五十両」
熊「そりゃあ結構だ、だしねえおれがあずかっておく、小判というものは持ち重りのするものだ、五十両の金は女にゃあ荷になる」
竹「嫌だよ、これはあたしの命綱だからいけないよ、なに重いたってこのくらいのもの、自分でもっているからいいよ」
熊「そうか、それじゃおめえがもっていねえ、真っ暗にしてしまっちゃ、でていくのにちっと都合が悪い、一本灯心にしておけ」
小竹と兄貴の熊吉が、大丸新道を出て、浅草の方を指して走る。ちょうどこのあとへ三河屋喜蔵が飛び込んできた。喜蔵がでたあとへ木川良助、伝助などが駆けつけて来たのでございます。
享保（きょうほう）の昔のことでございますから、定回り臨時回りという同心などもありますが、今日のごとく総てが整っておりませんので、小竹と熊吉の二人は、無事にこれらの目をさけ、浅草見附から蔵前通り（くらまえどおり）、雷門（かみなりもん）を右に曲がって直ぐに左、馬道（うまみち）、田町（たまち）、日本堤（にほんづつみ）を越えて、山谷（さんや）から小塚原（こづかっぱら）までまい

りました。

熊「おおお竹、ここで少し休もう、あー暑かった」

首切地蔵の傍らへ例の大きな包みを下ろして、腰にはさんであった豆絞りの手ぬぐいをぱっとはたいて、この手ぬぐいをくるくる回して風を呼びながら、

熊「ああ暑い暑い、背中がびっしょりだ、たまったもんじゃねえや」竹「兄さん、これはなんだえ」熊「小塚原の地蔵さまだ……」

これから熊吉が小竹にさっきの五十両欲しさにねだりをかけ、小竹が聞かないので、脅すつもりで抜いた安綱で妹を殺すことになりました。

熊「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、ああ飛んだことをしてしまった、斬る気じゃあなかったが、一寸切っ先が触ってこんなことになっちゃった。なるほど大した斬れ味だなあ」

とどめを刺し、血をぬぐって鞘におさめ、星明かりで妹の死骸をつくづくながめ、

熊「ああたった一人の妹を、かあいそうなことをした、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

といいながら小竹の懐に手を入れて探ってみると五十両の胴巻き。

熊「まあしかたがねえ、これが形見だ」

かっての理屈をつけて自分の懐へ収め、例の大きい包みを引っ背負って人目にかからぬうちに立ちさろうとする。すると首切地蔵の陰からぬっと現れた一人の侍、暑中というのに破れた羽二重の素袷をきて、蠟鞘の大小落とし差し、大髻に結って、年のころは三十格好、ガサガサと小笹をかき分けて出たところは、芝居でする忠臣蔵五段目の定九郎みたような男。

武「待てっ」

熊吉のしょっている彼の風呂敷へ手をかけて、ぐいとひいた。

熊「ああ痛え痛え、なにをしやがる」と引かれたときに、右の手でのどに当たる結び目をといた、手をかけて引いたところを結び目をとかれたから侍はたたたと二足三足退いた。熊吉は、

熊「ざまあ見やがれ」

とそのまま包みを打っちゃりまっしぐらに千住の方を指して逃げさりました。あと見送ったこの侍、

「ああ忌々しいやつだ、五十両の金が懐に入ったを取り逃がしたは残念千万、しかしこの包みはかなり目方がある、これで当分寝ていて食える」

と、そのままにどこともなく姿を隠してしまいましたは何者でございましょうか。

宙に迷う名刀の行方

ここに八丁堀同心定回り木川良助の次席、山田郡平のせがれ郡次郎という同心、出入りの袋物屋幸次郎から、手に入れた立派な紙入れ、それを父親の郡平に見せると、これはただの品物でないとにらんだのはさすがに職掌柄、山田郡平しばらく息をつめて見ておりましたが、すぐに御用帖を取りだして、あっちこっち繰って、しばらく調べていた。

郡平「郡次郎」郡「はい」郡平「この紙入れは買えんな」郡「いけませんか」郡平「いかん、しかし結構なものがどうして手にはいった」

郡「なにか手がかりがつきましたか」

郡平「これは石町三丁目の三河屋喜蔵と申す者が丹波屋の手代彦兵衛の囲い者、伝馬町の大丸新道の小竹という芸者上がりの女のところへあずけておいた紙入れだ、そこへ丹波屋で盗んだ安綱の刀をかくした、しかるにその彦兵衛が喜蔵のために殺害され、喜蔵が召し捕りになって白状をしたが、かんじんの小竹という女の行方が知れなくなった、その喜蔵という者のあずけた紙入れ、煙草入れなど、金目のものをその女が持って逃げ去ったが、これはそのうちの一品であろう。してみるとこの紙入れので所をくわしく調べれば小竹という者のありかもわかる、いいものが手にはいった」

郡「さようでございますか、それは重畳でございます」

郡平「この儀については、じつはお奉行はじめ上席木川殿もひとかたならず心痛をしておられる、すぐに幸次郎を迎いにやれ」

ほどなく、幸次郎がやってまいりました。

郡平「この紙入れはどこから出たものだ」

幸「えー、それはよそさまでお払い下げになりました」郡平「それではいうが、この紙入れを持っておった者は、容易ならぬ大罪人、すぐにこれからお手当になる」幸「へえーっ……」

郡平「取り調べの上、その方が十二両で買った、その者が売ったといえば差し支えない、もし召し捕りになった者が、それは違っているといいたてるとその方も同罪だがよいか、それは承知だろうな」

幸「へえへえ、なんでございますか、その紙入れがへえ……、なるほどおどろきましたな」

郡平「この持ち主は人殺し、盗賊というような大罪人だな」幸「へえー」

郡平「どういう者から買った」幸「じつはなんでございます、浅草奥山の碁会所でしたしくなりました、阿部川町におります、播州三日月の浪人、秋月典膳というお侍から買いました」

郡平「うむ、その秋月典膳と申す者の宅はしっておるか」幸「二三度まいって存じております」

そこで、この幸次郎に案内させて秋月典膳という者を引きたて、だんだん取り調べると、

典「永らくの浪々にて暮らしの道に差し支えるところより武士として恥ずかしながら夜働き、千住小塚原首切地蔵のかたわらに忍んでいるところへ、若き女をつれし男、大きな包みを背負ってとおりかかり、ことに自分の忍びおる藪の傍らにその包みを下ろし、話をいたしている様子、いずれ痴情のための駆け落ち者と心得しに、左はなくして兄と妹、下総結城へまいって芸者になり云云とかれこれいいおるうちに、その兄が妹を殺害いたし、懐中の金を奪い、それより再び包みを背負いその場を立ちさろうといたしますゆえ私が藪の中からあらわれまして、包みへ手をかけて手もとへひくと、彼は手早くその結び目をといて、まっしぐらに千住の方へ逃げ失せ、私の手もとへ残りましたは右の包み、これを引っさげ帰りまして調べますと、女物衣類あるいは帯は心を抜いて皮だけ、ほかに小風呂敷へつつんだ紙入れ煙草入れなど五六点ございました、それを一品二品と売りはらって暮らしをいたしておりました、いまさら前非後悔誠に面目なく、この上はご法通りお仕置を願います」

とことごとく白状いたしました。よってこれは直ぐに送りとなり、取りあえず郡平から木川良助へ話をする、良助小躍りして喜び、それより木川山田の両人そろって越前守御前へでて、斯々

と申しあげました。してみるとその兄なる者は結城へ走ったに違いない、さては安綱の刀は正に結城にあるに相違ないと、これから木川良助が、かの小竹の兄熊吉の身元をすっかり調べて、直ぐに伊兵衛、金蔵ほかに供一人、以上四人にて結城へと乗り込んで調べるとすぐわかりましたので、ほどなく熊吉を捕らえ、刀とともに江戸表へつれてまいりました。

これはしたり薩摩家の抗議

さて木川良助、越前守へお目どおりをして委細を申しあげる。越前守ことごとくご満足に思召し、さっそくながら島津家へ使者をもって、

「かねがねお約束の伯耆三郎安綱のお刀、詮索行き届きたるにつき、おわたし申すべく、お係おそろいにてお受け取りにお出でこれ有り度」と申し送りました。このこと薩摩の太守もお聞きになってことごとくご満足。ここで伊集院筑前、石黒左衛門、松本利太夫、加藤佐太夫、富永彦兵衛、打ちそろって、南町奉行役宅へまかり出でました。まことに丁重な扱い、案内につれて一間へとおる、しばらくして正面の唐紙を開いて越前守継上下にてお立ち出でになり、まずひととおりのご挨拶あって、

越「かねがねお約束の伯耆三郎安綱の名刀、幸いに百日以内にして詮議届き、今日お渡し申すによりお受け取りあいなり度し」

と例の白鞘のままそれへ差し出しました。伊集院筑前これを受け取り、裏表刀心ことごとく改め、

筑「確かに安綱に相違これなく、お役とは申しながらこのたびのお骨折りいかにも恐れ入ってござる、主人においても定めて満足でござろう。近日改めて参上つかまつる、お預かりの神文はお返しいたす」

と、かねて越前守が薩摩家へ差し出しておきました例の神文を筑前から忠相殿へお渡ししました。

越「しからばお約束のとおり、安綱の刀正にお渡し申したる上は、もはやこれにて島津家より大公儀へ対してなんらの申し条はござるまいな」

筑「もちろんのこと」越「これ下席より二番目加藤佐太夫を召し捕れ」

と、越前守の一声に五六人ばらばらと現れ、加藤佐太夫の手を取ってぐいと引きたて、次へ引きこまれました。居流れたる面々、顔と顔とを見合わせて、もってのほかとおどろくうちに伊集院筑前、

筑「あいやお奉行、留守居役加藤佐太夫なんのために押さえられる」越「されば、出入り町人三河屋喜蔵と示しあわせ、斯様云々の悪計を企み、大公儀に対し迷惑あいかけたのみならず、同類彦兵衛を殺害いたしたる三河屋喜蔵を己が屋敷にかくまいしこと喜蔵の白状によって明白、その罪によって召し捕りました」

ところが、伊集院筑前なかなか合点いたしません。

筑「これはもってのほかの仕儀、たとえ、さようの罪ありとも、一応主人たる島津薩摩守へお掛け合いあってその承諾を得たる後、ご成敗いたされるなればいざしらず、ただちに召し捕るとは無法千万、佐太夫を召しつれざればこの席を立ち難し」

越「いやたとえどなたの臣たりとも罪ある者を奉行の職権をもって召し捕るに不都合はござらぬ。帰邸ならざれば、何日たりともそれに着座いたされよ。これにてとかく論ずる場合でない。一同立ちませえ」

いい放って越前守、つつつと畳を蹴立って奥へお立ち入りになりました。やむなく四人は三田のお屋敷へ帰りまして、殿様にお目どおり、安綱の刀を御覧に入れますと、太守まことにご機嫌よろしく、一同を見渡して、

太「佐太夫はいかがいたした」筑「今日越前守の処置斯様斯様にございます」

と申しあげた。お聞きになると太守憤然として、

太「うむ、不埒なる越前、この上は役人どもに掛け合うはこと面倒なり、征夷大将軍にお目どおりの節、直々にお掛け合い申して、もし越前、佐太夫を戻さざるにおいては、予にも相当覚悟あり、当家を蔑ろにいたす越前の所為このままにはすまされぬ」

と太守はなはだしきご立腹。

八代さま臨席した大評定

さて翌日、島津公にはご登城、吉宗公へご対面あって云々と申しあげ、

島「なにとぞ上様の上意をもって、佐太夫引き渡しまするよう、お声がかりを願いたく、万一

私の願い空しくあいなり候上はよんどころなく、江戸屋敷を引きはらい、国表へ立ち帰り、以後参勤の儀は御免をこうむりまする」

と島津公少し喧嘩腰にもちかけました。しかるに吉宗公は寛仁大度のお方でございますから、

吉「その儀は吟味の上追って沙汰いたす」

と軟らかくお受けになる。直ちに閣老方を召されてのご評議。これは佐太夫を島津家へ引き渡したほうが穏便であろうというので、閣老方から軟らかにその旨を越前守に説いた、温厚篤実の越前守でございますが、きっとかたちを正して、

越「はばかりながらせっかくの上意には候えども、町奉行たる役儀をもってこれに服することはあいなりません。たとえいかなるお叱りをこうむりますとも、佐太夫儀は島津家へ渡すことはなり申さず、これをそのまま島津家へ相渡すにおいては、天下の政治なにをもって相立ちましょうや。お町奉行のごときは有って無きがごときもの、元来島津家には古より問注所の設けありて、善悪を問わず自由に裁判を下すこと、これ大公儀を軽視いたするの行為、これを等閑にいたしまするは、これ天下のご威光に係わりまること、誓ってこの儀は越前役目として上意に服することあいなりません。ことに恐れ多くも征夷大将軍へ直々のお願い、万一願いかなわざれば、江戸屋敷を引きはらい、国表へ帰り、向後参勤御免をこうむるなどとは、天下のご威光を恐れざる申し条、いよいよもって不埒至極、参勤相怠るときは天下の大政に背きまする島津家、不肖越前上意を辱うし、ご陣代を勤め、鹿児島城を一脚のもとに蹴破り、しかして天下にご威光を示しまする」

と越前守大気焔を吐いた。越前守の議論を聞いて、ご老中松平左近将監

将「はばかりながら忠相の申し条道理に心得る、越前ご陣代をうけたまわれば、それがし先陣を仰せつけられたく、不肖たりといえども充分の働きをして、天下のご威光を示し奉る」

といい放った。そうなると、われもわれもと先陣を望むご譜代席の面々えらい勢い。吉宗公まことにご満足に思召して、なおだんだんにご評議の上、とにかく島津家の家事不取り締まり、これを取り調べるため改めて大公儀より島津家へ老臣一人、差し添えの者一人、お白書院へまかり出ずべきのご沙汰を下された。いよいよ薩摩の太守お怒りはなはだしく、

太「この方公儀より呼び出されるいわれはない、出張するに及ばぬ、無礼至極、はばかりながら豊後守忠久以来の名家、太閤秀吉には降参したが徳川とは君臣でない、天下の客分である」

という意気組み。そこで元老会議ということになりました。

島津頼母という老臣、このたびの一件について、色々心配、取り調べるとまったく佐太夫が三河屋喜蔵という者におだてられて、かかる大事にいたったので、非はもとよりこちらにある、家事不取り締まりに違いない、ということが分かった。そこで評議の席に連なって、

頼「不肖なれども明日のお役、頼母承りたく、ただ越前を不埒とのみ申されず、佐太夫に罪あるに相違なく、彼の口書爪印というものが、奉行越前の手にあるやいなや、明日拙者出張いたして聞きただし、幸い佐太夫の口書爪印越前の手にあらざれば、気の毒ながら奉行越前に切腹を迫りまする。申さば理を非にまげ佐太夫を当家に引き取ることにつかまつります。とにかく明日私まかり出でるでございましょう」

と頼母が自ら望んでその任にあたり、充分に覚悟をして、島津薩摩守の威光を輝かそうという考え。その翌日刻限を違えず松本利太夫差し添え、評定所へ出頭いたし、お目付方のご案内にて

席へとおる。

さて、今日は二百六十余大名の首席たる島津家の家事不取り締まりを調べるのでありますから、八代吉宗公ご出座、諸侯方をお聴き役としてそれへ列席をもとめられる。一人一役の堂々たる方々綺羅星のごとく居流れました。薩摩の家老島津頼母時に五十八歳、行儀霰の麻上下をつけ席につく、いささか下がりまして差し添え松本利太夫これも行儀霰の麻上下にて控え、ここにいよいよ御前調べとあいなります。大目付松平相模守お席を進めまして、

相「島津薩摩守老臣島津頼母、その方に相尋ねる儀これあり、町奉行越前守へ答えをいたすよう」

頼「恐れながら主人薩摩守家柄の儀は右大将頼朝卿より賜りたる日向、大隅、薩摩三国を領し、徳川家より国主三家とご会釈下さる家柄、お町奉行へお答えの儀平に御免を願い奉ります」

ご老中のお調べなればお答えするが、町奉行の尋ねでは答えないと断った。そのとき真っ先にありましたる大岡越前守忠相大音に、

越「控えろ頼母、三国拝領の御朱印はいずれより賜りたるや」

この問いには頼母が答えないわけには参りません。これつまりつりだされた形。

頼「征夷大将軍より拝領つかまつりました」

越「しからば征夷大将軍の上意をもって、越前相尋ねよとのご沙汰をこうむり、忠相吟味いたすに、これに答えられぬとはなんぞや。お町奉行たりといえども、今日上意をもって、薩摩守家事不取り締まりを調べるうえは、身分の高下を論ずべからず、第一加藤佐太夫と申する家来、重々の不届きこれあるによって召し捕った、しかるにこれを係、越前の過ちとは心得難し」

頼「これは意外なる上意を承ってはなはだ迷惑、右加藤佐太夫に罪あって召し捕り――との御意に候え共、いかなる罪あるや、つまびらかに承りたし」

越「されば、佐太夫と申する者出入り町人石町三丁目三河屋喜蔵と申す者と示しあわせ云々斯斯」

と佐太夫の罪状、召し捕りになった委細を申し渡される。

越「これをもって家事不取り締まりとはいわずや。しかるに大公儀に対しご難題を申し掛け候段不埒至極、一々答えあるかどうじゃ」

頼「伺います、右佐太夫儀罪状明白とのこと、ついては本人口書爪印の一覧を願いとう存じます」

さすがの忠相ちょっと絶句いたしました、と申すは罪は明白だが、まだ佐太夫の口書爪印が上がっておりません。

頼「その口書爪印の一覧をお許し下されたい、加藤佐太夫、まさかかかる不都合あるべしとは存じません。右口書のあらざる上は、はばかりながらお奉行の粗忽のお調べと存じます」

いざと頼母が少しく席を進めました、前日理を非に曲げてといったのはここでございます。将軍吉宗公初め重役一同互いに顔を見合わせました、かかる場合にいたって越前守絶句いたしては、忠相一人の恥辱でない、大公儀の恥だ、このとき越前守、

越「その口書はいまだ手元にあらざれども、すでに罪明白である、ただちに当席において取り調べるによって、それを聴聞いたすよう」

直ぐに佐太夫お呼び出し、

越「佐太夫、その方出入り町人喜蔵と申し合わせ、丹波屋手代彦兵衛と申する者を同類にひき入れ、安綱の刀を盗ませ、丹波屋一家を滅亡いたさせんとなし、ことに右喜蔵が彦兵衛を殺害いたして逃げきたりたるを存じの上、その方がたへかくまいたる件、これにおいて明らかに白状いたせ」

島津頼母佐太夫をにらんで、いうな白状するな、いわなければ越前守をこの場で押さえて、お家のご威光を示し、その方の罪を免れさせてやる、という心を目つきで知らせる、越前守もまた油断なくその辺に目をつけておりましたが、頼母のようすをみて、こやつ味をやるな、その儀ならばと上手をこしてかかった。

越「いかに佐太夫、その方一人の不心得より今日のご評定、まことに恐れ多いことではないか、かつ主家には汚名をきせ、武士としては面目あるべき、恥を知らば潔く白状いたして罪に服せ、家老頼母その方に対して、口にこそいわねど目配せをもってその意を示すがわからぬか、頼母の忠義に恥じて罪に服せ、どうじゃ」

島津頼母おどろいたが、いってはならぬぞとは申されません、頼母はそのまま頭を下げる、さあ佐太夫いよいよ迷い、しばらくはお答えに苦しんでおりましたが、前非を後悔しておりますところとて、もはや包み隠そうという意気もございません。

佐「はなはだ恐れ入りました、かかるお席において申しあぐるも汗顔の至りに候え共、酒興に乗じ、斯々斯様の次第……」

と前々申しあげた顛末をことごとく白状いたし、ここで直ぐに口書が上がりましたから、佐太夫はそのまま元の揚がり屋へ下げ、

越「頼母、ただ今佐太夫白状いたしましたる趣逐一承ったであろうな」頼「はっ」

越「これをもって佐太夫の罪は明白である」

頼「はっ……」

このときお側御用加賀井筑後守へ将軍家よりなにか上意が下りました。加賀井殿正席に直って、

筑「上意、島津薩摩守家事不取り締まり取り調べ中、越前守老中格申し付ける……」

越前守ありがたくお受けをいし、

越「追って呼び出し吟味いたす。今日は立ちませえ」

名判決で大団円

頼母不面目ながらよんどころなく差し添えの者と共にお席を下がりました。半途にしてお下げになりましたのは、越前守もあえてことを好まない、急所を押さえておいたなら、あるいは他からご仲裁が入るか、また頼母も立派な家老、なんとかよき策を施すだろうというお考え。しかるに頼母は三田のお屋敷へ引き上ぐるや否や、君公へお目どおりをいたし、

頼「残念ながら今日のお調べ斯々云々、いかにもご当家の不面目にござりまする。この上はすみやかに江戸お屋敷を引き払い、お国表へお帰り遊ばすよう」

と申しあげました。太守においてもことのほかのご立腹。

太「あまりと申せば大公儀が島津家を蔑視いたする段忍び難し。そうそう江戸を引き払うであろう」

直ちに頼母は命を受けて、五百人の同勢を率いて、三田のお屋敷より高輪通り、品川と順路鹿児島を指して引き揚げる。しかるに若殿修理太夫殿、これをお聞きになりまして、父君に対して、

○「このまま帰国というははなはだ穏やかならず、まずお考えあるように」とお諫め申しましたが、大殿さまいっかなお聞き入れがない、ところへ、伊達中将吉村侯お出でになりました。じつは仙台さま、今日のご仲裁をなさる思召し。太守も仙台侯のご仲裁とあってみれば、無下にもお断りなりかねますが、すでに頼母が一部の家来を率いて出立のあと。そこで吉村侯には、家臣柴田九郎次をはしらせて、頼母を引きかえさせました。

そこでいろいろ伊達さまがお骨折りの末、溜まりの間へご相談を持ち込みまして、だんだんご相談にあいなりました結果、第一、松平薩摩守隠居、若殿修理太夫殿ご相続の事、第二、国主諸侯首席島津家、次席へ下がり、次席松平加賀守をもって首席となす事、第三、問注所取り壊しの事、この三ヵ条大公儀よりもちだされ、薩摩家においてもついにこれをご承諾にあいなりました。大公儀においても一歩譲り、罪人たる加藤佐太夫をそのまま島津家へお下げ渡し、これで薩摩の一分もたち、すぐに佐太夫は薩摩へ護送、直ちに切腹、家断絶、もとといえば一婦人のことからかかる大事をひきおこしました。戒むべきは色欲の道でございます。

さて越前守は最後に及んで、丹波屋一家をお呼び出し、今日でいう宣告でございます。第一に

丹波屋丹右衛門、続いて召使伝助、横山町二丁目蔦頭長左衛門、新吉原江戸町一丁目兵庫屋抱え音羽滝、手代徳兵衛付き添い、またご牢内より引き出したる石町三丁目三河屋喜蔵、並びに木川良助が結城において召し捕りました、玉吉、九助、熊吉をお白洲へお呼びだし、

越「石町三丁目家持ち丹波屋丹右衛門、その方儀去ぬる四月七日、安綱の刀紛失の節、同心木川良助取り調べに及び、手代彦兵衛を吟味いたし候ところ、自ら証人となりて上役人の調べをさまたげ候段、重々不埒につき、家財欠所申しつける。召使伝助、その方儀刀紛失の節、主人の身の上を心痛いたし、丹七は賊ならずと訴え、なおまた喜蔵、彦兵衛の悪事をききだし、かつ品川宿において喜蔵を召し捕り訴えいで候段奇特に思召し、鳥目五貫文下しおかる、ありがたく心得よ」

役人がうやうやしく伝助の前へこれを下さる。伝助むっくり頭を上げて、

伝「おらはもらわねえぞ、早く小旦那をだせ」

越「うむ、さもあろう、よう申した、丹右衛門せがれ丹七を呼び出せ」

定めて長く牢内へ入れられていたから、憔悴脱落して水色のお仕着せでお白洲へ引き出される丹七の様子を見れば、湯あみ梳り血色もよく、立派な羽織袴の服装、

越「伝助、主人丹七はその方へ引き渡す」

伝助これを見ると、思わずうっと声をあげて泣き出しました。

伝「やあ小旦那さま無事でござえましたか、おまえさま病気にでもなりゃあしねえかと思って太く心配しただ」丹「伝助よくききなさい」

といって丹七から、はじめは牢内の苦しみをするものと思ったが、おまえを捕まえたのは罪人をはかるためであるというので、三度三度の食事から何から何までいたれり尽くせりのお扱い、まことに恐れ入った……と話をきいて伝助、

伝「へえー、御免なせえ、御免なせえ、おらが悪かった、そういう深え了簡とは知らねえで、一ぺんの腹立ちまぎれから、天下の役人に目違えなぞとご無礼を申して済まねえ、どうか御免なすって下せえまし」

と白洲の砂利へ頭を摺り付けて詫び入りまする。このようすを御覧あって、越前守ご満足に思召し、

越「丹七、じつにこの伝助と申す者は目に一丁字も弁えざれども、主をたいせつに思うの念は奇特の志じゃ、普通の召使と思うなよ、いたわり取らせえ。伝助、その方主人に対しあっぱれ忠義の者である。しかるによって青縞五貫文のご褒美を下さる」伝「へえありがとうぜえます」

越「なお大悪人三河屋喜蔵を召し捕るまでのその方の苦心は、上役人の御用の端を勤めたると同様、その儀について褒美を取らせたいが、何か望みあらば申せ」伝「へえ、大旦那の家財欠所ということ、これがまことにお気の毒でなりません、どうかそれ勘弁して下せえましな」

越「道理である、しかしこの儀は町奉行越前が一存をもって許すというわけにもあいならん、ご重役へ願い遣わし、追って沙汰いたす。横山町二丁目鳶頭長左衛門、その方儀丹波屋召使伝助と心をあわせ、丹七の儀につき種々尽力いたし候段奇特により、ご褒美として鳥目五貫文下しおかれる」

長左衛門有り難く頂戴いたす。

越「新吉原江戸町一丁目兵庫屋抱え音羽滝、その方丹七のために三河屋喜蔵を計り、長左衛門

方へ内通いたし候段、奇特によりご褒美として鳥目三貫文下しおかる」

これもありがたく頂戴いたしました。

越「兵庫屋手代徳兵衛面を上げえ」徳「へへえ」越「音羽滝なる者はいったん泥水に身を沈めしといえども、あっぱれ貞節なる者、丹波屋方より音羽滝の身の上につき、なにか掛け合いなどこれある節は、もっとも親切を旨として扱い遣わせ」

越前守は粋なお方だ、このまま遊女勤めをさせておいては音羽滝という女はじつに気の毒なもの、いずれ丹波屋から身請けの相談があるだろう、そのときには親切に扱ってやれというご注意。

伝「恐れながら申しあげます、主人治助病気につき、今日私名代として付き添いまかりいでましてございます。もし丹波屋より相談のございました節は、精々親切に扱いまするでございます」

越「そうもあろう、丹右衛門、音羽滝なる者は、あっぱれ貞節なる者である、その方よく勘弁して縁を結んでつかわすがよかろう。あるいは越前媒妁して取らせてもよい」

丹右衛門はじめ一同ありがたくお礼を申しあげる。

さて石町一丁目三河屋喜蔵は死罪獄門、家財欠所、玉吉、熊吉、九助の三人はことごとく死罪獄門にあいなりました。

ここに気の毒なのは三河屋喜蔵の遺族でございます。主人喜蔵の心得ちがいから、相当の身代もつぶれ、すっかり零落した家族の者は、突然に箸一本持たない乞食同様な有り様となり、身寄りの者がありましても、世間をはばかって寄りつきません。

そこをお考えになった越前守さま、あまりかわいそうだというので、いったん欠所になった財

講談名作文庫　3
大岡政談
昭和51年3月10日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21
郵便番号 112　振替　東京3930
電話　東京(03)945－1111(大代表)
編　集　講談社出版研究所
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　東洋印刷株式会社
製　本　株式会社国宝社

Printed in Japan　©KODANSHA 1976
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

産の一部を遺族の者に下し置かれましたのは、まことにご慈悲の扱いでございます。

その後、越前守よりご老中へ願いまして、いったん欠所になりました丹波屋の家財ことごとく召使の伝助に下さるという名目で、もともと通り家が立ちましたので、一家の喜びはひととおりでございません。薩摩さまでも、まことに気の毒に思召し、旧のごとくお出入りが叶い、万事好都合よろしくあいなりました。

そこで、兵庫屋方へ、音羽滝こと本名おとわの身請けの掛け合いに及びますと、兵庫屋治助も吉原より、このような貞女があらわれたのは喜ばしいと、越前守の仰せのようにすべて親切に扱い、自ら親元となりまして、丹七方へ嫁入りをさせました。

伝助は、もとより文字もなければ算盤も知らず、ただ質朴な田舎者でありますから、家を興そうとか、金を貯めようなどという欲もございません。よって丹七がこれをおじとして楽隠居させ、近くにおいてたいせつにいたし、生涯を気楽に送らせることにあいなりました。

そのうち、丹右衛門夫婦も他界いたしましたので、その後は丹七おとわの夫婦が、一生懸命に家業にはげみましたから、丹波屋はますます繁昌いたしました。

ここに大岡政談の中の「音羽丹七」の一席は大岡さまの明快なお裁きもさることながら、訴えられた身内とその周りの人々のひとかたならない力添えによりまして、あわや迷宮入りになるかと懸念されましたこの事件も、昔風に申しましてめでたく大団円とあいなりました。

いついかなる世に悪の栄えるためしなく、古より人の性は善なり、その結局に至りますまでは、棘の道あり、山あり、川あり、いくつかの難渋の事件はありましても、天地神明に対して恥じないところに、最後の勝利は訪れるものでございます。

（おわり）

講談名作文庫

1 真田幸村 名将智謀
2 水戸黄門 漫遊洒脱
3 大岡政談 明智度胸
4 柳生旅日記 剣豪一代
5 赤穂義士銘々伝 忠臣苦節
6 太閤記 風雲痛快
7 鼠小僧次郎吉 義賊仁侠
8 いれずみ奉行 天網恢々
9 猿飛佐助 神出鬼没
10 一休和尚漫遊記 頓智飄々
11 由井正雪 正義革命
12 快傑自来也 妖術変幻
13 荒木又右衛門 武勇仇討
14 伊達騒動 波瀾万丈
15 天保六花撰 江戸の華
16 弥次喜多道中記 珍妙失敗

各巻　320円　挿絵多数入り